注

① 『尊卑分脈』『千葉系図』
② 『玉林寺文書』
③ 『河上神社文書』
④ 同　右
⑤ 『今川氏系図』
⑥ 同　右
⑦ 『河上神社文書』
⑧ 『千葉系図』
⑨ 『武雄神社文書』
⑩ 『三浦家文書』

四　戦国時代と佐賀地方

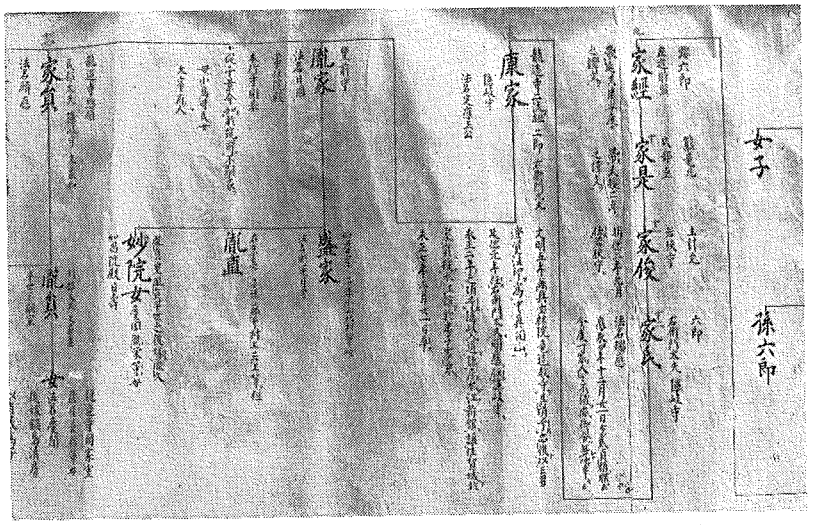
(一)　龍造寺氏の興起

1　龍造寺氏の興起と水ケ江館

戦国時代とは、永正三年（一五〇六）に二川分流、すなわち細川家が二派に分かれてから永禄十一年（一五六八）までを指している。あるいは伊勢長氏（北条早雲）の勃興（延徳三年・一四九一）の時、または前将軍足利義尹（よしただ）が入京した永正五年の時からをいうなどの説があって一定していない。しかし、これは畿内の形勢によったもので、九州では応仁の乱（一四六七）後、九州探題の勢威が衰えて戦国の状を呈するので、この時代から天正十五年（一五八七）豊臣秀吉の九州征伐ごろまでとみてよくはなかろうか。ここでは、これによることとする。

応永二年（一三九五）に渋川満頼が九州探題に補せられて以来、探題の勢力は振るわず、周防の大内氏の援助によって少弐氏を圧しているにすぎなかった。

明応七、八年（一四九八、九九）のころ探題渋川教直の子刀祢王丸は、養父郡綾部（三養基郡中原町綾



『龍造寺系図』康家の条（村田家蔵）

部）にいて、少弐・大友氏の与党に悩まされていた。明応七年八月、少弐氏の与党に囲まれたが、大内義興の部将仁保護郷等の援助によってこれを破った。刀祢王丸は義興の推挙により①、明応九年の春周防山口（山口県東南部）で、前将軍義尹に聘礼し、元服して尹繁と名乗り、探題に補せられた。尹繁は基肄郡園部（三養基郡基山町園部）の城にいて、九州の政務を沙汰したが、はなはだ微力であった。

このころ龍造寺康家は、大宰府の小鳥居信元の女を娶り、七人の子女があった。長子は家弘（後の胤家）、二子は神埼郡の内田家昌の室、三子は家和（家員）、四子は宝琳院澄覚法印、五子は大炊助、六子は家兼、七子は佐賀郡水上萬寿寺の天亨和尚である。康家の本領は、佐賀郡小津郷龍造寺八十町、本荘（与賀本荘）八十町、与賀荘千町で、これらは先祖相伝の地である。

康家は、延徳（一四八九～九一）のころ、別館を

城南の槙村（水ケ江）に構え②、約十余年後の永正二年（一五〇五）にその館の東に新館を造り後、そこに隠居した③。これを水ケ江御茶屋と称した④。「水」は龍の連想であり、「え」は方言の家で、水ケ江というのは「龍ケ家」の義にとったといわれている。

康家は永正七年（一五一〇）三月二十一日に卒し、水ケ江御茶屋の北に葬られたが、後年その地に慶雲院が建てられた。墓は明治四年、鍋島直大によって本庄町の高伝寺に改葬された。

康家の長子家弘は、小城の千葉氏から諱の一字を得て胤家と改め、文明五年（一四七三）に家督を相続した。

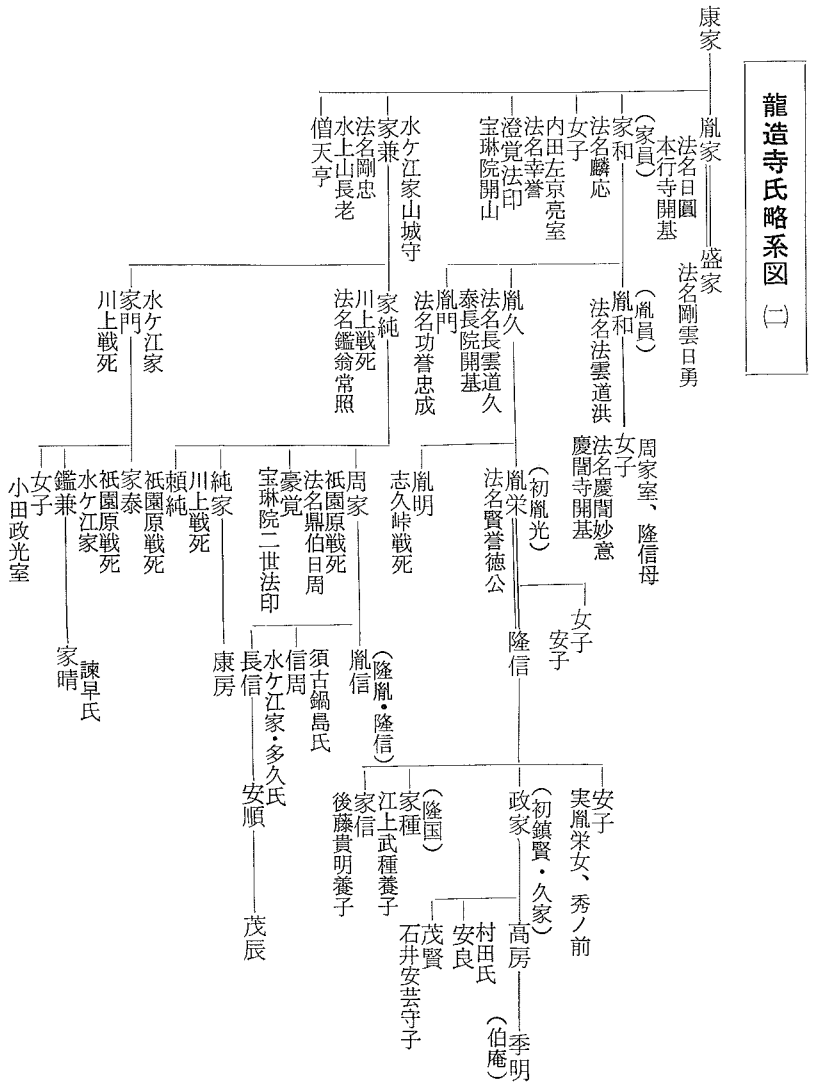
千葉胤繁（胤資の室・尼日光の養子）は、養父胤資の戦没後流浪していたが、帰国して小城郡甕調郷の高田城（三日月町）にいた。明応七年（一四九八）春、東尚盛・筑紫満門等の大内党に攻められたので佐賀郡川副郷太田（諸富町太田）に逃れて旧好の武士に援を求め、同時に龍造寺氏にも援助を求めた。

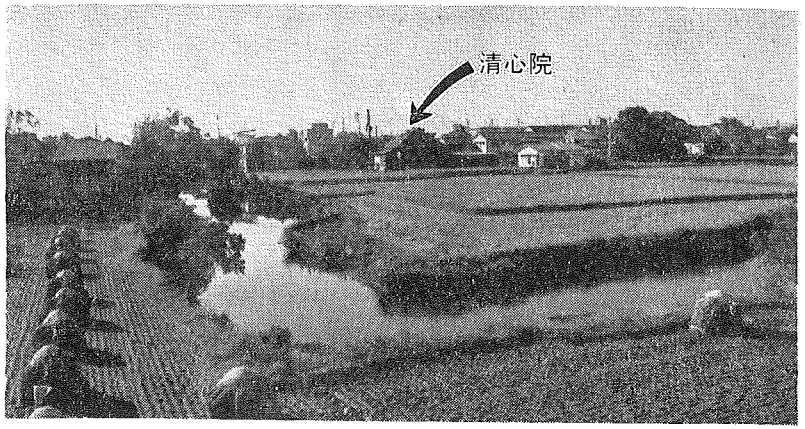
龍造寺胤家は、千葉胤繁への援助を主張したが、弟の家和は自重論を述べて、決しなかった。そこで胤家は、宿臣の成富胤秀や木塚直喜などと語らい、太田和泉守・光増・石井・南里・鹿江・山領等の川副郷の武士も加わえて、千葉氏のために二月二十四日出援した。

胤家は明応七年二月二十四日、川副郷太田で戦い、勝利を得たが、千葉興常が敵方に加わったため形勢が逆転し、胤家は千葉胤繁と共に筑前に逃れた。この戦いで多くの死者が出たので、永正・大永のころに胤家の甥家純の子・豪覚法印が、この地に天台宗の宝光院を建て、義弟の澄舜法印を住持とし、その菩提を弔った。

その後、胤家は外戚に当る大宰府の小鳥居信元の家に寄寓していたが、永正元年（一五〇四）の春に帰国

龍造寺氏略系図（一）





清心院と周囲の堀

して、先祖家平が築いた大財端城を譲り受けて入城した。同三年に城の鬼門に清心院を建て、大宰府からほう持してきた二体の仏像を安置した。この地（大財二丁目）は、幅五間余（約十メートル）の堀を存し、それに囲まれて清心院が現存している。また、胤家は永正十五年（一五一八）十月には、成富胤秀を奉行として城北三町（約三三〇メートル）の地に、大宰府で日政上人と約束したことを果すため、同上人を開山として日蓮宗の本行寺を開創した。そして清心院から毘沙門天像を迎えて本尊とし、小城郡の永田ケ里・桜岡ケ里等二十五、六町を寄進し、後に祭典費として六十石を寄進した。

胤家は享禄四年（一五三一）四月二十七日に九十三才で与賀館にて卒したので、本行寺に葬った。寺は、藩主鍋島勝茂の代に現在地（西田代一丁目）に移された。

胤家の家督については、『龍造寺系図』には世代を記さず、「千葉介に従って筑前にゆき家を継がず」とし、『鍋島系図始龍造寺』にも「順（したが）はずして家を継がず」とある。胤家の後裔である福岡県田主丸町の倉富氏の系図及び記録にも「家を


清心院本尊の木造不動明王立像

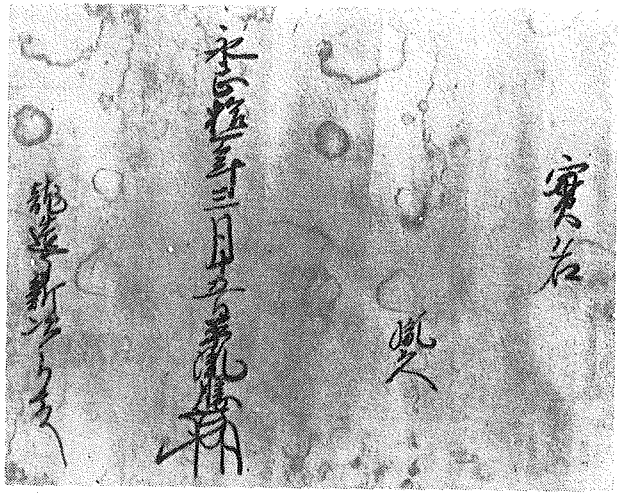

本行寺本尊の木造毘沙門天立像

継がず、千葉氏に属して少時筑前国に在り」としている。また、次の家和の条にも「兄の譲りを受く」とはせずに、「父の譲りを承く」としている。しかし、前記の倉富啓二郎編の『貽慶録』（昭和五年刊）によると、胤家は文明五年（一四七三）に父の譲りを受けて家督に就き、筑前に逃れる明応七年（一四九八）まで、二十五年間家督にあった。しかし、永正元年（一五〇四）に帰国した時には、弟の家和が総領となっていたところからみると、胤家の家督を父の康家が再び継ぎ、永正元年までの間に家和が康家から家督を譲り受けていたので、胤家を世代の中に入れていないのではなかろうか、と述べている。

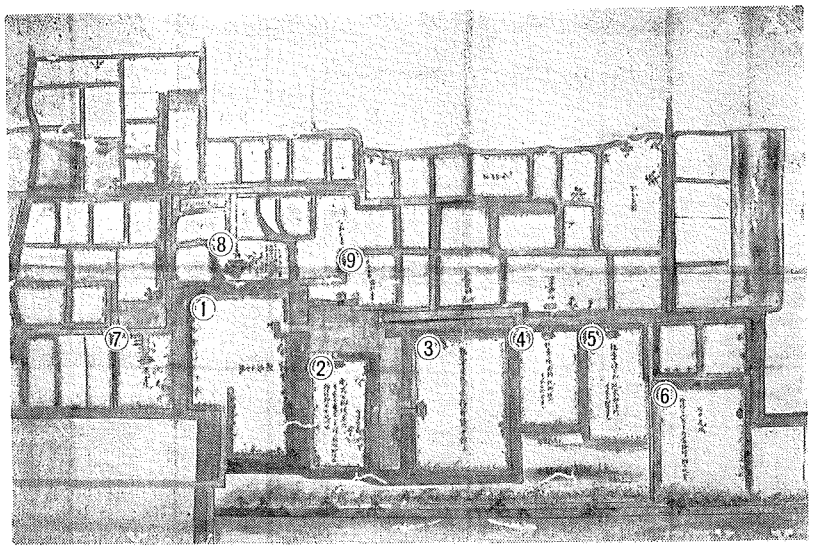
胤家の出奔後は、家和が跡を承け、先祖伝来の龍造寺八十町・与賀本荘八十町・与賀荘千町を譲り受けさらに、文亀二年（一五〇二）正月十六日には、千葉興常の推挙によって小城郡内の光武分八十町と佐賀郡内の下嘉世（瀬）百町・有重十二町・法成寺十六町を安堵され⑤、永正二年（一五〇五）三月十六日にはまた千

葉氏から佐賀郡河副下荘袋の内瑞応寺一所を安堵された。

家和は、享禄元年（一五二八）三月二十日に卒去したので、城外六反田長楽庵（大財一丁目）に葬られた⑥。子の胤和（胤員・初名家盛）は、永正十七年（一五二〇）八月、父に先立って早世した。『龍造寺系図』に、「早世して家を嗣がず」とあって弟の新次郎（胤久）が譲られたことになっているが、『龍造寺記』には、胤久の条に「兄の遺跡を継ぐ」とし、また、内閣文庫所蔵の『大林蔵龍造寺系図』には胤和の条に「家督を継ぎ程なく早世」と記している。同系図は胤久について「兄嗣子無し。故に胤久その跡を継いで総領職為り」と記し、『水ケ江系図』（多久市立図書館蔵）には「胤和卒して嗣無きを以て、髪を蓄へ後を承く」と記している。おそらく胤和は、永正十七年に卒去するまで、家督を承けていたのではないかと考えられる。


千葉胤勝書状（『龍造寺家文書』）

龍造寺胤久は、永正十一年（一五一四）三月十五日に、千葉胤勝からその諱の一字を受けて胤久と称し⑦、大永元年（一五二一）正月十一日には民部大輔に推挙された⑧。同四年三月二十八日には、千葉興常から佐賀



①剛忠小城
②剛忠隠居所（隆信出生地）
③家純屋敷中館
④頼純屋敷
⑤純家屋敷
⑥石井尾張屋敷
⑦慶雲院
⑧観音堂
⑨木下覚順屋敷

水ケ江城図（佐賀県立博物館蔵）

郡尻田（巨勢町修理田か）分六十町、同千数（兵庫町千住か）三十町、小城郡大寺三十六町、同郡別府百二十町の内岩部分二十町を除いた分、佐賀郡大宝（大財）四十町、□（千か）住十二町、諸富十二町を安堵され⑨、十年後の享禄三年（一五三〇）七月十五日には佐賀郡与賀荘千町六郷を安堵された⑩。

さらに、七月九日（年代未詳）には、大友義鑑から筑後の内百町を与えられ⑪、天文五年（一五三六）八月二十六日には同国生葉郡（福岡県浮羽郡）の内大石地頭分五十町、同郡小家の内三十町を充行われている⑫。

なお、龍造寺康家の六子である家兼は、父の康家から城外の槙村（水ケ江）の別館の地を与えられたが、別にこの

地に築城して水ケ江城と称し、これに対して本家の城を村中城と呼んだ。水ケ江城は、村中城の南の濠の外側に近接して築かれ、面積三十町と称され、東館（本館）・中館・西館に大別された。東館は現在の乾亨院（中の館町）の場所に当っている⑬。

胤家も永正五年（一五〇八）に与賀館（赤松町龍泰寺）に移ったので、龍造寺氏は村中・水ケ江・与賀の三城によって備えを固めた。

家兼は、龍造寺氏の支流である片田江家貞の女を娶って、家純・家門の二男をもうけたが、家純が病身であったため家門に水ケ江家の家督を継がせた。家純は、蒲原信濃守家秀の女を娶って四男四女をもうけたが、長男の周家が龍造寺隆信の父である。

2　龍造寺氏と少弐氏

明応六年（一四九七）に少弐政資が陣没した時、九才の遺児があり、一族の三根郡西島（三養基郡三根町）の城主横岳資貞が養育した。永正の初めごろに大友頼治に頼んで将軍の赦免を得、資元と名乗らせて少弐氏の嗣とし、重代の家人並びに大友氏の加勢で東肥前に旗挙げをさせた。

資元は、まず大内方となった神埼郡城原（神埼町城原）の勢福寺城の江上興種を追い落した。『貽慶録』によると、龍造寺胤家もこの時に資元方に加わっている。次いで資元は、千葉胤繁の力を借り、採題渋川尹繁の居城である養父郡綾部（中原町綾部）の白虎山城を攻め、尹繁を筑後に走らせた。『貽慶録』には、この時龍造寺胤家の弟家和も応援したことを記している。資元は、馬場経周（頼経か）に白虎山城を守らせて

勢福寺城に帰り、胤繁は小城郡甕調郷高田（三日月町高田）の城に帰った。

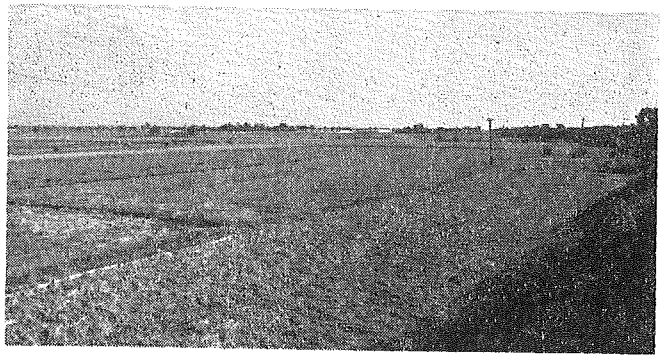
千葉胤繁は、永正三年（一五〇六）十月、筑紫満門・東尚盛等に高田城を落されて出奔し、同八年に卒した。弟の胤勝は、同十一年四月に東尚盛の館を急襲して、上松浦に走らせ、城地を占領して鍋尼（かなまる）胤光を家宰とした。十三年五月には、胤勝は東尚盛から逆襲されて敗北したが、十五年には佐志・鶴田等を攻めている。胤勝がそのころ連勝しているのは、それは龍造寺胤家及びその養子盛家の武功によるという。

少弐資元は、永正年間に将軍義稙の許しを得て大宰少弐に補せられ、享禄元年（一五二八）の夏、家督を子の松法師丸（後の冬尚・時尚）に譲り、松浦党を撃ち筑前に入り、大宰府を復して旧業を回復しようとした。大内義興は、これを聞いて資元を討伐しようと幕府に訴えたが許されず、享禄元年十二月二十日に卒した。子の義隆が跡を継ぎ、同三年春将軍義晴に強請して少弐氏討伐の許しを得、筑前守護代の杉興運（おきゆき）に命を伝えた。

享禄三年（一五三〇）興運は肥前に入り、基肄・養父両郡に攻め入ったので、少弐資元は多久梶峰城に退き、子の松法師丸は勢福寺城に入った。興運は筑紫氏を始め少弐氏の股肱（ここう）の臣朝日頼貫や横岳資貞をも降し、神埼郡に迫った。少弐方であった千葉胤勝は、実父の横岳資貞が大内方に降ったため、自分も大内方となった。

少弐方の龍造寺家兼および子の家重（後の家純）・家門、一族の盛家、神埼郡蓮池（佐賀市蓮池町）の小田政光（資光の孫）等は、同郡直鳥（千代田町直鳥）の犬塚家清と子の尚家、少弐氏譜代の将江上武種や馬場頼周等と共に、大内勢を邀撃（ようげき）しようとしたが、大内勢は勢福寺城に迫り、すでに野路宿に達した。松法師

丸はまだ弱冠であったので、勢福寺城の防戦を龍造寺氏に依頼した。龍造寺家兼は、八月十五日に大内勢と戦い、その先陣を破ったので、朝日頼貫は戦死した。大内勢は第二陣の杉興運・筑紫尚門等の新手がとって代り、少弐勢を追い立て田手縄手（三田川町田手）に殺到した。龍造寺陣の中にあった鍋島清久の一陣が機を見て赤熊（しゃぐま）に模したものを被り、横合いに大内勢の中に突進した。この突然の襲撃に大内勢はかきみだされ、資貞・尚門等が討たれたので、大内勢の主将杉興運は大宰府に退いた。



田手縄手古戦場の遠景

この戦いを「田手縄手の戦」といい、鍋島家所蔵の『普聞集』には、「苔野口の戦」とも記している。往時の街道は、東妙寺（三田川町田手）の東から南下して、力田・衣村（きぬ）（三田川町）を通り西走していたと思われるので、田手の東南一帯が戦場であったと考えられる。

龍造寺家兼は帰陣の後、戦勝のもとをつくった佐賀郡本荘村（本庄町）の鍋島清久父子の武勇をたたえ、清久の子を女婿にすることとした。清久の長子義房はすでに妻帯していたので、次男の清房に子家重の長女を与えた。これが鍋島直茂の母である。

なお、この戦いの恩賞として、家兼は少弐氏から佐賀郡河副荘千町を与えられたが、本荘の八十町を婿引出物として清房に与えた。

これが、鍋島氏が龍造寺氏と所縁を結ぶ発端である。

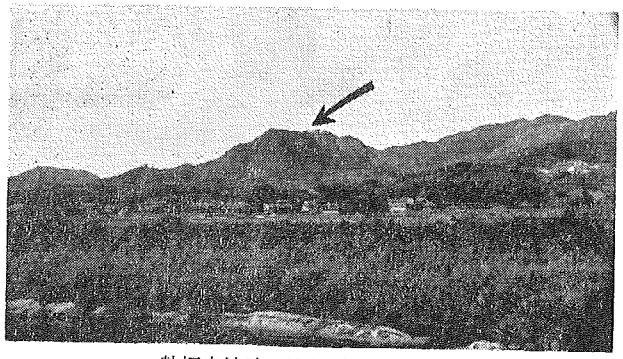
又、『歴代鎮西志』所収文書によると、翌年十月十一日に、龍造寺家門は川副郷鰡江（しらえ）の無量寺僧のこの田手縄手の戦いにおける戦功を想い、寺塔等の修理料として河副荘千町の内から名吉江郷（鰡江）を与えている。

3　大内軍の来襲

享禄四年（一五三一）の冬ごろから筑後生葉郡（福岡県浮羽郡）妙見山城主星野親忠が、大友義鑑の命を奉じなかったので、義鑑はその城を包囲した。しかし、親忠は菊池氏に通じ、年を越して天文元年（一五三二）となった。これと前後して、親忠は周防の大内氏にも求援したので、大内義隆はこれに応じ、筑前守護代の杉興運を遣わして援助させた。そこで、大友義鑑は少弐資元に求援した。資元は赴援し、龍造寺家兼も義鑑に応じた。

大内義隆は、将軍の命によって少弐氏を討伐するため、十一月に部将の陶興房を派した。少弐資元は怡土郡（福岡県糸島郡）高祖（たかす）城に逃れ、さらに多久梶峰城に退いた。興房は、十二月に筑前武蔵城（福岡県筑紫野市）を落し、養父郡山浦勝尾城から綾部城（中原町）に攻め入ったので、少弐松法師丸（後の冬尚）は勢福寺城に逃れた。龍造寺家兼は、少弐資元父子を勢福寺城に迎えて、江上元種に守護させた。

大内勢は、神埼郡三津山（東脊振村三津）の籾岳に陣して少弐方と戦い、基肄郡園部（基山町園部）に越年し、同三年正月に養父郡朝日山城（鳥栖市）を陥れた。少弐方の千葉胤勝は、二月十五日に川上の実相院に禁制を与えて兵士衆庶の乱暴狼藉を禁じたが[14]、陶興房もまた、同月二十九日に同院に禁制を出している[15]。



勢福寺城跡の遠望（神埼町城原）

このように同一の寺院に両軍から禁制を与えていることは、大内軍が接近し、当時佐賀郡北部における千葉軍との勝敗が予知できなかったことを物語っている。

龍造寺家兼は、四月二日に宿臣野田家俊を三根郡西島（三根町西島）の光浄寺に派し、三根郡一揆を起させ、大内軍の来襲に備えた[16]。『九州治乱記』所収文書（義隆書状）によると、四月六日に陶興房は、原田隆種に籾岳山下の神埼郡石動（いしなり）村（東脊振村石動）で少弐方と戦わせていて、同書には「石動但馬守を案内者として千栗（ちりく）山の衆徒を攻めて処々に火をかけ、神社悉（ことごと）く焼失す」とある。

五月十六日に興房は、水ケ江城を襲ったが、留守番の龍造寺氏の将福地家盈（いえみつ）がよく防戦したため、三津山の本陣に引揚げた。七月十五日、興房は龍造寺家兼と子の家門に暴風雨に乗じて不意をつかれて軍勢は潰乱し、基肄郡園部に退却した。大内義隆は、敗報を聞いて翌年十月自ら将となり、興房・隆房父子を先鋒として三根・神埼両郡の山野に陣させた。

大内氏の軍が十月に勢福寺城を囲んだので、少弐松法師丸は逃れて蓮池の小田資光を頼った。義隆は、波多隠岐守好・千葉興常・同喜胤を龍造寺家兼のところに遣わし、少弐資元父子に和を勧めるようにと申し入れた。家兼はこれを資元父子に伝えたので、十月に義隆と


少弐資元の墓塔(多久市・専称寺)

た。

翌四年十月初め、大内義隆は陶興房に命じて、少弐氏の東肥前の三根郡以下の所領をことごとく没収させた。少弐資元は十二月二十九日に多久にはしり、松法師丸は蓮池に至って小田資光を頼った。翌五年に義隆は資元討伐のため、興房を多久に遣わした。興房は千葉興常と多久に向かい、塚崎(武雄)の後藤、上松浦の波多・草野の諸氏もこれに合流し、九月初めに多久梶峰城を包囲した。資元は防ぐ術もなく同月四日、多久の専称寺に入り、譜代の家人今泉・窪・平原の三人を呼んで幼児元盛を託して自殺した。資元の遺児元盛は、佐賀郡川副郷江上(北川副町江上)の福満寺に入り、歳月を送った。

大内氏の将陶興房は、少弐資元を自裁させ、肥・筑両国を従えたので天文五年(一五三六)十月二十九日に周防に帰国した。少弐氏と親しかった大友義鑑は、資元の訃報を聞き松法師丸を世に出そうと思い、佐賀の龍造寺氏の本宗である胤久に内談した。

の和睦を整え、資元父子は勢福寺城を大内氏に明け渡した。豊後の大友氏もまた大内氏と和し、九州の大半は平穏となり、義隆は帰陣し、興房も大宰府に退いた。

大内氏と少弐氏との和平は成ったが、小田資光が、少弐松法師丸に、「龍造寺家兼に異心あり。」と讒したため松法師丸もこれを信じた。そこで資元と家兼との間に隙を生じ、少弐・龍造寺両氏の争いとなる端緒を作った。

小田資光は、少弐資元生害の根元は、龍造寺家兼が大内氏と謀って、資元に勢福寺城を明け渡すことを勧め、少弐家を衰微させたためである。そこで水ケ江に取懸け一軍すべしとて、天文五年(一五三六)の冬、龍造寺家兼の水ケ江城に攻め寄せた。家兼はこれを途中に邀撃しようとして出発した。水ケ江東方の木原村(北川副町木原)を過ぎた時、小田勢が襲い来て、小田資光の孫政光に不意をつかれたが、福地家盈が敵中に突き入り、他の諸将もこれを助けて進んだので、敵は崩れ去った。小田資光は居城に退き、家兼も水ケ江城に引揚げた。後に、少弐松法師丸が両氏の間を調停したので、和議が成立した。

4　龍造寺家兼と少弐氏の抗争

天文八年(一五三九)八月三日に村中城主龍造寺胤久が卒去したので、胤久が開創した城内の泰長院に葬り、子の胤栄が跡を継いだ。泰長院は、慶長年間の佐賀城拡張の際に、城外の現在地(与賀町精)に移された。胤久の室(胤家の女)は、兄胤和の室であったが、胤和が早世したため胤久に再嫁した⑰。弘治元年(一五五五)に日如尼が亡くなると、天文三年(一五三四)にその開創した日蓮宗の本寿寺に葬り、法号加昌院に因んで賀昌院と改称した。寺は後に現在地(与賀町精)に移された。

龍造寺家兼は、天文七年(一五三八)剃髪して剛忠と号し、次男の家門が水ケ江家を継いだ。天文九年(一五四〇)のころ、少弐冬尚(松法師丸改名)が水ケ江城に剛忠を訪ね、龍造寺一族の力添えで少弐家を取り立ててもらいたいと頼んだ。剛忠は初め諾わなかったが、後では心解け、子の家門を冬尚の後見とし、江上元種・馬場頼周の両人をその補佐とした。

このころ、小城の千葉氏は、少弐・大内の両氏に分属して二つに分れたが、天文二年（一五三三）十月十七日安堵状及び翌三年二月十五日禁制を少弐氏の本宗胤勝が大内党の東千葉の興常と連署して川上（大和町川上）の実相院に出している[18]ことは、一時的にせよ両家が和平したことを知ることができる。千葉興常は、天文九年（一五四〇）六月四日に卒去したが、子の喜胤も父と同じく大内氏に通じたので、両千葉氏は再び反目するようになった。その上、少弐方の千葉胤勝は、子の胤連と不和であった。

島原半島の有馬氏は、この千葉氏の不和に乗じて千葉領を奪おうとし、多久の多久宗時もこれに応じた。天文十年（一五四一）の春、有馬氏は杵島郡須古（白石町須古）の平井、同郡佐留志（江北町佐留志）の前田、同郡山口（江北町山口）の井本等に命じて杵島郡東北部の横辺田（大町町横辺田）に討入らせ小城郡に進入しようとした。龍造寺家門は、有馬氏が佐賀にも攻めてくるおそれがあるとして、両千葉氏と談じ、少弐・千葉・龍造寺三家の和議を成立させた。

少弐冬尚は、弟の新介を喜胤の養子と定め、平井館（三日月町平井）に送って胤頼と名乗らせた。龍造寺氏もまた家臣の鍋島清房の子で四才になる彦法師丸（後の直茂）を胤連の養子として晴気館（小城町晴気）に遣わした。ここに、佐賀・小城・神埼の三郡の間が和平し、有馬氏も軍勢を撤去した。

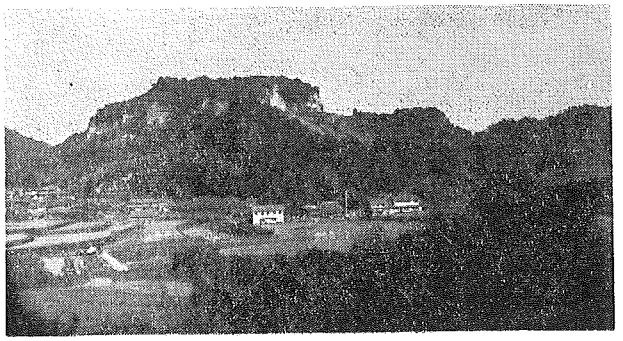
翌天文十一年（一五四二）閏三月二十九日、東千葉の喜胤は悪疾を悩んで自殺し、養子の胤頼が家督を継ぎ、本城の牛頭城（小城町）に入り、喜胤の女を妻とした。本宗の西千葉家には、胤連に実子が生まれたので、胤連は彦法師丸を伴い同郡牛尾（うしのお）（小城町牛尾）に隠退し、隠居分の地である同郡美奈岐八十町を彦法師丸に譲った。この時、胤連は譜代の武士一二人を右知行地に添えて附属させた。



千栗八幡宮銅鐘銘拓本（鍋島報效会蔵）

養父郡千栗（ちりく）八幡宮（北茂安町千栗）にあった天文十二年（一五四三）二月四日在銘の銅鐘に、[19]

大檀那之支
（大）
太宰少弐藤原冬尚
（郎）
馬場六良藤原政員
前肥前守頼周（馬場）
筑紫四郎惟門
（檀）
旦越宗筑後入道本盛
馬場右エ門大夫周詮
馬場大蔵丞周盛
江上石見守元種
（檀）
旦那東弾正少弼盛親
龍造寺山城入道剛忠（家兼）
龍造寺新次良（郎）胤栄
同三良兵衛尉（郎）家門
同伯耆入道日勇（盛家）
小田九郎政光

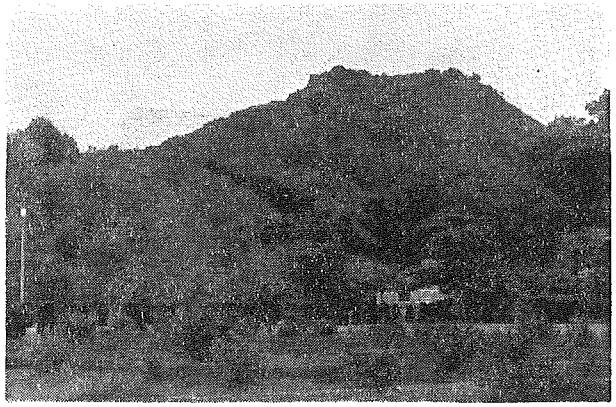


獅子ケ城跡の遠望（厳木町浪瀬）

宝泉　（常喜道林妙円）
（筑前）
前筑国□□□□□□□□□
大僧都法師祐賢□□□□□□
妙珍□□□□□□
天文十二年癸卯二月四日願主妙覚院
□□
惣官大工　平総茂
惣官大工　源時貞

とあり、龍造寺剛忠・同胤栄・同家門・同日勇（胤家の養子）・小田政光が馬場一族・筑紫惟門・宗本盛・江上元種等と連記祈願しているが、このことは少弐氏与党の東肥前諸城主との関係が融和していることを示すものであり、小城・佐賀両郡は神埼郡と共に鎮静した。しかし、この状態は間もなく破れ、少弐・龍造寺両氏の関係も悪化するが、これに一石を投じた感があるのは少弐氏の族馬場頼周である。

龍造寺剛忠が少弐氏につくした功績は大であり、少弐氏が剛忠を信頼することもまた大であったが、これをねたむものもあった。少弐資元が大内義隆と講和し、これにより資元は領地を奪われ、ついに自刃するに至ったが、これは龍造寺剛忠の罪であるとして、剛忠排斥あるいは龍造寺討伐を考えるものも生じ、その最



梶峰城跡遠望（多久市）

たるものが馬場頼周であった。

頼周は、少弐冬尚に、「龍造寺剛忠は異心があって、内心大内氏に通じ、自立せんとする考えではないか。」と讒言（ざんげん）した。冬尚は、頼周の言を信じて龍造寺氏を討伐する準備をすすめた。

天文十三年（一五四四）冬、西肥前の諸城主に少弐氏に背く態を装わせ、島原の有馬晴純（仙岩）にもその意を伝えたので、晴純は杵島郡長島（武雄市橘町長島）に出兵した。また、多久氏及び上松浦の波多・鶴田氏等にもこの密計を知らせたので、多久氏は居城の梶峰城（多久市多久町）に、波多・鶴田氏は杵島郡川古（武雄市若木町）の日鼓岳に出張した。

冬尚は剛忠に、有馬氏等が少弐氏に背いたので、急ぎ討伐するように命じた。剛忠は九十一才の老齢であって出馬できないので、一族の者を集め三手に分けて十一月二十一日に発向させた。一手は上松浦、一手は多久の梶峰城に向け、あとの一手は有馬を討つため杵島郡長島へ向かわせた。上松浦に向かった龍造寺盛家の軍には、相知入道等が加わり上松浦浪瀬（厳木町浪瀬）の獅子ケ城へ押し寄せたが、要害のため急攻できず、一手でこれを押え置き波多氏の鬼子岳城（北波多村岸岳）及び大川



河上・祇園原戦死者の墓（本庄町高伝寺）

野の日在城（伊万里市大川野）の攻撃に向けた。日在城攻撃の龍造寺盛家等は、二十二日に城の東方龍川（伊万里市立川）に陣した。そこへ松浦党が押し寄せ合戦となったが、龍造寺盛家は龍造寺家久（家和の孫）・同信以（胤家の孫）等と共に戦死し、龍造寺軍は厳木へ敗走した。

獅子ケ城の包囲は年を越したが、翌十四年正月七日に陥落し、馬渡俊信が城番をしていたが、間もなく奪還された。多久梶峰城攻撃も年を越したが、正月十八日には陥落した。しかし、搦手に向った龍造寺胤明（胤久の子）等は、杵島郡志久峠（北方町志久）で須古の平井、佐留志の前田等と戦いことごとく戦死した。長島に向かった龍造寺家門等は於野原（武雄市橘町小野原）の戦いで敗れ、龍造寺胤直（胤家の子）等が戦死した。

龍造寺軍は利なく、辛うじて全軍佐賀へ退いた。有馬軍は勝ちに乗じて佐賀に攻め寄せ、少弐氏方のいわゆる一九城将と共に水ケ江城を包囲した。馬場頼周は、龍造寺剛忠に、ひとまず開城して包囲の軍勢を解陣させ、少弐冬尚に無罪を明かせば冬尚も赦免されるであろうと、開城をすすめた。そこで、剛忠もついに頼周の謀略にはまり、二十二日水ケ江城を明け渡して、二十三日に筑後に退いた。そして、龍造寺家純・家門・純家を筑前に退かせ、龍造寺周家・家泰・頼純を少弐冬尚のもとに遣わし陳謝することにした。筑前へ向かった家純等は、二十三日に川上の与止日女（よどひめ）社に仮寝をしていた。馬場頼周は神代勝利と謀り、子の政員を



祇園原附近（神埼町祇園原）

大将として家純等を襲撃させたため、家純等は全員討死した。

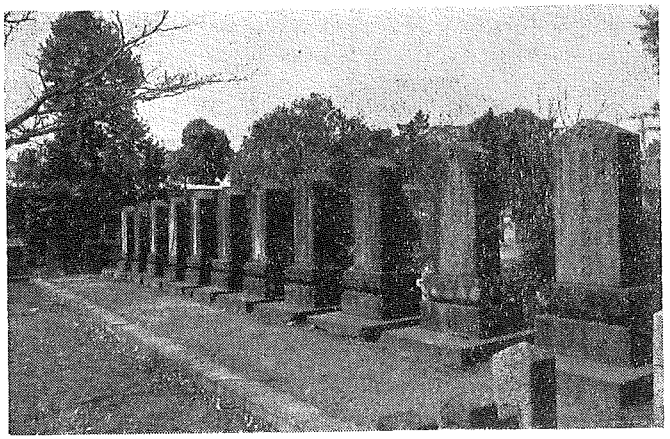
少弐冬尚のもとへ陳謝に向った周家等は、二十三日に和泉村（佐賀市久保泉町）の玉泉坊に仮宿し、翌早朝にここを出発した。神埼郡尾崎の祇園原（神埼町祇園原）まで来た時、馬場頼周の部下薬王寺隼人允や神代勝利の伏兵に襲われ、周家等は全員討ち取られた。和泉（佐賀市久保泉町）の也足庵の住持は、龍造寺氏の一族であったので、周家・家泰・頼純の三将を自庵に葬った。この三将の供養塔は、周家の室慶闇夫人によって建てられた。後に龍造寺隆信は、周家・家純・純家・頼純を円蔵院に、家泰を乾亨院に葬った。なお鍋島直茂は、家門の位牌所として乾亨院の東南に聴松軒を、家泰の位牌所泰陽軒をその北に建てた。

龍造寺剛忠が水ケ江城を開城すると、少弐冬尚は剛忠一族の所領を没収して、馬場・神代・小田氏に与え水ケ江城は小田政光に守らせた。そのころ、千葉胤連は、東千葉の胤頼のために小城を退いていたが、この月の二十五日に晴気城に帰った。少弐冬尚は、二月二十七日に軍を出して小城の街（がい）くを焼き、同二十九日には千葉胤頼の軍も少弐方に加わって、千葉胤連と戦い、

胤連を杵島郡白石に走らせた。馬場頼周は、胤連の晴気城に胤頼を入れ、胤頼の牛頭城に少弐冬尚をおくことにして牛頭城の修補に取り掛った。

龍造寺剛忠は、長子家純をはじめことごとく馬場頼周等に討たれたことを聞いて大いに憤り、鍋島清久父子は剛忠のために恨みを報じようと佐賀郡の川副・与賀の郷士をはじめ鹿江兼明・久布白兼基・南里国有等二千名余りの同志を得て、寺井江（早津江川）を渡って筑後にいた剛忠を迎えた。三月二十四日、佐賀郡川副郷鰐江の無量寺で旗揚げし、小田政光が守る水ケ江城を攻め落して入城した。

白石に逃れていた千葉胤連は、小城郡の持永盛秀・鴨打・古賀その他の武将を味方につけ、四月二日に龍造寺剛忠の軍と共に、馬場頼周が城普請中の小城の祇園岳を襲撃した。城普請中の土民も馬場頼周に反旗をひるがえしたため、頼周等は城を脱出して逃れた。しかし、頼周の子政員は野田家俊に射落され、頼周もまた川上で捕えられて首を切られた。剛忠が高木村（佐賀市高木瀬町高木）まで進んだところに、頼周父子の首が届けられた。剛忠はこれを春日（大和町春日）の高城寺、水上（大和町水上）の萬寿寺に送って葬った。



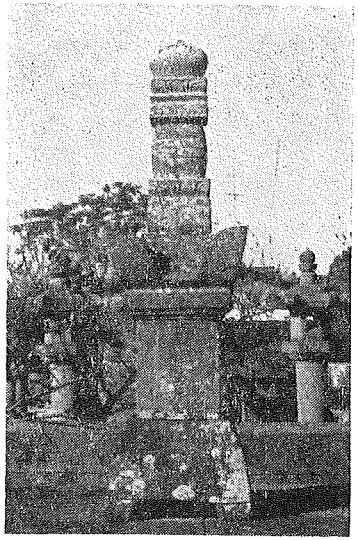
萬部結願の碑（水ケ江一丁目萬部島）

剛忠は、本宗の龍造寺胤栄と共に、四月十六日の夜、急に神代氏一族の宗利及び城原勢がこもっている千布城（佐賀市金立町千布）を襲った。不意を突かれて千布城は陥落し、城兵は山内に逃走したので、龍造寺は城を焼いて引きあげた。

この年（天文十四年）の冬、龍造寺剛忠は水ケ江城内において法華経一万部を修行することにし、城内に仮道場を造り、高城寺の登岳和尚を導師とし、慶雲院・泰長院以下百僧を請じた。剛忠も精進潔斎して、毎日研水をそそいで焼香礼拝し、願をすませた。また、貯えていた財宝をことごとく貧民に施し、領民等が借用していた銀米類一切を棄捐した。読誦した経文を書写して、城の東北の鬼門に奉納した。この地を萬部島（水ケ江一丁目）という。

剛忠は、「我が子孫中秀づる者あらば、則ち、下民を撫育し、慈恵を垂れて家臣を憐み人道を勤めて懈る勿れ。」[20]といい、幕末の藩主鍋島直正に至る萬部結願の碑十一基が、萬部島に建っている。

天文十五年（一五四六）三月十日、龍造寺剛忠は卒去した。年九十三才、法名は剛忠浄金居士、遺言によって乾亨院の東にある慶雲院の両親の墓所に葬られた。



龍造寺家兼の墓塔（本庄町高伝寺）

注

①『三浦家文書』『大内氏実録』
②『水江事略』
③『龍造寺系図』『水江事略』
④御茶屋とは下屋敷又は別邸の意か、佐賀本藩には、十五御茶屋、武雄に萩の尾の御茶屋等がある。
⑤『龍造寺家文書』
⑥『龍造寺系図』『鍋島系図始龍造寺』
⑦『龍造寺家文書』
⑧『龍造寺家文書』『龍造寺系図』『鍋島系図始龍造寺』
⑨『龍造寺家文書』
⑩『龍造寺家文書』『龍造寺系図』
⑪『龍造寺家文書』
⑫『龍造寺家文書』
⑬『龍造寺家文書』
⑭『河上神社文書』
⑮同　右
⑯『光浄寺文書』
⑰『龍造寺系図』
⑱『河上神社文書』
⑲鍋島報效会所蔵の千栗八幡宮銅鐘銘の拓本、なお、銅鐘は明治の初め神仏分離の厄に遭い別当坊妙覚院に移されたが、後に売却された。幸に藩の枝吉経種（神陽）等が藩命で史料採訪を行った際肥前古鐘銘として拓本にとり鍋島家に襲蔵してきた。
⑳『歴代鎮西要略』

○主な参考文献

『水江事略』『肥前旧事続編料』『龍造寺隆信譜』『普聞集』『九州治乱記』『鍋島家本北肥戦誌』『歴代鎮西要略』『歴代鎮西志』『肥陽軍記』『龍造寺記』『貽慶録』『隆信公譜』『鍋島直茂公譜考補』『神代家伝記』『大内家実録』『肥前州古跡縁起』『肥前国誌』『佐賀市誌』（大正十五年佐賀市発行）『佐賀の栞』

(二)　龍造寺隆信の勃興

1　隆信、水ケ江・村中（本宗）両家を嗣ぐ

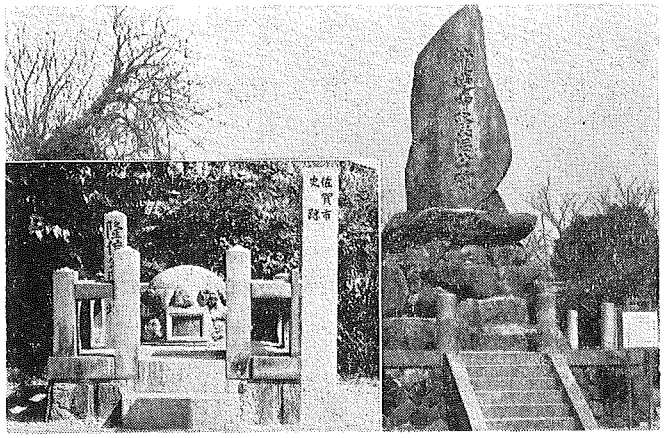
龍造寺剛忠が天文十五年（一五四六）三月に卒したので、一族の播磨守家宗は、一門や宿臣を集め剛忠の次のような遺言を伝えた。

吾、馬場に謀られ恥辱を受くると雖、天の憐を受け、頼周父子を討ちて会稽の恥を雪ぐことを得た。今後水ケ江の総領職家門の跡は子の鑑兼襲げ、家純が跡並びに剛忠の隠居分は周家の次男慶法師丸（後の長信）に与へ、宝琳院の中納言は性偶儻にして大志があり、向後、当家を興さん者は彼なり、機会を見て還俗させよ。

とあった。水ケ江家の跡目については、宝琳院にある中納言を推すものや、新次郎家就をおすものもあって意見が一致しなかった。そこで神意に問うことになり、龍造寺八幡宮で鬮を抽いたところ中納言円月に決ったという。

円月は、享禄二年（一五二九）二月十五日、水ケ江城東館天神屋敷で周家の子として生まれた。後の隆信である。母は龍造寺胤和の女、後に慶闇尼と呼ばれた勝気の賢夫人であった。

この賢夫人を母に持ち、木下覚順の妻に養育され、容貌雄偉、眼光炯々であったと伝えられ、剛忠は「こ



龍造寺隆信誕生記念碑と胞衣塚（中の館町）

の子唯者にあらず」と深く感じ、「予（かね）てより出家すれば必ず仏乗を悟り、九族天に生じて果を感ずべし」と教えられていたので、父の周家に語り、七歳の時出家させ、宝琳院に入れ豪覚和尚の弟子とした。かくて円月が水ケ江家を相続することに決定すると、石井忠房の家で還俗元服させ、胤信と改名させた。

天文七年（一五三八）三月三日、豪覚和尚入寂し、城南の円蔵院に葬られたが、同十六年のころ、その石塔が夜々怪火を出すという風説が立った。そこで多くの名僧に頼んで鎮めようとしたが効果がないので、郊外八戸の曹洞宗龍雲寺の開山大用宗俊に頼み鎮めた。これから胤信（円月）は、曹洞宗を深く信ずるようになり、円蔵院も曹洞宗に改宗し、城下を中心として龍造寺氏の勢力の及ぶところ次第にこれに化していった。

そもそも東肥前の地は、豊前の英彦山のいわゆる三千坊の勢力と臨済宗及び日蓮宗の勢力が強かった。臨済宗は鎌倉時代の初めから水上山萬寿寺の開山神子栄尊や京都東福寺の開山円爾弁圓（聖一国師）の活躍によって強き地盤を作ったが、小城には頼朝の宿臣千葉常胤の

裔千葉氏及びその一族宿臣等によって、日蓮宗の地盤を作っていた。

曹洞宗は、南北朝時代の末、至徳年間に能登曹洞宗総持寺の峨山和尚の門流無著妙融により、上松浦黒岩の医王寺と共に佐賀郡久池井に玉林寺等が建てられたくらいで、東肥前への普及は応仁の乱以後のことであり、しかも、盛んになったのは天文年間に入ってからである。すなわち、周防大内氏の帰依により盛んとなった峨山の門流石屋真梁派の高僧が防・長両国から来た。一方、神埼郡箱川（三田川町）の妙雲寺と共に、佐賀でも佐賀郡八戸の城主八戸宗暘が龍雲寺（佐賀市八戸一丁目）を開くと、長門大寧寺の門からでた大用宗俊が請われて開山となった。また、同郡与賀郷鍛冶屋（東与賀町鍛冶（かじ）屋）の流長院（後の慶闇寺）なども開いた。大用宗俊は、八戸氏の外護もあり、同宗を佐賀方面を始め、東肥前に風靡させ、進んで西彼杵半島から壱岐・対馬に教線をひろめる基盤を築いた。


木下覚順夫妻の画像（光円寺蔵）

龍造寺氏の臣鍋島清房もまた、天文二十一年（一五五二）に館の南、高楊庵の地に仏舎を開き、佐々木氏の菩提寺である神埼郡箱川妙雲寺の悟宗圭頓の門人玲巌玄坡を請じて開山とし、菩提寺高伝寺を創めた。胤信（隆信）は、少弐氏がかつて住んだ与賀館の跡に寺を営み、八年春に叔父である周防の曹洞宗龍文寺の要室和尚を請じ開

山として龍泰寺を開いた。隆信自らも方丈に入って参禅を怠らなかったので、和尚から安陀会の袈裟を授けられた。また、天正十六年（一五八八）、鍋島直茂が隆信のために開いた城下宗龍寺（水ケ江一丁目）も曹洞宗で、悟宗圭頓を開山とした。慶闇夫人も同じく曹洞宗に帰依し、夫人の卒去後、慶長三年（一五九八）流長院を佐賀郡鹿子（本庄町鹿子）に移し、慶闇寺と名付け宗俊を開山に仰いだ。

こうして、龍造寺氏の帰依により、また、龍造寺氏が曹洞宗を信ずる大内氏、次いで毛利氏と親交があったので、曹洞宗はいよいよ発展し、特別縁起の寺を中心とする水ケ江五か寺、次いで十二か寺の制もできた①。後世に、鍋島藩でも曹洞宗寺院の開創の願い出には田地を付して、聴許したと言われた程で、現在に至ってもこの宗派の寺院の数は、隣県をはるかに凌駕（りょうが）している。

胤栄は、天文八年（一五三九）八月、胤久の卒後を承けて龍造寺氏の本宗を嗣ぎ②、同十四年二月二十八日には、川上与止日女大明神に郡内豊益の内、角目（鍋島町角目）作所一町ならびに本社領の内公事人足仕直を寄進した③。同年、龍造寺剛忠が馬場頼周を襲撃するや、四月十六日夜、胤栄も剛忠と共に神代勝利の出城の千布城を攻め、城兵を山内に走らせた。

胤栄は翌十五年正月十八日、少弐冬尚のために村中城を追われ筑前に住んでいたが、本領に帰ろうと企て、大内氏の筑前守護代杉隆満を通じて大内義隆に頼んだ。宮内大輔（胤栄）あての義隆文書④によると、

至筑前上国之由、可然候、本意不可回踵候猶隆満宗長可申候也、恐々謹言、
三月二日　　義隆　在判
龍造寺宮内大輔（胤栄）殿

とあって、義隆が領掌したことが知られる。胤栄は、大内氏の援助によって少弐氏を破ったので、義隆は四月二十二日、佐賀郡内五千町、神埼郡西郷の内五百町、三根郡二百町、坊所三百町の知行を与えている⑤。すなわち、

合戦勝利之由神妙也、依所望地、肥前国佐嘉郡之内五千町、神埼郡之内西郷五百町、三根郡之内下村二百町、坊所三百町之事充行也、猶以忠節之状如件
卯月廿二日　　義隆（大内）　判
龍造寺宮内大輔（胤栄）殿

とある。

こうして、大内義隆の援助によって、胤栄は本領に帰ったので、天文十六年閏七月十一日に入国の祝儀として与止日女神社に郡内上屋豊益三町八段を寄進して、国家安全、武運長久、吉祥如意を祈り⑥、これと前後して胤信（隆信）と談じ、少弐冬尚追罰のため東肥前に向ったが、冬尚及びその与党の邀撃を受けた。

胤栄は、同月大内氏の部将杉隆満（豊前刈田松山城番か）に書状を送り、胤信の軍勢を合して冬尚の居城勢福寺城に迫った。小城の千葉胤頼は冬尚の弟であり、兄に応じて龍造寺方の千葉胤連等と戦った。冬尚方の江上元種・宗入道本盛・馬場周詮以下東肥前の諸将は、勢福寺城を援けるため三根・神埼両郡間で防いだが、胤栄等の軍はこれを破った。八月五日、神埼郡米田原（三田川町目達原）の戦いで、冬尚方の宗入道本盛が戦死し、少弐軍の勢力は衰え、十月十六日遂に冬尚は筑後に出奔した。

胤栄は、翌十七年三月二十二日早世し、法名を賢誉徳公といい、城内の無量寺に葬った。寺は後に城下松



大内義隆一字書出状（『龍造寺家文書』）

原に移り、精の泰長院の大門内に移された。⑦（現在、泰長院に合す）

胤栄の墓は、明治四年に高伝寺に改葬された。

胤栄の卒後は一女あるだけで、本宗である村中龍造寺家の相続者がないので一族老臣が協議した。時に一族の家就と胤信を推す者とに分れたため、龍造寺八幡宮で鬮占いをして胤信（隆信）に決した。

胤信の所領は、先祖相伝の二千町余、すなわち、佐賀郡与賀荘千町・龍造寺八十町、小城・佐賀両郡の中で勲功の地五百町、筑後生葉荘百町、その他で都合二千町余であったが、胤栄の遺領六千町も合せて知行することになった。鍋島清房を後見として、龍造寺家直・同家宗・小河武純（後の信安）・納富信景・福地主計等が家事を執行した。

胤信は胤栄の後室をめとり、遺された一女安子（後の秀ノ前）を養女とした。

筑後に流浪した少弐冬尚は、胤栄の死を聞き、伯母むこの対馬の宗義調の援を得て、勢福寺城を攻めた。しかし、大内氏がおいた城番江上隆種（元種の孫）がよく防いだので、落すことができなかった。ところが、少弐氏は江上氏の旧主であった関係から冬尚を入城させ、江上尚種を後見とした。



仙叔和尚の画像（中の館町光円寺蔵）

胤信は、天文十九年（一五五〇）七月一日に、大内義隆からその諱（いみな）の一字を与えられ、隆胤、ついで十九日に隆信と改めた。⑧隆信は、その性質が激しすぎる嫌いがあったため、むしろ一族の鑑兼を立ててはという者もあり、宿臣土橋栄益もその一人であった。

天文二十年（一五五一）八月、周防大内氏の支族陶隆房の叛があり、九月一日に義隆を自決させ、豊後の大友義鎮の弟晴英を迎えて主と仰いだ。土橋栄益はこのことを聞くと、大友義鎮に通じ、隆信を廃してかねてから大友氏と親しかった鑑兼を主としようとし同志を糾合した。集まった諸将は、神代勝利・高木鑑房・同胤秀・小田政光・八戸宗暘・江上武種・横岳資誠・馬場鑑周・筑紫惟門・姉川惟安・本告頼景・宗尚夏・藤崎盛義・出雲氏忠・綾部鎮幸・朝日宗贇・犬塚鎮尚以下の三犬塚・多久宗時・有馬などであった。

土橋栄益は、機至れりとして、天文二十年十月に水ケ江城を囲んだ。城主家信（後の長信）が村中城に急を知らせようとした時、家臣の木下覚順の次男（後の仙叔和尚）が自ら伝令を申し出て、寒中に濠を泳ぎ渡って急を知らせたという。後に隆信にその殊勲を賞され、京都に修業し帰国して光円寺の開山となり仙叔と号した。



龍造寺鑑兼寄進状（『龍造寺八幡宮旧蔵文書』）

栄益の叛乱軍は、次いで村中城を囲んだ。十月二十五日、蓮池の小田政光の老臣深町理忠は、隆信の老臣納富左馬助・福地長門守を通じて城の明渡しを勧めたので、隆信もこれを受け入れ、筑後へ退くことになった。

隆信は、妻室を始め一族家臣を伴って城を出、川副郷寺井津から千歳川（筑後川）を渡り、筑後の堤津に辿り着いた。下妻郡蒲池の城主蒲池鑑盛は大友氏の武将であったが、これを聞き一族家臣を諭し、大友義鎮の許しを得て隆信以下男女百余人を迎えた。その厚意で曽祖父剛忠が住んでいた三潴郡一ツ木村に移り、鑑盛の部下原野恵俊の家に住み、他は小保村に置いた。

土橋栄益は、権威をほしいままにし、鑑兼を城主になして、小田政光に佐賀を警衛させ、海岸の警備を高木鑑房の役とし、八戸宗暘をして郷内の者の糺明に当らせ、与賀・川副の両郷を身分ある者に分け取らせたという。

龍造寺鑑兼は佐賀の城主となったので、翌二十一年十一月十五日、川上与止日女社に、郡内龍造寺八十町

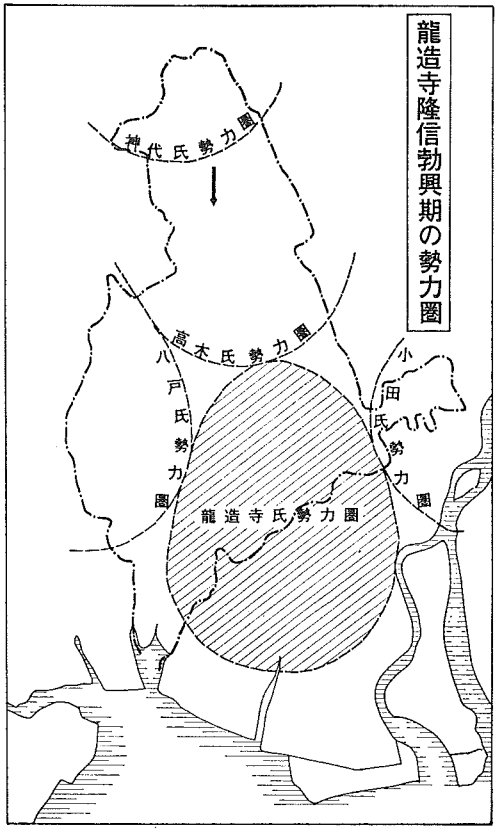
の内四の坪願祐七段を⑨、また、同日龍造寺八幡宮にも龍造寺八十町の内九之坪上金一反・同十坪の内たかしやう四反・同十六坪江里田五段、合せて一町余を寄進した⑩。

天文二十一年（一五五二）を迎えると、隆信は旧領回復のため、福地信重を肥前に遣わして同志をつのらせた。信重は与賀郷船津の郷長村岡藤七兵衛のところに行き、与賀郷内の郷長等の協力を得ることができた。藤七兵衛は船を商売船に仕立てて出船し、また、小城郡芦ケ里の鴨打胤忠も迎えの船を隆信のところに遣わした。

隆信一族は、鴨打胤忠の船に乗って肥前へ向かったが、暴風雨にあい予定地に着岸できず、牛津川口の柳津留（牛津町柳鶴）に漂着した。同地は有馬氏の横領地であったため、隆信を討ち取ろうとして有馬方の武士達が集まったので、隆信は再び筑後に引き返した。

年明けて天文二十二年、隆信は早田次郎左衛門等を使者として与賀郷鹿子の古賀民部のもとに遣わし、五人の郷長と打合せて協力を得、鹿江兼明の船で七月二十五日に一ツ木を出発した。千歳川を渡り、漁夫園田次郎兵衛の水先案内で、川副郷南端の鹿江崎に上陸し、乾堂（川副町犬井道）を過ぎ、二十七日に鹿江の威徳寺に入り旗揚げをした。福地長門守は与賀郷船津（本庄町元船津）に上り、村岡藤七兵衛が自宅に火を立てたので副島以下の村長を始め数千人が集まった。高木・八戸氏等の家臣が海岸警備のために駐屯する与賀郷の飯盛館を攻めることにして、鹿子の龍昌庵に陣し急襲して勝利を収めた。

隆信は、東の手には龍造寺越前守・納富但馬守等に副島式部少輔以下の郷長等を加えて、南里・八田口から押し詰め、西の手には福地信重を先陣として小河武純・龍造寺左馬大夫・鹿江兼明等に久米長門守以下の



隆信は、王子の若宮に参拝して願文を納め、本荘の西川内（本庄町西川内）の梅林庵に本陣を置き、宗暘等を破って八戸城に退かせたが、鑑房は取って返したので北方に追い詰め、遂に高木に走らせた。隆信は続いて、弟家信を将とし八戸城を攻撃させたが、宗暘が和を求めたので、侵し取っていた龍造寺領を返還させた。

佐賀の城を守っていた小田政光は、戦わずして蓮池に退いたので、隆信は佐賀の城を奪還して入城した。隆信は、小田政光や高木鑑房それに城原の江上武種を攻めることにしたが、武種は九月二十六日に投降した

郷長や川副の郷人を合せて一軍とし、旗本には勇士をすぐって備えた。

時に、風説のとおり高木鑑房が来襲して来たので、福地信重が応戦すると共に小河・鹿江等の軍勢もこれに加わった。高木鑑房の軍は崩れ立って若村（じゅうご）に走ったが、八戸宗暘も来て若堀（じゅうごぼり）を要害として軍を備えた。



小田政光の花押

ので、十月八日に小田政光の小曲城を攻撃した。蓮池の小曲城は、亀甲城ともいい、平城で、蓮池を流れる小曲江（佐賀江）を要害とし、その東南にわたる一帯である。

隆信は、川副郷犬尾（北川副町犬尾）に本陣を置き、弟信周を北から回してその後方を断ち、弟家信を南から城の追手鴛与丁口（諸富町加与丁）に回らせて攻めさせた。しかし、郡内の本告牟田城主本告頼景が政光に来援したため、その勢が強くなり、隆信の本陣目懸けて斬りかかった。本告頼景は、馬渡栄信に討ち取られたが、小田軍の先陣の江口入道源世、二陣の深町理忠共に退かず、信周と戦った。家信は、南方鴛与丁口に攻め入ったが、神埼郡崎村の城主犬塚鑑直、同郡蒲田江の城主犬塚尚重、同郡直鳥城主犬塚鎮尚が小田勢に加わって防戦した。城主政光は驀進（ばくしん）して龍造寺軍と戦ったが、戦い半ばにて手勢のみを引き選（すぐ）り、龍造寺軍の本陣に殺到した。

龍造寺一家、宿将小河・納富・福地以下、政光に迫って乱闘した。鴛与丁口に向かった家信に、鍋島清房が加わり、犬塚等の軍を討ち退けてこの口を破り、城内へ進入しようとした。そこで政光は城内に引揚げ、降服を申し出たので、隆信はこれを許して帰陣した。

隆信は、十月半頃に龍造寺鑑兼を水ケ江城から追放して蟄居を命じ、弟家信にその跡を嗣がせ、また、土橋栄益等を捕えて誅殺した。

鑑兼は、隆信の妻室の兄であったので、石井藤兵衛尉や家信の臣村山内蔵助等に懇願し、慶闇夫人にも陳情した。隆信は、そこで鑑兼を許して佐賀に戻し、所領を与え、また、鑑兼の嫡子家晴は従来戦



龍造寺長信の画像（多久市立図書館蔵）

功があったので、筑後柳川の城代にした。土橋栄益の相談人西村美濃守は、嘉瀬の僧増閑に頼んで詫びを入れたため科を免じ、一族龍造寺家就は郡内藤木（兵庫町藤木）に蟄居を命じた。

隆信は、納富石見入道・小河武純・江副久吉を執権とし、水ケ江城主となった弟家信の長臣には石井兼清を尾張守となして、福地蔵人・吉岡蔵人と共に付属させた。隆信は更めて周防の大内氏に通じ、天文二十三年（一五五四）正月に、弟家信のために大内義長の諱（いみな）の一字を得て、長信と改めさせた。[11]

隆信は、さきに逃走した高木鑑房を撃つため、天文二十三年三月に出馬した。

高木氏は、与止日女社と関係深い佐賀郡の旧族であったが、南北朝の末頃から東西の両家に分れた。東高木氏の館址は、東高木にあり、高木八幡宮や菩提寺正法寺の西隣で、現在もその西方に館橋という地名がある。西高木氏の跡は、明らかでないが、菩提寺である正法寺に、西高木氏といわれる胤秀の墓石が残っている。

高木鑑房は、天文十七年ごろ他国に流浪していたが、近年帰国して東高木を知行していた。元服の時に、大友義鑑からその諱（いみな）の一字を得て、鑑兼と称したが、龍造寺氏にも鑑兼がいるので、同名を遠慮して鑑房と改めたという。



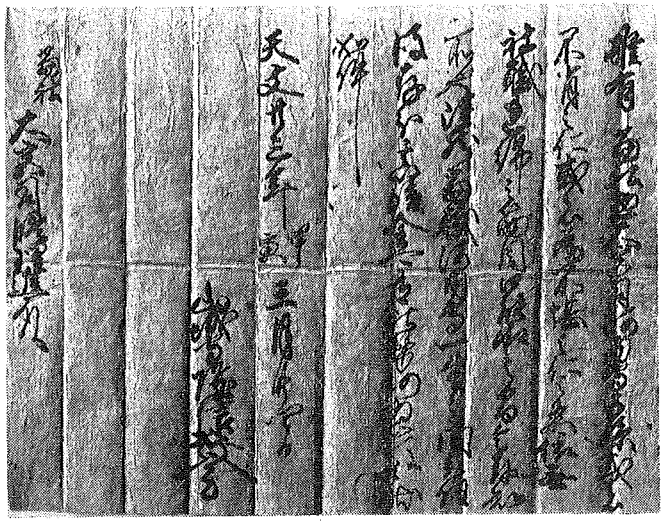
高木城跡（高木瀬町東高木）

鑑房は、隆信の来襲を知ると、手兵を集めて南の三溝口（神野町三溝）に出て、隆信の軍と戦った。時に鍋島信昌は唯一騎で陣頭に進み敵に当った。信昌は、千葉胤連の養子となっていた彦法師丸で、天文二十年に千葉氏を辞して戻り、郡内本荘の西川内（本庄町西川内）の梅林庵にいて、今度が初陣であった。

鑑房は、高木に敗退し、子を質子として和睦をこい、西高木の胤秀もまた同じく降服した。鑑房は杵島郡佐留志（江北町）の前田家定の許に落ちたが、隆信は彼の将来を危ぶみ、家定に意を伝えて殺させ、佐留志の山頂に葬った。鑑房に二子があったが、隆信は長男の盛房に父の所領の内数百町を与えた。

佐賀も一応落着した同二十三年三月二十四日、隆信は龍造寺八幡宮大宮司江副信良に対し、抵抗した諸氏の処分落着を報じ、社職の安堵状[12]を出した。以後、鍋島氏の代になっても龍造寺八幡宮の安堵状には、「天文二十三年先判之旨に任せ」と書くのが慣例となった。佐賀の城下も平静となり、神埼郡蒲田江（蓮池町蒲田津）城主犬塚尚重も隆信に従い、後、隆信の妹婿となった。同時に巨勢・千住以下の諸氏も隆信に従った。

犬塚氏は、下野宇都宮氏流で、朝綱六代の後に久則が筑後下妻郡蒲池にいて、蒲池を俗称とした。弟家貞は三潴郡犬塚にいたが、その曽孫家貞は



龍造寺隆信安堵状（『龍造寺八幡宮旧蔵文書』）

神埼郡崎村（千代田町崎村）に移ってきた⑬。少弐氏党で、男子が五人あり、各々分封され、崎村を東犬塚、同郡浦田江を西犬塚といい、同郡直鳥（千代田町直鳥）の犬塚とを三犬塚と称し、更に五子は、佐賀郡川副郷東古賀（川副町東古賀）に館した⑭。

中国の毛利氏は、二十三年夏に陶隆房と断交して安芸国内の要害賀茂郡西条や厳島神領である佐伯郡をも残らず征服した。九月十日、毛利元就の子隆元が反大内氏の少弐冬尚に対し、その事を告げ、豊前・筑前にも乱入して累代の本意を達するよう勧めた⑮。冬尚は潜（ひそか）に肥前に来て再興を図らんとし、少弐氏恩顧の臣馬場・横岳氏等と綾部城で会した。

隆信は、曽祖父剛忠の恨みをはらすため、三根・養父両郡の諸城を収めんとし、神埼の櫛田社に陣した際このことを聞き、十月十五日に綾部城に押し寄せ、さらに山浦勝尾城も陥れた。隆信は少弐氏を討つため、弘治元年（一五五五）三月に神埼郡城原の勢福寺城を攻めた。途中、神埼郡の姉川惟安を小河信安（武純）に攻めさせて降し、惟安を案内者とし信安・納富信景・福地信重を先陣として勢福寺城に向かわせた。同郡三瀬の城主神代勝利は、勢福寺城応援のため北方の猿岳に陣したので、隆信は小河信安・鍋島清房・龍造寺石見守をもってこれに備えさせた。

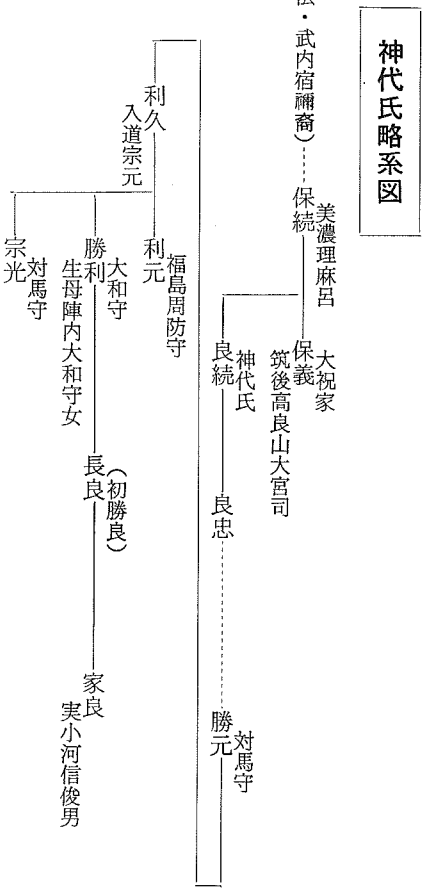
隆信は、福地信重に勢福寺城の南追手から攻めさせたが、信重はこの方面を部下に抑えさせ、自身は少勢を引きつれて東に回り水路から城内に攻め入り放火したので、城主江上武種は防ぐことができず、仁比山に出奔した。そこで、神代勝利も一戦に及ばず山内に退いた。

2　神代氏との抗争及び肥前各地への転戦

神代氏は、筑後高良山（久留米市）の大宮司鏡山氏の出であって、良光が文治元年（一一八五）に山麓の神代に居住した。武人となり、文書には家号を「武辺」とも書いた。文永の役の時、筑後川が増水したが仮橋を架けて諸国の軍勢を渡河させた良忠が先祖に見えている。戦国時代に入り、入道宗元が上松浦の波多氏を頼って肥前に来た。佐賀郡千布（金立町千布）領主陣内大和守に認められ、その領地を与えられて女婿となった。その次男勝利は、小城の千葉興常の館に扶持されていたが、剣術に勝れていたので神埼郡三瀬の城主野田宗利に認められ、遂に山内の主となった。

山内とは、脊振山系の南麓から小城郡天山の北麓にわたる東西七里（二八キロメートル）、南北五里（二〇キロメートル）と称する山谷で、藤原（ふじのはる）・杠（ゆずりは）・関屋・小副川・名尾（なお）・合瀬（おうせ）・藤瀬（ふじのせ）・畑瀬・松瀬・梅野・菖蒲（しょうぶ）・古湯・無津呂（むつろ）等二六か山から成っている。

神代氏略系図



神代氏は、山内および金立山以南の佐賀郡東北部、筑前の西南部にわたって領有した。『実相院文書』によると、神埼郡本告郷（神埼町）の与止日女社領を神代対馬入道が違乱した趣が、年未詳の十月一日付少弐政資の実相院あて書状写に見えるので、政資の在世中には既に神代氏が肥前にいたのであろう。

天文十四年（一五四五）十二月には、神代勝利が与止日女社の灯油免等を、同十七年十二月には土地を寄進し、二十二年八月には佐賀郡内才所分を、同年十二月には佐賀郡高木の内坪の上（高木瀬町坪上）を寄進しているので、これらの地方もその所領となっていたのであろう。

弘治元年（一五五五）二月、龍造寺隆信は神代勝利を多布施館に招待して、会見したが、この時隆信に勝利を毒殺しようという企てがあったとの噂が出て、両氏の間には再び亀裂が生ずるに至った。『神代家伝記』によると、勝利は小副川教実としめし合せて教実を追放したと見せかけ佐賀に送った。隆信は気付かずに山内への案内者として優遇した。教実は隆信の計画を逐一勝利に内通したので、勝利は隆信の計画に陥らずに済んだという。

弘治元年（一五五五）秋に龍造寺隆信は、出馬して、川上から山内に向い、九月五日谷田城（富士町下小副川）を奇襲した。神代勝利は、一時龍造寺軍の攻撃を避けるため、三瀬城を出て筑前の怡土郡（福岡県糸島郡）高祖城主原田入道了栄を頼り、同郡長野に退いた。隆信は、山内を抑えたので、諸処に代官を配置して、帰城した。しかし、勝利は、この年の大晦日の夜に山内に戻り、熊川（富士町）の代官を討ち、三瀬城に帰還した。



神代勝利の肖像

先に龍造寺氏に降服した八戸宗暘は、神代勝利や大友氏に通じ、龍造寺氏に叛したとの風説が立った。八戸氏は、佐賀郡甘南備峰の城主高木宗家の弟益田家綱の子宗益が佐賀郡於保（大和町）に住み、於保氏を称したもので、代々国府執行職（国府在庁官）を勤めた。十代後の胤宗は、龍造

寺家兼（剛忠）の女婿で、その子宗益が八戸氏を称した。その子の宗暘は、隆信の妹を娶って、八戸を始め新庄・於保・益田・木角・蛎久・成道寺等中佐賀の西部を領有した。

隆信は、鍋島信昌が宗暘の子飛車松を人質とすることを決めていたので、飛車松をつれにやったところが不在であったため、約束に反したといって憤った。

そこで弘治三年（一五五七）正月、隆信は八戸城攻撃を弟の信周等に命じた。ちょうど正月のことで、不意を突かれた八戸城内は混乱した。神代勝利は、杠主水（ゆずりはもんど）を遣わして八戸城を援けさせた。龍造寺軍は、城の近くに火を付け、城壁を破って攻め込んだので、城主宗暘は城を出て神代勝利を頼って山内に走った。宗暘の子三人は捕虜となって来たが、母慶閤が命乞いをしたので、隆信はこれを許した。男の子は後の入道宗春で、女子は長じて後それぞれ鴨打胤泰・犬塚真盛の室となった。

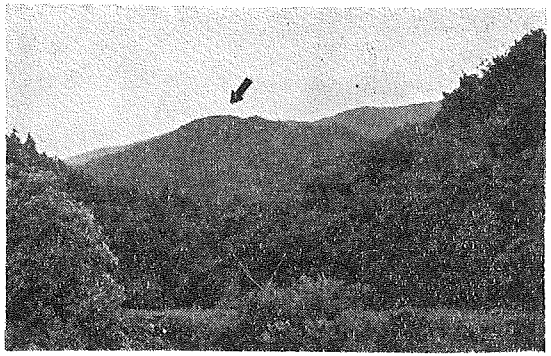
神代勝利は、尼寺の西の駄市川原（大和町）に出馬したので、隆信はその南の長瀬（高木瀬町長瀬）に陣した。小河信安等が敵陣を攻め、神代方もこれに応戦し、勝利と八戸宗暘は春日山と丸山砦の間に籠った。龍造寺軍は春日山に移陣し、山腹の高城寺を焼き払った。神代勢は夜陰に山内に退いたので、龍造寺方もまた陣をひいた。

神代勝利の本城は、佐賀から七里、神埼郡三瀬（三瀬村）の城で、十四か所に要害を構えていた。隆信はこれに当るため乗取った春日山城（甘南備峰城）の城普請にかかり、弘治三年（一五五七）九月に完成したので、城番を置いて守らせた。勝利は、城原の江上武種と議して陣を構え、九月中旬に梅野帯刀・松瀬又三郎等に春日山城を攻めさせた。城番小河但馬守を始め城兵はことごとく討死した。

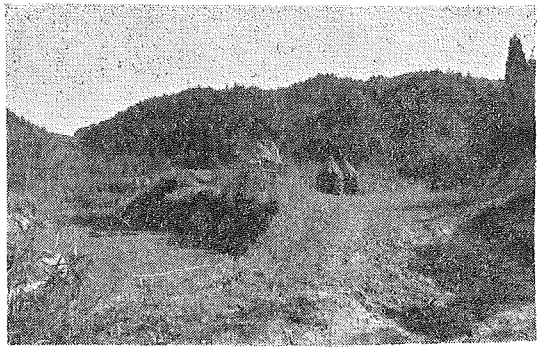
十月十五日、小河信安は春日山城の仇を報ずるため手兵を引きつれて出馬したので、隆信もまたこれに続いて出陣した。信安は東鉄敷峠（大和町名尾峠）まで進んだが、日が暮れたので、春日山に陣した。勝利は小副川（富士町）の寄合原に兵を集め、千葉胤頼は神代氏援助のため屋形山に来陣した。勝利は、兵を二手に分け、一手は子長良を将として名尾に向かわせ、自身は三段田（大和町三反田）に通ずる道を指して進み熊野嶺に陣を敷いた。勝利は自ら敵の陣立を見ようと、川浪駿河守（一説には梅野兵部）に鑓（やり）を持たせて、道に出たところ、下人一人をつれた小河信安に出会い、戦って小河信安を討ち取った。

神代勢は甑岳（こしき）に着陣し、龍造寺軍が鉄敷峠によじ登ったので、神代勢が攻め寄せた。勝利の近習に阿含坊（あごんぼう）という薩摩伊集院の弟に当る鉄砲の名手がいて、鉄砲を撃ちまくったので、龍造寺軍の中には南の谷に追落される者も相当に多かった。そのため、この地を頭谷（つぶらだに）というようになったという。

『神代家伝記』には、「当国には其の放術を知らず。」とし、『九州治乱記』には、「その頃希であった鉄砲」と記し、『歴代鎮西志』には、「肥前鳥銃の入り来る初」と見えている。鉄砲は天文年間の初めより以前にあったが、鳥銃とは鳥の形をしたものであるので種子島系の鉄砲であろう。



三瀬城山遠望



鉄敷峠（名尾峠）附近

隆信は、三段田の下の広坂（大和町）の龍瀬付近に陣を敷いていて、先陣が敗れたことを知ると攻撃を加えようとした。しかし、今山内に攻め込むと敵の術に陥るので、後日を期するよう諫められ、軍を返し帰城した。この戦いで討死した小河信安には男子がなかったので、鍋島清房の三男をその娘に配し世嗣とした。信友と称し、後に信貫、また、信俊といった。小河信安は、肥後の菊池為安の孫為純の子で、筑後山門郡小河を知行していたので、小河を俗称としたという。

『神代家伝記』によると、神代勝利は、高木・副島・本告・八戸・木塚・杉町の諸将がその配下となったので、村々を巡見し、神野草場（神野町）の北方横道に、「是より北、東西に亘り神代領也」との札を立てさせたという。なお、筑前攻略の気配を見せ、山内の咽喉部に当る熊川の西北山上に熊川城を築いた。

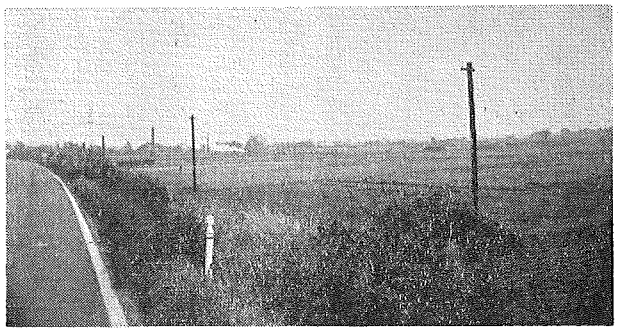
隆信は、以前から大内氏に通じていたので、大内氏が滅び毛利氏が跡を襲うと、毛利氏に聘を通ずることになった。隆信は、滞在中の周防龍文寺の僧を案内者として、納富但馬守を遣わし、毛利元就に会見させた。元就は、饗応の後に青江の刀や鞍置馬を引出物として贈った。この年代を、『龍造寺記』その他に弘治二年（一五五六）としているが、おそらく弘治三年またはそれ以後のことであろう。

龍造寺隆信は、先に帰順した江上武種が、少弐冬尚を守護し、東肥前の少弐氏旧故の諸将や神代勝利らと謀り、龍造寺氏を攻める計画であると聞き、蓮池の小田政光や犬塚三氏等に攻めさせることにし、永禄元年（一五五八）十一月に本陣を神埼郡姉川（神埼町姉川）の城に置いた。小田政光は、城原川西方の莞牟田（神埼町莞牟田）から押寄せることにして出兵した。同郡の本告城主本告頼景も来て政光の軍に合し、犬塚三氏は第二陣となった。隆信は、政光が新付の将であるため、鴨打胤忠・馬渡賢才等を検使として、その陣に添えた。

神代勝利は、江上武種の通報によって出援し、江上氏の勢福寺城に到着した。軍勢を二分して、一手は神代勢を江上勢に加え、城原川西岸の牟田前（神埼町本告牟田）に向け、一手は江上貞種・執行入道宗円ら江上勢のみで東方の神埼口を固めた。十日朝、小田・本告等を始め龍造寺勢は、牟田前の縄手に進んだ。勝利は、牟田前の東の長者林に陣を布き、三間柄の大鑓数百本を先手に持たせ、突き進ませた。本告頼景は敗れ退いたので、小田政光は隆信に援軍を求めたが、隆信は援軍を送らなかった。政光は、勝利の臣波根藤兵衛の放った矢（『隆信公御年譜』には、鉄砲とある）に当って落馬し討ち取られた。

神埼口へ向かった犬塚一族も敗れたので、隆信は姉川を立って陣を進めたが、江上・神代の軍は兵を引き武種は別城の田手の日吉城に引き籠った。勝利は、横大路より河窪（久保泉町川久保）に迂回して、引き揚げた。

『隆信公御年譜』によると、「佐賀勢は、馬渡・石井・広橋等が同時に山内勢に攻入って戦う一方、隆信の弟長信や納富兄弟も攻め込んだので、城原・山内勢も崩れ始め、これに力を得た馬渡・石井・鴨打・広橋



長者林古戦場（神埼町）

は長信の下知に従って奮戦した。後世この四人を長者林四本鎧と称した。」という。

隆信は、兵を進めて勢福寺城を遠攻めにした。この勢福寺城包囲中の十一月十五日に、軍を分けて小田氏の蓮池小曲城を攻めさせた。その理由は明らかでないが、『九州治乱記』には、「牟田前の戦いで、政光を救援しなかったことを子供や家人等が知り、将来隆信を敵とすることを虜り、従者まで鏖殺しようとの考えであった。」と記している。小曲城内では、城主政光が討死して余り日も経たない所に不意を突かれたが、老臣深町理忠が城を守って防いだ。宝琳坊（『歴代鎮西要略』には、宝光院とある。）の住持真如房澄能が政光の子鎮光・朝光・増光らを城外へ脱出させたので、筑後三潴郡（福岡県三潴郡）に落ちのび坂東寺に入った。理忠は陣没して城は落ちた。隆信は、理忠の首を見て、かつての恩を思い、その遺児を探して百町の禄を与えて家人とし、理トと号けた。政光の祖父資光（覚派）は、小曲城の陥落後帰ってきたが、政光の討死や落城の事情を聞いて憤怒し、自刃した。墓は東巨勢（巨勢町）の龍津寺にある。⑯

隆信が勢福寺城包囲中の十二月三日、実相院座主増純法印の計らいで、龍造寺・千葉・江上・神代の四氏の

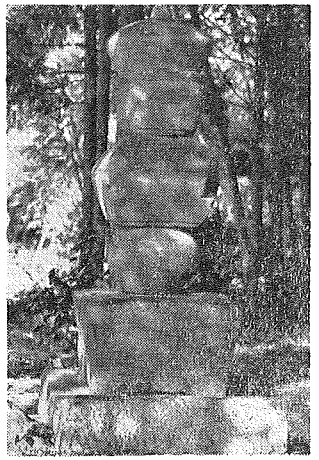
和平が整ったので、隆信は包囲を解き、佐賀へ帰陣した。⑰筑後に逃れた小田政光の子鎮光は、その年の十一月に与止日女社に、武運長久・息災延命を祈っており、翌永禄二年正月二日には本領に戻って五千町を領した。『肥陽軍記』には「隆信に和平を申し出たので、隆信は怨恨を捨てて藩屏とすべしと、これを許した。」と記している鎮光は隆信に娘を請うたので、養女安子を嫁がせた。⑱

また、『普聞集』によると、隆信は直ちに神埼郡蒲田江（佐賀市蓮池町蒲田津）に向かい、城主犬塚尚重を攻略したので、尚重は筑後に逃れたとあり、『龍造寺記』には、永禄四年（一五六一）に、尚重は自領に戻ったとある。



小田資光（覚派）の墓（巨勢町東巨勢龍津寺）

永禄二年（一五五九）正月、前年の十二月に和平を結んだばかりの江上武種の勢福寺城を、隆信は取囲んだ。不意を突かれた江上武種は城を出て、筑後に逃れた。この城にいた少弐冬尚は自害し、鎌倉時代から続いた少弐氏も武家としてはここに終りを告げた。また、この月の十一日、千葉胤連は少弐氏の一族である千葉胤頼を晴気城に攻めて胤頼を陣没させた。⑲そこで、胤連は隆信に属して小城郡一円を領することになった。⑳胤頼の子の胤誠は、神代勝利を頼って山内に逃れた。



少弐冬尚の墓塔
（神埼町城原真正寺）

龍造寺隆信は、三月に三根郡中野城主馬場鑑周と同郡西島城主横岳鎮貞を攻めるために出兵した。鑑周は弟源次郎を質子に出して降り、西島城主横岳鎮貞も和を請うた。

永禄四年（一五六一）、隆信は神代勝利と決戦を試みるため使者を遣わし、九月十三日に佐賀郡川上で戦うことを告げたところ、勝利もこれを受諾した。『九州治乱記』によると、隆信は、対岸の都渡城口に弟信周・一族の鑑兼・部将の小河信友以下を、大門口には納富信景以下を配し、自らは大手宮原口に押詰めた。

勝利は同郡の熊川城に兵を集めて、川上へ向かった。自らは与止日女社の西惣門に本陣を布き、長男長良を宮原口の大将とし、また、次男種良を大明神前の南大門に、三男周利には八戸宗暘を付けて川上川の東岸都渡城に陣を布かせた。

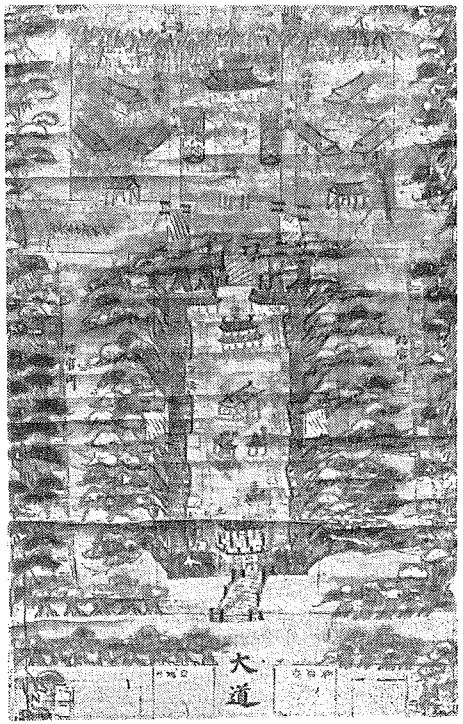
龍造寺軍の先陣は、宮原口に近付き長良の陣に迫ったが、龍造寺軍は敗れ後退した。そこで、隆信の旗本と共に二陣の福地長門守以下を先陣と入替えて体制を整え、神代勢を悩ました。時に都渡城の陣で、大将の神代周利が味方の者に刺殺されるという変事が起り、神代勢は混乱し、八戸宗暘は山内に退いた。南大門でも神代勢に大きな打撃を与え、さらに勝利の本陣に攻め込んだので、勝利は北方の八段原に退いた。龍造寺軍は一先追撃をやめて帰城した。勝利はさらに三瀬城に退いたが、再起を期して上松浦に落ち、所縁を求

めて大村領の彼杵郡波佐見村に入って、大村氏を頼った。大村純忠は、家臣の朝長伊勢守をつけて扶持した。

一方隆信は、神代領を没収し、空閑光家を久池井村（大和町）において、山内の抑えとした。

山内では、中村壱岐守父子が小城郡麻那古（富士町麻那古）の龍造寺方の代官を夜襲し、ついで諸処の龍造寺方の代官等を退けたので、十二月中旬に勝利は三瀬城に帰還した。隆信は、追放した勝利を二度までも山内で迎えたので、翌永禄五年（一五六二）に和議を申し入れた。勝利も和議に応じ、子長良の娘と隆信の三男鶴仁王丸との婚約を成立させたので、両氏の間は平穏となった。

少弐資元が卒去の際七才であった子元盛は、佐賀郡江上（北川副町江上）の福満寺で、老臣今泉播磨守等に養育され、永禄四年（一五六一）には二十七才に達した。播磨守は少弐家を復興しようと法体となって朝覚と号し、諸国を説き巡り、度々上洛して朝廷にも上奏した。隆信に対して、少弐氏の末葉を安穏に差置くようとの綸旨が下ったので、隆信は過去のいきさつを棄てて福満寺に出向き、元盛に対面した。しかし、朝覚は、少弐

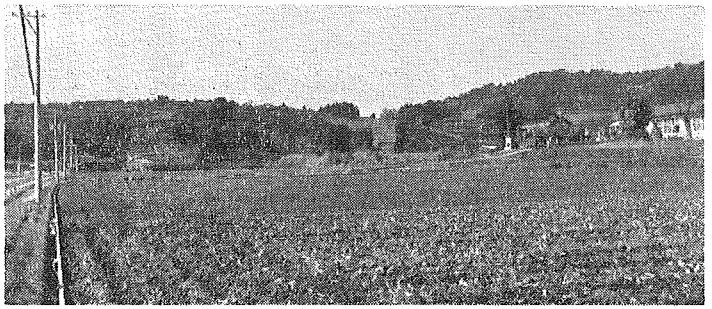


福満寺伽らん配置絵図（北川副町江上）

家復興の不可能なことを知り、元盛に出家を勧めた。元盛は朝誉と号して、福満寺に住した。

大友宗麟（義鎮）は、少弐政興に少弐家を復興させようと策し、上松浦の波多鎮及び島原半島の日江（ひのえ）原城主有馬晴純入道仙岩等の承諾を得た。有馬晴純は、子義貞を藤津郡に派し、多久の多久宗利を味方につけ、佐賀に攻め入って龍造寺氏を討ち少弐氏を立てようと謀った。しかし、有馬氏の本当のねらいは、自領の境である牛津川以東を領する千葉氏を討って、東に領域を拡大することにあったのではないかと考えられる。

西肥前の諸将で有馬氏に応ずる者が多く、高来郡伊佐早城主西郷純尚を始め、杵島郡須古の高城主平井経治、藤津郡の吉田・宇礼志野・原等の諸城将が出兵し、永禄六年（一五六三）三月十七日には、先陣を杵島郡の横辺田（大町町）に進め、堤尾岳に砦を構えた。隆信は、鍋島信房・信昌兄弟、小河・納富・福地以下を横辺田へ進発させ、小城郡高田（三日月町高田）に布陣した。千葉胤連も龍造寺方に加わり、小城郡丹坂口（小城町）に出陣した。同郡の鴨打胤忠・徳島入道道可・持永盛秀等も龍造寺方援助のため丹坂口に出向いた。丹坂口の峠を越すと右原（小城町）に出る。右原は多久川に沿った土地で、当時は有明海からの船着場であり、また、多久へ通ずる捷路（しょう）であった。



丹坂峠の遠望（小城町）

有馬方に縁のあった砥川村の首長馬渡俊光は、一族の野田右近允と謀って有馬方に使者を出し、隆信討伐のための援兵を請うた。有馬方では策略とは知らず、大将分の島原弥七郎を差し向けた。弥七郎等が牛津川下流の柳津留の入江まで漕ぎ上ったところを、東から鴨打・徳島、西から野田等が出会って、弥七郎等を撃退した。この戦勝の結果、上松浦の鶴田因幡守・田代因幡守等が龍造寺方となり、横辺田の郷士土井・井本等も前田家定の計略によって龍造寺方となった。

有馬氏は七月、島原弥介を大将として、安徳直治及び高来・杵島両郡の兵を以て攻め寄せたが、龍造寺方はこれを丹坂口において撃破した。隆信は、有馬方の残党を討伐し、杵島郡に兵を進めて、須古の高城主平井経治を攻めたが失敗に終り、隆信は佐賀に引き揚げた。

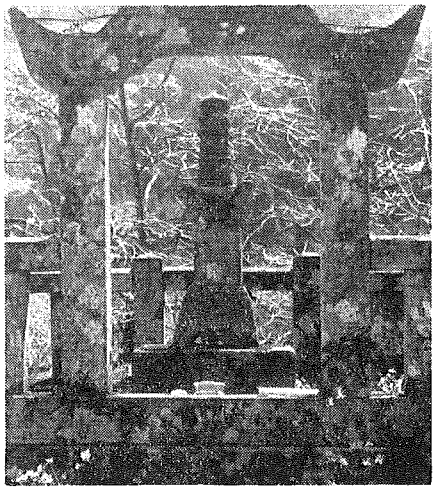
永禄七年（一五六四）二月、龍造寺隆信は再び平井経治を討つべく、須古の高城を攻めた。平井経治は、少弐氏の族で、父経是の時にこの地に移って来た者で、勇気無双の大将といわれた。龍造寺・平井両氏の間に和議が成立し、経治は弟の直秀を婿とすることを約束した。しかし、隆信に娘がなかったので、龍造寺信純の娘を養女にして嫁がせた。

永禄七年、筑後にいた少弐政興が、横岳鎮貞・馬場鑑周を通じて東肥前に入ったので、隆信は三月下旬に出兵した。大友宗麟は、蒲池鑑盛・田尻親種を始め下筑後の諸将に政興を援けさせたため、西島城主の横岳鎮貞もよく防戦した。隆信は速攻するのをやめ、陣をといて帰城した。

神代勝利は、永禄七年に山内の佐賀郡畑瀬山（富士町畑瀬）に築城し、家督を子の長良に譲って隠居していたが翌八年（一五六五）三月十五日に五十五才で没した。長良は千布の土生（はぶ）島（金立町友貞）におり、三



土生島（金立町友貞）遠望



神代勝利の墓（富士町畑瀬宗源院）

月に父勝利を失ない四月には二人の子を亡くした。四月二十三日に、隆信は使者を遣わして悔みを述べると共に、長良に対して別心がないとの誓紙を送り、明後日を期して返書を求めた。その夜明け隆信は納富信景を先陣として兵を向け、神代長良の土生島砦に攻入らせた。長良は畑瀬に脱出したが、さらに追撃されて、筑前那珂郡岩戸の鷲ケ岳城主大津留入道宗秀を頼り、領内の同郡戸板に置かれ扶持された。

長良は、小田部紹叱、高祖城の原田了栄、曲渕城の曲渕房資等の助けを得て、永禄八年八月二十日に龍造寺方の番将を追払って帰国し、三瀬城を居城として二十六か所に要塞を置いて固めた。

翌九年四月から五月にかけて旱魃（かんばつ）となった。神代長良は、納富信景の所領である千布（金立町）・和泉（久

保泉町）等へ流れる水路を堰止めさせた。信景は、猶子信純に下徳永（久保泉町）に添うて水路を巡見させたところ、信純は長良の伏兵に襲われて討たれた。信景は部下を従えて馳せつけてみると、長良はすでに出陣していた。信景はこれを攻めて、高木・平尾（高木瀬町）に追詰めたが、盛り返され信景は佐賀に退いた。

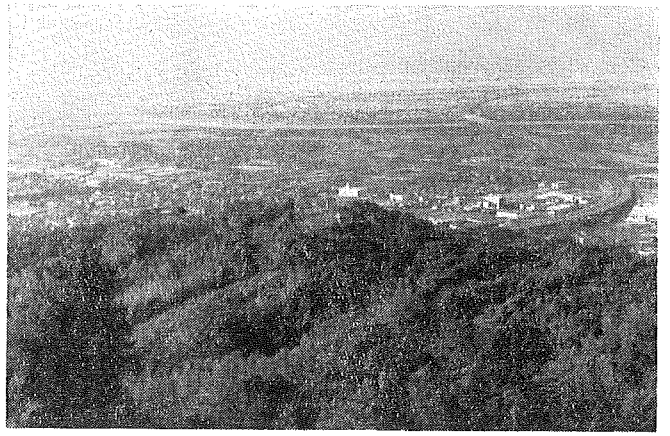
神代長良は、北村・五領（大和町）、高木（高木瀬町）、渕・藤木（兵庫町）の地を略して、三溝（神野町）に攻め込んだため、佐賀の北部まで神代領となった。

3　大友氏の来襲

龍造寺隆信は、永禄十年（一五六七）正月に、松浦党の旗頭である鬼子岳城主波多鎮及び上松浦草野の鬼ケ城主草野鎮永に専使を送り、十日には両人を招致したが、筑前怡土（いと）郡高祖城主原田入道了栄も隆信に使者を送って、親交を求めて来た。

大友宗麟は、少弐政興を筑後から肥前に入れ、隆信を討とうとし[21]、九月十七日には行弘弾正少弼をして隆信攻撃に尽力させている。

毛利元就は、永禄十一年（一五六八）九月二十日、部将吉川元晴・小早川隆景・福原貞俊等に対し、龍造寺氏応援については容易に応ずることを戒めている。毛利氏の部将吉見正頼・広頼父子が、原田入道了栄に元就の意志を伝えたところ、了栄は龍造寺氏と親交があったので、十二年三月五日広頼に、隆信と議して元就のために力を尽すことを告げた[22]。



大友陣営の高良山吉見嶽（久留米市高良山）

大友宗麟は、龍造寺隆信を撃つため、三宿老の戸次鑑連・吉弘鑑理・臼杵鑑速を先陣として、同国玖珠・日田両郡に布陣させた。宗麟は、翌十二年（一五六九）正月十一日に府内を出馬したので、三将は筑後高良山に陣を進めた。宗麟が二月十六日に高良山吉見嶽に陣すると、集る将兵は豊後のほか筑後・肥後・豊前・筑前の四か国にまで及び、その数六万人に達したという。

隆信は、宗麟が高良山に陣すると聞くと、一旦和議して事態を回避しようとしたが、大友方はそれに応じなかった。宗麟は、高良山の陣に在って、昼夜宴楽に耽り、三月になっても出陣の気配を見せないので、宿老の戸次鑑連が諫言した。そこで宗麟は、戸次鑑連ら三宿老を龍造寺氏討伐に向かわせた。

大友勢は神埼郡に進入し、神埼郡城原の勢福寺城主江上武種に、龍造寺氏攻めの案内を申し入れた。武種は、先年隆信と和して隆信の三男を養子に契約しているため、大友氏に容易に応じなかった。江上家の所伝によると、「今度大友の軍が佐嘉へ取懸申す由なるが、某の居城は東口一番であるから最初に攻めて来るであろうが、城原一手をもって彼の大軍を支えることは難儀であ

る。その節には、南の日隈山に狼煙をあげ申さん。その時は延引なく援兵を給わるべし。」と申し送ったという。そこで、火をあげ援兵を待ったが、隆信がよこさなかった。武種は怒って大友方に投じたといい、また一説によると、一族と議して大友方となったという。弟の貞種は反対し、龍造寺氏と和平しながら、今大友氏に従うことは武門の本懐ではないので、隆信と行動を共にするよう諫めたが、武種は応じなかった。そこで、自刃しようとしたが、刀を取りあげられ目的を果さなかった。このことが後に龍造寺氏方にも伝わり、鍋島信生（信昌）は貞種の心底に感じ、年を経てその子孫を家人に列し、食禄の地を与えたという。

大友方の三将は、三月二十三日に神埼郡神埼・蓼（たで）（田手）の両村で龍造寺方の軍と戦い[23]、四月六日大友勢は神代勢を案内として五領・長瀬・蛎久に働き、多布施に迫り、神代勢の一隊は三溝・神野・愛敬島・大財まで討ち入った。そのため大友勢と龍造寺軍との戦いが諸処で繰り広げられた。四月十七日、肥後の城親冬が双方に入って和平を談合したので、隆信は承諾し、大友方の戸次・吉弘の二将も軍を止めて、長瀬・蛎久の陣を引き川上へ退いた。隆信は、納富信安を阿祢（姉）に陣を布いている臼杵鑑速のもとに遣わし、馬一頭を贈るとともに、互に人質を取りかわし、隆信は秀島賢周を出し、和平することになった。

この頃、毛利氏が筑前の立花城を包囲したため、高良山に在陣中の大友宗麟は、肥前に在陣中の三宿老に早く龍造寺氏と和平し、その陣を解いて毛利軍に当るように申し送った。そこで三宿老は肥前の陣を引払い五月初めに陣を整えて、毛利軍と対戦した。尼子氏の遺臣山中鹿之介幸盛は、毛利軍の虚に乗じて尼子勝久を奉じ、旧領奪回のため兵を挙げた。そこで毛利軍は立花城には浦宗勝ら三人を残し置き、十月十五日の夜に立花表を撤退した。そのため、秋月種実・高祖城主原田入道了栄・筑前五か山の筑紫入道良薫等も大友氏



大友宗麟の書状（『五條家文書』）

に降り、唯独り、筑後妙見山城主星野親忠が従わなかった。これと前後して、隆信の弟長信は、大友氏の部将大友親貞に、龍造寺・大友両氏の講和を賀したが十二月十三日に親貞はこれを謝している。

質人として大友氏に出ていた秀島賢周は密に脱出して佐賀にもどった。大友宗麟は、再度龍造寺氏を討つため、自から大軍を率いて府内を立ち、元亀元年（一五七〇）三月十日に日田に着陣し、筑後に入って高良山を本陣とした。

この再度にわたる大友宗麟の肥前への侵攻については、宗麟が五條鎮定にあてた永禄十二年三月二十七日の書状[24]に、「存知の如く、龍造寺山城守の事、先年侘言（わびごと）深重に依り、赦免せしめ候の処ややもすれば一雅意（我意）の企て、殊に今度逆心顕然の条、此節誅伐の儀、分国中に至り堅く下知を加え候。」とある。

かくて宗麟は、戸次鑑連等三宿老に豊後・豊前・筑後・筑前の将兵を与えて進発させたので、三宿老は三月二十七日に肥前に入り、鑑連は佐賀の東の口神埼郡阿祢（姉）・境原に、吉弘鑑理・臼杵鑑速は佐賀の北の口春日・川上方面に布陣した。『歴代鎮西志』には、「東は巨勢野、神埼郡西端の犬童林、北は同郡城原、南は筑後三潴郡榎津にまで

わたった。」と記している。

筑後の将兵は南の舟手を受持って榎津に在陣し、神代長良は河窪に出張して川上に陣をとらせ、その他、高木肥前守・江上武種・犬塚弾正忠・横岳鎮貞・馬場鑑周・筑紫・綾部・藤崎・本告・姉川を始め東肥前の諸将はほとんど大友方となって、千布・金立・春日方面に布陣した。大友方の諸将中、西肥前の平井経治・後藤貴明・鶴田前については、六月二十三日宗麟から鶴田賢にあてた書状[25]によると、共に小城表に出陣することに決したことが見えており、小田鎮光もまた多久を出て小城表に出陣している。有馬義純も大友氏に協力し、大村・西郷を始め高来・藤津・杵島諸郡の将兵を相催し、西の口小城郡砥川・牛尾・丹坂まで軍勢を出した。大友方の軍勢は、山野・民家に群がり、日夜横行して社寺はことごとく焼き払ったといわれる。

これに対して龍造寺方は、わずか数千の将兵に過ぎなかったといわれ、西の口砥川・丹坂・牛尾には龍造寺信周・鑑兼、北の川上口には龍造寺家就・納富信景・広橋信了、南の船手には蓮池小曲城主の龍造寺長信、東の口には鍋島信房・同信生・小河信友を配して守らせた。

大友勢は、佐賀平野に満ちあふれながら城を遠巻きにするだけで、積極的な攻撃には出てこなかった。四月二十三日に龍造寺方では、第一陣鍋島信生・小河信友、第二陣納富信景、殿（しんがり）は隆信の旗本と定め、東の口の戸次鑑連の陣を急襲した。激戦の末、龍造寺方は遂に戸次鑑連の軍を潰走させた。

この戦勝について毛利氏の部将吉川元春が堀立壱岐守に与えた六月八日の書状に、「同（四）月豊州近陣に寄せ候処、龍造寺衆鉄炮数百丁にて射伏せ、近陣とも居えず候て、本日陣所へ引き退くの由候哉、誠に心地能き趣に候。」と述べている[26]。また、五月四日には川を隔てて両軍が合戦し、龍造寺方が大勝を得たが、

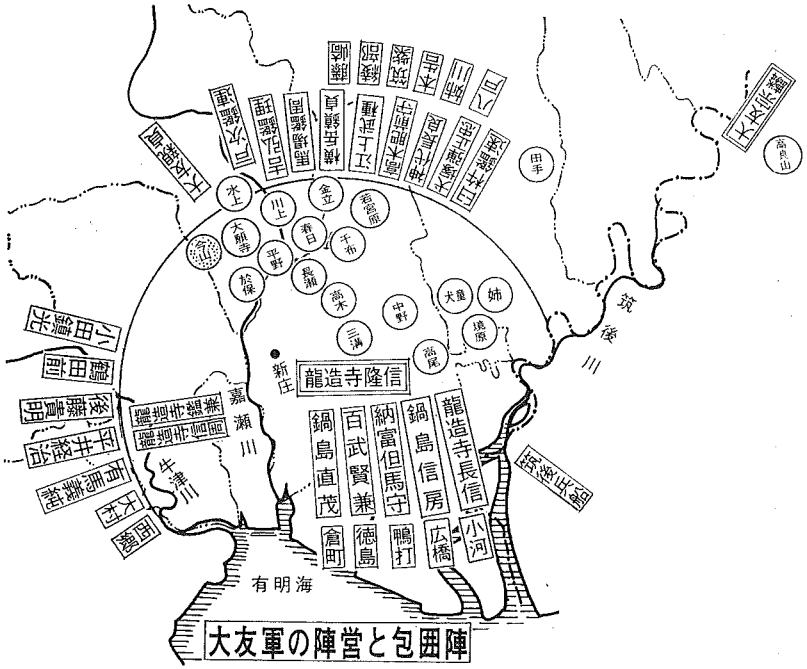


『九州治乱記』（佐賀県立図書館蔵）

この時も元春は堀立壱岐守へ書状を送り、「去五月四日、龍造寺へ豊州相衆働き、河を隔て候。互に鉄炮にていくさ候つる。豊衆河を引渡し一戦に及び、宗徒の者三百余人討捕の由に候哉、龍造寺衆比類無き行候云々。」と書いている。[27]

五月中旬、大友勢は佐賀郡高峰に押し寄せたが撃ちはらわれ、田尻親種は負傷して帰国した。六月十三日には、南無堂倶留利（天神社の周）で神代勢と戦って、龍造寺方は利なく多くの死者を出した。八月七日に戸次鑑連が高峰口に押し寄せたので、隆信は出馬して激戦の末に戸次方を巨勢野に退かせた。そこへ神代勢と八戸宗暘が押し寄せ、龍造寺方は苦戦したが、遂にこれを高峰江の南方に撃退した。

南方からの攻撃のため大友軍が筑後榎津に整備した水軍は、七月六日に数十艘で川副郷浮盃津に来襲したが、鰐江の無量寺僧や北村清兵衛などに防戦されて退いた。七月二十七日には、再び浮盃津に来襲し、鹿江・南里・石井等に撃退されたが、翌二十八日には、兵船に舫をつけ歩み板を渡して、掛引きを自由にできるようにし、浮盃津に来襲した。鍋島信生はこれを撃退



し、討ち取った首数百級を隆信に送っている。八月十七日には、大友方の田尻・雄城以下が兵船を率いて北走（橋）津に来襲したので、太田の田中城主太田美濃守がこれを撃退した。これ以後、大友方の水軍は来襲しなかった。

大友宗麟は、佐賀攻撃が進捗しないので、大友八郎親貞を大将とし、新手の兵をそえて佐賀攻撃に向かわせた。親貞については、『九州治乱記』には親秀とし、『歴代鎮西要略』には、「或は親秀といい、また晴秀という。」と記している。また、『九州治乱記』や『系図纂要』等には宗麟の弟とし、『歴代鎮西要略』には宗麟の猶子（兄弟の子）としていて、佐賀地方では一般に宗麟の弟としているが、弟とするのは陶隆房が擁立した宗麟

の弟八郎晴英（後の大内義長）との混同ではないかと考えられる。

大友親貞は、三根郡中津隈（北茂安町中津隈）の干飯原に集まり、田手（三田川町）の東妙寺で小憩し、八月十七日に今山（大和町）に着し、赤坂山に本陣を置いた。

「長瀬村天満社家旧記」（『歴代鎮西志』所収）に、

豊後の大将大友八郎殿来国の時、陣を移して長瀬の宮に到り、社殿を破却して本陣を営居せんと欲し、軍勢甲乙社殿に乱入し、将に殿宇を毀ち社殿を焚かんとす。其の行甚だ狼藉す。彼の大友は耶蘇の長外導（道）の魁、去年より茲に至る。国中の神社・仏閣・堂塔・伽藍之を焼き、之を崩す。悉く烏有となる。前代未聞の大悪也。且今復、当社を破らんと擬す。社人等愁嘆せざる無し。時に宝殿俄に震動し、空曇り雷鳴り、忽ち軍兵の屯に落ち、或は死し、或は悩み血を吐き、眼眩み、種々の怪異太だ思うべからざるなり。之に依って諸人怖畏を生じ悉く退散す。大将八郎殿、当社を避けて北山に向い、不日今山に陣す云々。

とあって、多少の誇張もあるが、大友勢の社寺狼藉の一端を想像することができる。

大友勢の佐賀包囲の状況は、『肥陽軍記』に次のように記している。

東は阿禰（あね）村より巨勢・犬童・若宮原・金立・千布・春日・高木・長瀬・三溝・川上・水上・大願寺・今山・平野・於保村に至るまで尺寸の地も残さず大幕を打つつけ家々の旗を立ならべたれば、山風にひるがえる有様夕日に映ずるよそおい、立田山の秋の夕べ吉野の春の朝もかくやと覚て目もあや也。たきつづけたるかがり火は沢辺の螢よりもしげく、あさけ夕げの煙立て月も光を失なえる。西は牛津川をさかひ有馬の大軍大友の命をふくんで押し詰たり。源平西海に戦いし昔新田足利の海中にあらそいしにも是程の大軍を

起せしためしはまれなるに、僅か五千にたらざる人数にて、春の末より秋はじめまで少しも弱気を見せられず、堅固に保ち給える御武略のほどこそあさからね。

勿論誇張もあるが、恐らく佐賀平野末曽有（みぞう）の壮観であったろうと想像され、佐賀の龍造寺方にとっては最も憂色の深い時であった。

親貞が着陣すると、春日・川上等の村長に酒食金品を贈与し、佐賀への道順その他を尋ねた。佐賀攻めの日程については、『歴代鎮西要略』によると、「明日は南塞（ふさがり）、明後日は摩利支天が南に在る日で南行は避けたいと、三日余り延期した。」とあり、『肥陽軍記』には、於保原で納富信景の軍を破った後、「今日は日暮れぬ。明日総攻めして龍造寺の城を屠落すべしと一決したりしかば」とあり、『九州治乱記』所収の七月十八日宗麟が肥後の隈部親永にあてた書状に、「佐嘉表一動、来る二十日に議定候」とある。これが確実であるとすれば、佐賀攻めの日程は、あらかじめ確定していたことになる。

『成松遠江守信勝戦功略記』に、「十八日の夜密かに家来一両人を敵陣の情況探知のため今山に派したところ、帰っていうには、敵陣は今夜酒宴の様子に見えるので、急ぎ馳せ向わるるがよいと、報じた。」とある。また、鍋島信生（信昌）は、十九日の早朝に敵情偵察のため中野村（兵庫町）まで行き、東は神埼郡の茶臼隈・日の隈から西は川上・真手野・今山まで、敵陣でない所はない有様を見て、「今山の陣を夜襲して、勝敗を一挙に決しよう。」といったという俗伝は、信生がこの時に農夫の話から暗示を得たのだという。

今山の陣を夜襲することに決定したので、八月十九日の夜、鍋島信生（信昌）はわずかの従者をつれて城を出たが、城下の道祖元（道祖元町）まで来た時に百武賢兼らがこれに加わったという。その後、次第に加わ

る者が多くなり、新庄（鍋島町）に着いた時、その地の伊東祐俊（家秀）が駄餉を献じた。信生は勝楽寺（鍋島町東新庄）の竹を切って、旗竿を作らせたが、このことについて、同寺所蔵の『松林山勝楽密寺来由写』に、「郡内神野の堀江社で蒙古退治の評定の時、天から日月両輪の旗一流下ったが、この時の旗竿に勝楽寺の竹を用いた佳例による。」とあり、『葉隠聞書』にも「鍋島家軍団の旗竿もこの寺の竹を切る慣例であった。」と記されている。

新庄西北の森川（嘉瀬川）を渡る頃には、信生の陣は相当に多勢となっていた。敵陣のある今山の西方、小城郡藤折（三日月町藤折）に着いた時は、すでに鶏鳴を聞く頃となっていた。藤折の東の辺から山に登り二十日未明に、大友陣の北方の山から降った。



鍋島直茂(信生)画像

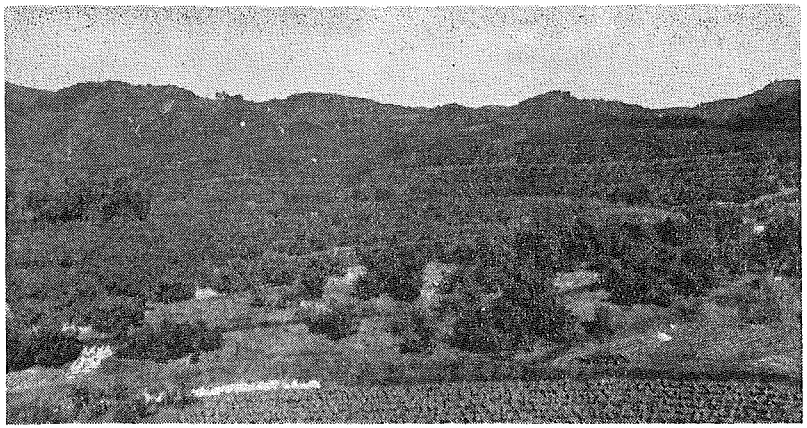
大友陣では、昨夜からの酒宴で酔伏している者もあった。

『九州治乱記』によると、

よく〳〵八郎が陣をうかがい見らるるに、帷幕の紋茗荷（みょうが）丸にて、燭の光に輝きその形鮮かなり。信生これを見て各々あの幕の紋を見よ。美わしき紋なり。唯今此陣営を一戦の中に切崩し、是を吉例に用いて、即ちわが紋にすべきぞ。

とあって、鍋島氏の杏葉紋（ぎょうようのもん）の由来を記している。大友陣が酒盛りをしていた場所は、陣営続きの東一段下で現在も「酒盛塚」と言い伝えている。

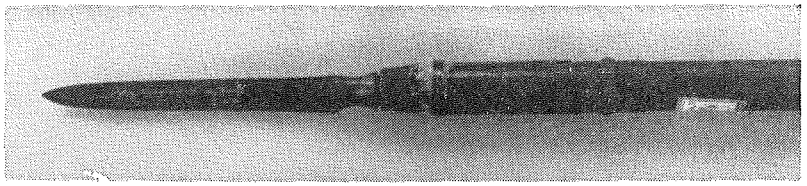
二十日卯の初刻（朝六時頃）一挙に大友軍の本陣に突入したため大友陣は不意を突かれて乱れた。大将大友親貞が主従三人で山越えしようとして逃れて来たところを、成松信勝が討ち取った。親貞は時に三十三才（『歴代鎮西志』所収「金立山本地堂の落書」）であった。主将が討たれて大友軍は総崩れとなり、肥後の城親冬・隈部親永、筑後の五条鎮定などが虜となった。その他、神代方の軍奉行古川佐渡入道が戦死し、杠重満・八戸宗暘は負傷後卒し、小田鎮光は筑後に逃れ大友軍の大半は逃走した。



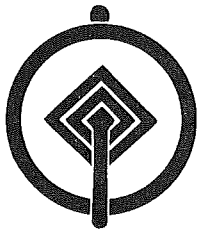


今山古戦場一帯と大友親貞の墓

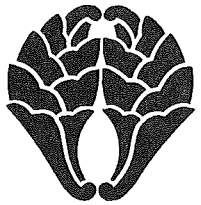
大友親貞の戦没地は、赤坂山上というが、小城藩主鍋島元武



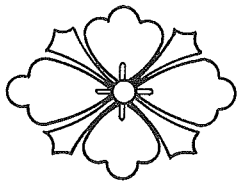
成松信勝が使った鎧（佐賀県立博物館蔵）



成松家の薬研子紋



杏葉紋



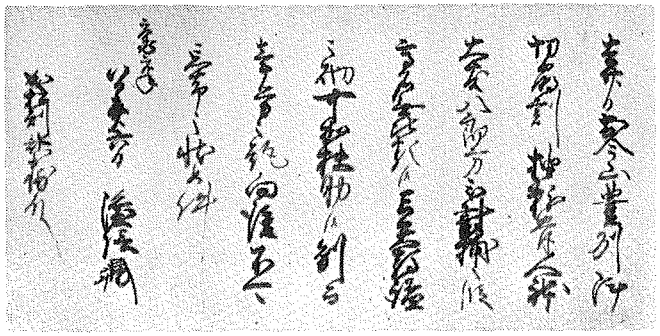
剣花菱紋

（金粟大和尚）が戦場跡に正勝寺を建てているので、或はその地ではなかろうか。墓は、百年忌に当る寛文九年（一六六九）八月二十日に春日高城寺の住持によって建てられたが、成松信勝の子孫の希望により、更に高い山上に移されている。

鍋島氏は、この今山陣の後に従来の剣花菱の家紋を改め、杏葉紋としたという。大友親貞を討ち取った成松家では、戦勝を記念して、親貞の髷巻にあった紺布の薬研子（やげんし）を家紋に用い、青銅（からがね）胴張りの太鼓を伝え、親貞を討ち取った鎧は保存されている。

今山陣は、龍造寺氏にとっては運命を賭した事件であり、その戦勝は長く記念すべきものであった。幕末の佐賀藩主鍋島直正の「国史を詠ず」の詩は、この今山陣に題したものであって、次のとおりである。

八郎大挙して栄城に寇し、今山山上陣営を列す、
三歳牛毛豊士の数、轍中の鮒魚は是れ城兵、帷幕



成松信勝に与えた隆信の感状（成松正夫氏所蔵）

雲の如く旗旄に似、秋日煌々として剣華明かなり、震龍笠を布き三計を決すれども、言を発し庭に盈ちて議未だ成らず、閫尼席を叩いて衆士を激し、吾が祖甲を擐きて響鏘鏗、行に従ふ貔虎僅に十七、勝楽寺裏竹を旌となす、八郎眼中に肥国なし、夜宴し将卒皆酔醒す、甲を解き弓を弛べて鼾雷答ふ、何ぞ料らん陣前鼛鼓の声、駭然但だ呼ぶ敵軍至ると、蹂躪逃亡して先を是れ争ふ、吾が祖指揮す白羽扇、敵を殺す麻の如く相縦横、龍家の四傑松信勝、八郎を識し得て実に先づ鳴る、鯨鯢一たび斃れて衆気を失ひ、豊兵懍々厥の角崩る、烈祖雄風海内に轟き、千載永く伝ふ竹帛の名。（『予章』による）

今山の奇襲功を奏して後も、龍造寺隆信はなお思案の状があった。鍋島信生（信昌）はこれを察して、直ちに多久へ向かった。八月二十一日の早朝、梶峰城に着き、使いをやって鶴仁王丸母子の受け取りを申し入れたが、小田鎮光の老臣江口右馬助等はこれに応じなかった。そこで、信生等は防禦する城兵を攻撃し打破って城中に入り、無事に秀ノ前と鶴仁王丸を奪い取って、佐賀に引きあげた。

隆信は、今山陣の論功行賞にかかり、二十三日には弟長信の功を賞して多久の地を与え、梶峰城に入れた。[28]



大友宗麟書状（『五條家文書』）

大友親貞を討ち取った成松信勝には二十六日に取りあえず感状を与え、吉弘大蔵を討ち取った斎藤杢左衛門を佐渡守として神埼郡米田原(三田川町目達原)に所領を与え、持永盛秀にも父子の功を賞して今山に知行五十町を与えた。

今山付近の大友勢は潰走したが、神埼郡阿祢・境原の軍はなお退かず、臼杵式部大輔（鑑良か）は佐賀のすぐ東境の高峰（高尾）に来襲した。八月二十三日に隆信は自ら出馬して戦い、式部大輔を討ち取ったので、残兵は東方へ敗走した。しかし、なお阿祢・境原の大友勢は退かないので、九月に入り隆信また も出馬して巨勢・若宮の大友勢を攻めたが、大友勢は退いて阿祢の軍に合した。その夜半に龍造寺軍は鬨(とき)をあげて、阿祢・境原の大友勢を崩れさせ、佐賀へ帰った。

今山陣の大友軍敗戦のことは、佐田弾正・田尻鑑種が大友宗麟に伝えた㉙。宗麟は表面に動揺の色を現わさなかったが、佐田弾正や田尻鑑種への返書等によると、やはり心中穏やかでなかったようである。

今山陣における大友軍の敗戦を、高良山の陣営にあって知った大友宗麟の動向を伝えるものに、今山陣の二日後に五条鎮定にあてた宗麟の書状㉚がある。それには、「小城表の様体、早々示し給わり候。心を添えられ候。案中に候。合戦の慣珍しからず候の条、更に仰天に及ばず候。」すなわち、勝敗は戦いの常

で珍しいことではなく、驚くこともないと述べ、更に、「宗麟も千栗まで急度(きっと)差寄すべきの条」とあって、宗麟はなお龍造寺氏の討伐を続行する考えであったことを知ることができる。

九月下旬、大友方の宿老戸次鑑連・臼杵鑑速・吉岡宗観は、下筑後高崎の田尻鑑種の陣へ来て会談した結果、田尻鑑種が佐賀に来て大友方の意見を隆信に伝えた。隆信はこれに応じ、ここに大友・龍造寺両氏は和議が成立した。隆信は捕虜とした肥後の城親忠・隈部親永、筑後の五条鎮定をそれぞれ本国に帰した。

注

① 曹洞宗十二か寺といい寺格を定めたもので龍造寺、鍋島両家に縁故深い名刹で、寛延四年恩田均著の『佐賀繁昌記』によると、本庄高伝寺、城西龍泰寺、城東宗龍寺、鹿子慶聞寺、八戸龍雲寺、水ケ江円蔵院、高岸天祐寺、多布施宗智寺、箱川妙雲寺、城原種福寺、久池井玉林寺、本庄静元寺

② 『龍造寺家文書』『普聞集』『水江事略』

③ 『河上神社文書』

④ 『九州治乱記』所収文書『歴代鎮西要略』所収文書

⑤ 『歴代鎮西要略』

⑥ 『河上神社文書』

⑦ 『龍造寺系図』

⑧ 『龍造寺家文書』

⑨ 『河上神社文書』

⑩ 『龍造寺八幡宮文書』

⑪ 『歴代鎮西志』

⑫ 『龍造寺八幡宮文書』

⑬ 崎村犬塚の城跡は神埼郡千代田町崎村の北端にあり千代田東部小学校の東側から神代川を越して古城の旧神代川に至る。先年神代川改修のため中心点今川底に入る上神代橋の下から下神代橋に至る。

⑭ 東古賀犬塚氏館跡は今川副町東北部東古賀にある。その旧跡と祖先の墓碑を残している。

⑮ 隆元の書状は少弐氏宛であるが西島城主であった横岳氏に写が伝わって来た。これは年紀がないが天文二十三年と思われる。毛利氏が陶氏と断交せるは過ぎし夏のことで去年ではなく九月からいう

とその年の夏であるから天文二十三年であり『肥陽軍記』に従うべきである。『歴代鎮西要略』『九州治乱記』の二十四年は誤り。

⑯『小田氏系図』
⑰『河上神社文書』
⑱『隆信公御年譜』
⑲『横岳系図』
⑳『徳島系図』
㉑『鶴田家文書』
㉒『閥閲録』
㉓『立花家文書』『高良山座主坊文書』『五條家文書』『横岳家文書』
㉔『五條家文書』
㉕『鶴田家文書』
㉖『堀立家証文写』
㉗『堀立家証文写』
㉘『鶴田家文書』
㉙『佐田家文書』『田尻家文書』
㉚『五條家文書』

○主な参考文献

『九州治乱記』『肥陽軍記』『隆信公御年譜』『龍造寺記』『歴代鎮西要略』『歴代鎮西志』『藤龍家譜』『普聞集』『水江事略』

㈢　龍造寺氏の全盛

1　東肥前の征服

元亀元年（一五七〇）九月、今山陣が落着したので、龍造寺隆信は大友氏与党の討伐にかかったが、この間に隆信に投降する者も出た。すなわち、東肥前では神埼郡の姉川信安・犬塚家広・本告氏、養父郡の綾部鎮幸等が和を請い、あるいは好を通じ、西肥前では杵島郡の井本以下があった。

まだ屈しない者に、神埼郡の江上武種、三根郡の横岳鎮貞・馬場鑑周、養父郡の筑紫鎮恒等の他、代々少弐氏の被官であった宗義調①があり、西部には杵島郡に須古の平井経治、上松浦の波多鎮・鶴田前・草野鎮永、島原半島の有馬氏等があった。

隆信は、元亀元年十月に弟信周を杵島郡小田（江北町）に置いて、須古の平井経治と藤津に出張して来ている有馬氏に備え、一族信重（後の家晴）を蓮池の小曲城に据えて、東の口を抑えさせた。

大友宗麟が元亀元年十一月八日に、江上武種に与えた坪付に、神埼郡の土師（はじ）・本告・賀崎の三郷等が見えている。②隆信は、江上武種が約を破り大友氏に与（くみ）したため、元亀二年（一五七一）に鍋島信昌（信生）を先鋒とし、龍造寺信種・同家就以下を遣わして、武種を討伐させた。武種は、宿老執行種兼に南の追手横大路口（神埼町）の大門を固めさせた。大門より南へ押し出して来た江上軍と、龍造寺軍との間に戦いが始まっ

たが、龍造寺軍は敗退し、後陣もまた敗れた。そこで隆信は、鍋島信昌を先手として自ら出馬し、江上勢の執行種兼を破り、勢福寺城に退かせた。

種兼は、江上武種に和議を勧め、龍造寺・江上両氏は遂に和睦し、隆信の次男亦四郎を武種の養子とした。③亦四郎は家種と改名し、佐賀から乳母夫諸岡安芸守以下が従って勢福寺城に入った。武種は、所領二千百町と重代の名剣小胸切を家種に譲って、元亀二年二月属城の田手日吉城に隠居した。

小田鎮光は、大友氏襲来の時に大友氏に属して敗れ、筑後酒見（大川市）に走っていた。隆信は鎮光を誅伐することにし、鎮光の妻室であった養女秀ノ前を利用して、鎮光を佐賀に誘い出し、四月九日の深夜納富但馬守の宅にて誅殺した。秀ノ前は、父隆信の処置を怒り、自害しようとしたので、隆信は子太郎四郎（後の政家）に昼夜警護させた。

この年の秋から冬にかけて、三根・養父両郡の城将が筑後衆と会し、少弐政興を擁立して、隆信の進出を防ごうとしたので、隆信は両郡に出馬することにした。隆信は、江上氏の老臣執行種兼に江上衆を率いさせて先陣として攻め進んだところ三根郡の土肥家実・坊所尾張守以下が降った。時に、神代長良が佐賀郡千布に出陣して、虚を狙っていることを聞き、隆信は急ぎ帰城した。

西部の抑えとして杵島郡にいた納富信景は、先年来私憤のある神代長良が出陣したことを知ると、後事を託して佐賀に帰り、隆信に請うて先陣となって出馬し、神代勢と戦った。しかし双方に和議の話が抬頭し、鍋島信昌が使者となって長良を説き、龍造寺・神代両氏の間に和議が成立した。

元亀三年（一五七二）三月下旬、隆信は嫡子鎮賢（後の政家）を伴って神埼の櫛田社に陣し、軍勢を催し

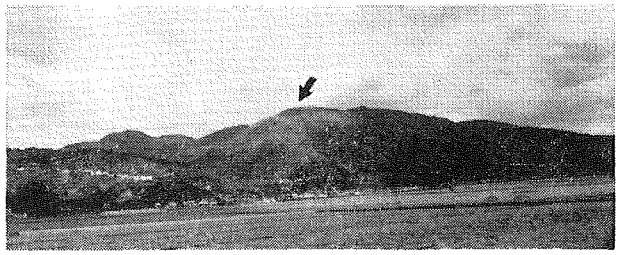
た。神代氏の陣代を始め、江上・内田・本告等新附の諸将も参陣したが、横岳鎮貞・馬場鑑周・筑紫鎮恒・宗義調等は一味同心して従わず、大友氏に注進して来援を求めた。

龍造寺軍は、次いで米田原を過ぎ筑紫氏一族の籠る綾部城を攻略した。鑑周・鎮恒・義調等は、養父郡の勝尾（かつのお）城に籠り、同郡朝日山に砦を構えて防いだ。隆信は、執行種兼を案内者として朝日山の砦を攻めたが、攻撃は数日に及んだ。種兼は四月二日の朝、城原勢のみをもって奇襲し、朝日山の砦を陥れた。

隆信は、次いで勝尾城攻撃に向い、和を勧めたので、和平に応じ質子を出した。隆信は養父郡の陣を撤して、三根郡西島城の横岳鎮貞を攻めることにした。西島城攻撃では、先手が敗れたのでその攻撃を中止し犬塚家広を崎村から中津隈へ、姉川信安を神埼郡姉川から三根郡米田にそれぞれ移し、横岳鎮貞の所領の内米田村百町余を押収して信安に加封し、両人に土肥家実を加え、この三人で三根・養父の両郡を守らせた。ここに、隆信は、執行種兼の軍功を賞し二百町を加恩して佐賀に引揚げた。このようにして、東肥前は、龍造寺隆信の武威に靡くことになった。

2　西肥前の征服

天正元年（一五七三）冬、上松浦草野（浜玉町）鬼ケ城主草野鎮永は、軍勢を小城郡に入れ、千葉胤誠の旧臣等に一揆をおこさせた。小城の持永盛秀・陣内蔵人等が隆信に救援を求めたので、隆信は小城に出馬して一揆を撃ち払い、警備のために松尾山に陣を構えた。隆信は進んで上松浦の草野氏を討伐することにしたが、山内の神代氏の所領が草野氏の所領と接しているため、神代氏にも出兵を求めることにした。使者を遣



鬼ケ城跡の遠望（浜玉町谷口）

わし、成功の上は草野氏の所領を分譲することを条件にし、長良を了承させ出兵させることにした。隆信は松浦党の首領鬼子岳城主波多鎮にも協力を求めたところ承諾したが、獅子ケ城主鶴田前（すすむ）は依頼に応ぜず、鎮永に与した。

『神代家伝記』によると、隆信は天正二年（一五七四）正月二日未明に佐賀を出発し、小城郡岩蔵から石台越（しゃくだいごえ）をし、三日天山北麓の市ノ川から上松浦に入り、池原に出ている。しかし、正月二日に隆信が市ノ川から弟長信に与えた書状写④によると、隆信は二日には市ノ川にいたことが確かである。その書状には、「今日出張に就いて飛脚に預り候、畏入候、彼の使見申し候如く、近日は市河山に至り着陣候、明日、草野程近く取り寄すべく候、同四日、草野の里城取崩すべく候、吉左右（吉報）是より申すべく候、（以下略）」とある。

隆信が五段田（浜玉町五反田）に着くと、神代長良も藤ノ瀬から麻那古を越え、滝ノ川を経て五段田に到着した。隆信は、軍を三陣に分けて平原へ進んだが、草野方は平原峠へ出て龍造寺軍を迎え撃った。多久家所蔵の正月五日隆信から長信へ宛てた書状⑤に、「去る三日、平原の如く（の方に）陣替候処、敵出合い候条防戦を遂げ、敵数多く討取候」とある。隆信は鬼ケ城攻略にかかったが、城主草野鎮永は防ぎかねて、筑前怡土郡に逃れ、同郡高祖城の原田了栄を頼った。隆信から長信への書状⑥に「則里城切取候、草野方の儀、今日下城相定

候、云々」とある。

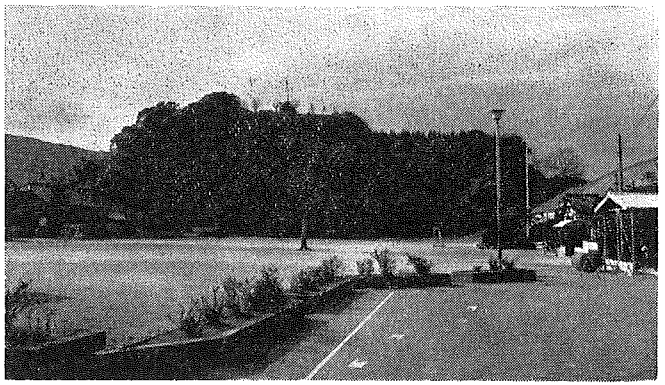
『普聞集』によると、隆信はこの時神代長良と初対面をしたという。長良は、隆信から約束の通り、鎮永の所領の内草野七か山（馬川・仁部川・刈川・瀧川・荒川・藤川・厳木川）を与えられたが、仁部川のみは子細あって鴨打胤忠に与えられたので、その代地として佐賀郡内に所領を与えられることになった。

隆信は、更に進んで筑前に入り、原田了栄の領地大鳥居に放火した。了栄は孫の冠者（草野鎮永の子）を伴って、隆信の陣へ来て和を請うた。隆信はこれを許し、冠者に加冠して三郎信種と称させた。その後、隆信は鴨打胤泰の娘を養女にして、信種に配した。また、了栄が鎮永のことを歎願したので、これを許して本領に帰らせ、倉町信俊の二男を鎮永の養子にした。

平戸の松浦肥前守も誓紙を捧げ、壱岐の日高主膳正、五島の宇久氏等も平均を賀して幕下となった。隆信は、再び上松浦に出陣したので、鬼子岳城主波多鎮（三河守親）は早速家臣を差出すと共に、自身も案内のために法師良（ほうしろう）に陣した。隆信は烏ノ巣に着陣して獅子ケ城を攻めたが、数日経っても落城しなかった。しかし、遂に屈して城主鶴田前は和を請うたので、隆信はこれを許した。

隆信は、上松浦地方の平定が終ったので、龍造寺家秀・高木胤清・石井忠家・神代弾正忠・武藤左近将監等をそれぞれの城に残し多久に移った。

天正二年（一五七四）二月、隆信は多久の梶峰城にいて、女山一揆の残党を打ち平らげ、次いで、杵島郡の塚崎城主後藤貴明、同郡須古の高城主平井経治を討伐するため軍を率いて出発し、三月北方西北の白仁田山に陣した。経治は隆信の陣地に攻め込んできたが、龍造寺方はこれを防ぎ、平井の陣に切りかかって平井



須古高城跡の遠望（白石町須古）

氏の宿将川津経忠を陣没させ、平井方を退けた。その後、隆信は久津具に屯し、更に小通に移陣した。

高城は要害の上に、城主平井経治は無双の勇将であるため、龍造寺陣では種々対策について異見もあったが、あくまでも高城を攻略することに決し、横辺田に陣をすえた。鍋島信昌は、種々策を講じ、城主経治の弟直秀を招き遂に口説き落した。直秀は一旦支城男島城に戻って諸将と議し、遂に経治を高城から追放することに成功した。経治は城を去って、藤津郡吉田に退いた。次いで隆信は、後藤貴明と和し、西肥前の大半を鎮定した。高城には経治の弟直秀をすえ、納富信景を横辺田に置いて、帰城した。

隆信は、平井経治が十月旧地に帰り、高城を囲んで直秀を自刃させ、旧城を復したことを聞き、十一月下旬に出馬し、杵島郡福母山に本陣を置いたが、下松浦に出陣中の弟信周も馳せつけた。

龍造寺方は大軍を投入して、四方より城を攻めたが、城の守りは堅固で激戦が続いた。しかし、遂に高城は落ち、城主平井経治は城を出て逃亡したというが、その最期は明らかでない。隆信は、弟信周を城主にすえ、十二月二十一日に帰城した。

塚崎（武雄市）城主後藤貴明は、平戸城主松浦隆信の三男を嗣子として惟明と称させていたが、次第に軽くみるようになり、十二才の実子甫子丸（晴明）を重んずるようになった。惟明は養父貴明を亡き者にせんと、まず貴明の重臣後藤山城守を討ち取ることにした。このことが洩れて、貴明は六月二十三日の夜明けに宮野館（山内町）に移った。

この時、貴明・惟明の双方から隆信は来援を頼まれたが、隆信は貴明を援助することにし、小河信貫等を派遣した。七月三日に惟明は降服し、平戸領彼杵郡早岐に追放された。貴明は、隆信に謝礼すると共に、今後別心を起さぬことを堅く誓った。

龍造寺隆信は、天正三年（一五七五）三根郡西島城主横岳鎮貞を攻伐するため、龍造寺信周・家晴等を遣わした。今まで龍造寺氏に屈することなく抵抗を続けてきた鎮貞も、大友宗麟の援助も期待できない上に、一族の頼続が降服を勧めたこともあって、遂に一戦もまじえず隆信に降服した。

それより筑後の貝津城主安武家教を降し、東肥前のすべてを隆信は帰属させたので、三根の中野城主馬場鑑周を杵島郡小田に、綾部鎮幸を杵島郡横辺田に移した。

杵島郡塚崎城主後藤貴明は、天正二年に隆信の援助を得て父子の紛争を解決して貰い、別心なきことを誓ったが、翌三年春には隆信に害心をいだき始めた。一族の後藤貞明は子細があって、このことを佐賀に通じた。そこで隆信は塚崎城を攻めたが、城は落ちなかったので使者を遣わして和睦した。隆信は三男善次郎（家信）を貴明の養子として、貴明の娘槌市女を配し、貴明の子弥次郎（晴明）を隆信の養子にして弟長信の娘を配した。

隆信は、天正三年初秋のころから平井氏の旧城である杵島郡須古の高城の普請にかかり、この冬一応完成した。『龍造寺記』には、「天正四年一月経営す、築畢って自ら是に居る。」とある。

有馬氏は、島原半島日江の原城主で、その勢力は高来・彼杵・藤津・杵島の四郡に及び、更に東方小城郡をもうかがっていた。藤津郡の浜に松丘城（鹿島市浜町）、鹿島に鷲巣城（鹿島市高津原）、北鹿島に横澤（造）城（鹿島市本町）の三城を構え、東方へ進出する拠点とした。しかし、一方では有馬氏の部下であった藤津郡宇礼志野（嬉野町）日守城主宇礼志野直通⑦は、隆信に応じ、日守城を姉婿大村大和守に守らせ、烏帽子岩城に弟左衛門（権現山城主通益）を置き、自らは新城を鹿島の渡口に構えてここに入った⑧。

隆信は、藤津郡の有馬氏の情勢を探るため犬塚鎮家と徳島信盛を招き、その任を依頼した。両人はこれに応じ、鹿島に森城（森岳城―鹿島市北鹿島）を構えた。

天正四年（一五七六）正月二十日、隆信は高城を出て、有馬氏討伐のために藤津郡へ向った。二月六日に横澤城に迫り、激戦の末、城を陥れた。これと前後して鷲巣・松丘などの諸城も陥落して、有馬義純・同義直は有馬へ退いた。『越後入道宗佐伝』には、藤津の士降り属する者として、「永田右京・大村越中守・嬉野元可・原讃岐守」と記し、『九州治乱記』には、「ここに於て藤津郡の歴々、嬉野越後守直通・同陸奥守通益・同子息與右衛門尉・同大和守・原豊後守直家・吉田左衛門大夫・永田左京亮通清・久間薩摩守・上瀧志摩守盛貞を始めとし、我れ先にと参陣して龍造寺に相従う。」と記されている。

隆信はしばらく鹿島に滞陣して、犬塚鎮家・徳島信盛に新恩の地を与え、有馬氏の松丘城を修補すると共に、鍋島信房を鹿島に置いて有馬氏に備えた。この一戦によって、有馬氏の藤津・杵島両郡における勢力は

駆逐されて、龍造寺氏の支配下に属した。

この頃、大友宗麟は少弐氏の遺孤政興を奉じて少弐氏の復興を図っており、隆信の藤津討伐の虚をうかがって挙兵したのではないかと考えられ、二月二十六日に筑後の五條鎮定に協力を求めている⑨。これと前後して、宗麟自らも筑後に出陣し、三月二十三日には五條鑑量の功を賞している⑩。政興は三月三十日に鎮定を佐賀郡巨勢に安堵しているので、東肥前でも戦いがあったものと考えられる⑪。三根郡光浄寺に六月二十七日隆信の、七月二十八日鎮賢（龍造寺政家）の軍勢乱入の禁制⑫が出されているのは、そのころ寺が戦乱の被害を蒙るのを恐れて依頼したものではないかと考えられる。



少弐政興安堵状（『五條家文書』）

龍造寺氏に帰順した上松浦稗田（北波多村）の鬼子嶽城主波多鎮、伊万里城主伊万里治（家利）、有田唐船岳（西有田町）城主有田盛は、有馬氏に唆かされて俄かに変心し、一手になって獅子ケ城を攻めた。城主鶴田前は、加番の龍造寺河内守・馬渡主殿助等と城を出て応戦し、天正四年六月二十八日討死した⑬。波多鎮は、多久梶峰城主龍造寺長信が来援することを聞き、福井山城守を遣わして、小城郡



龍造寺隆信禁制（『光浄寺文書』）

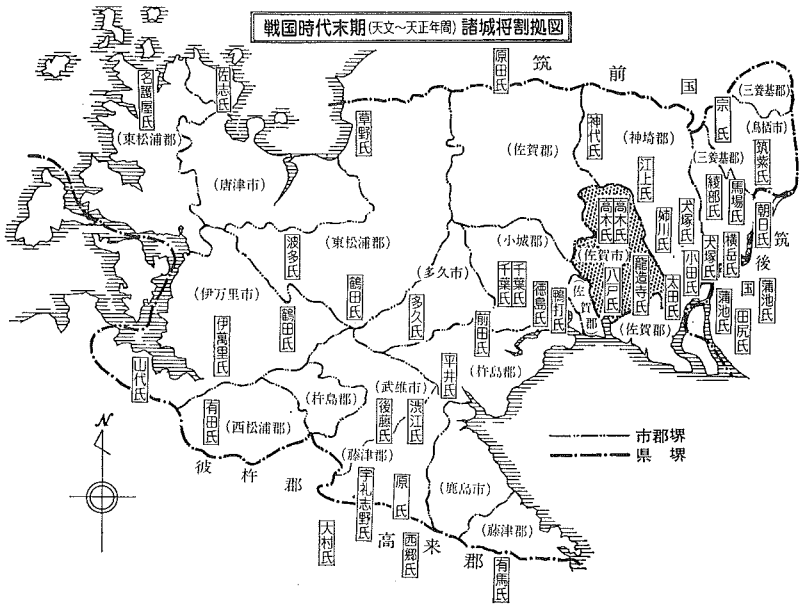


龍造寺鎮賢禁制（『光浄寺文書』）

多久原に支えた。長信の家臣相浦等がこれを攻め崩し、上松浦に入り天ノ川城を攻略して鬼子岳城を囲んだ。鎮は、遂にわびを入れて降った。

天正五年（一五七七）隆信は、伊万里の城を攻め降した。これと前後して有田唐船岳城主有田盛が卒したので、その後室は使を隆信のところに出して和を求め、世嗣が幼少のために、龍造寺信周の次男彦右衛門を請うて養子とした。また、大木城主（西有田町）も降ったので、伊万里地方も龍造寺氏に帰属してしまった。

同年隆信は、弟の信周を有田に在番させ、大村氏討伐のため、藤津郡の俵坂を越えて彼杵郡に入り野岳に



陣し、平戸の松浦や塚崎の後藤の諸氏にも軍勢を催促した。六月二十日に隆信は城攻めにかかり、攻防戦が続いたが、城は遂に落ちたので、城主大村純忠は和を請い、龍造寺・大村両氏の間に和議が成立した。

隆信は、六月下旬に大村を発って、高来郡伊佐早城主西郷純堯を討伐するため伊佐早に向かい、まず同郡の宇木城を攻め落した。純堯の弟純賢（すみまさ）が双方に入って、和議を整えたので、十月十四日箭上（やがみ）幸治・西郷幸光以下一門二六名の神文を隆信に差出した。[14]

隆信は、進んで有馬氏を討とうと、十二月島原半島の神代（こうじろ）に上陸し、領主神代貴茂（こうじろ）の歓待を受けた。島原城主島原純豊は隆信の陣に参ったが、有馬鎮純は安富・安徳諸氏と一体となって、隆信に抵抗した。龍造寺軍の先手は崩れたが、後に形勢を立て直して有馬勢を退けた。更



箭上幸治の起請文（『龍造寺家文書』）

に隆信は、千々石城主千々石直員を攻めたがこれにも大いに悩まされた。歳末も近づいたので、隆信は軍を引き佐賀に帰った。

天正六年（一五七八）正月、龍造寺隆信は有馬氏を討伐するために再び渡島した。上陸すると、神代貴茂は異心なく、また、当郡の安富純泰・同純俊を始め、松薗備・力武豊も参陣し、起請文[15]を捧げた。しかし、島原純豊のみは帰属を確かめ質子を取っておく必要があるとして、使者を出し二度目の交渉で、純豊は嫡子李左衛門を質子として出した。島原半島の城将は、ほとんど隆信に従ったが、有馬鎮純だけは従わなかった。しかし、鎮純も領地は狭く無勢となったので、遂に和を請い三月二十三日安富純生を納富の陣所に派して書状を差し出した。隆信は、はじめて鎮純に対面し、その女を隆信の長子鎮賢の婦にすることを約束した。

3　筑豊諸国の経略

隆信は、肥前の全域を領し、更に壱岐・対馬を併せたので、隣国へ出馬することになった。当時、筑前には大友氏の勢力がのびて来ていた。大友氏は主なる部将を西筑前に置いて、毛利氏に対する備えを固めると共に、その与党の面々を肥前の抑えとした。すなわち、宗像郡立花城には宿老戸次鑑連、御笠郡岩屋城には高橋紹運、宝満城にはその嗣子統虎、早

良郡荒平（安楽平）城には小田部紹叱、那珂郡鷲ケ岳城には大津留宗秀、志摩郡柑子岳城には臼杵鎮富を置いていた。

隆信は神埼に出馬し、先手には城原衆を充てることにし、大将に江上家種、軍奉行に執行種兼・諸岡安芸守等を任じ、早良郡に討ち入らせたところ、脇山の住人重松対馬守を始め数十人が江上衆の陣に加わった。そこで、彼等を案内に立てて進み、脇山の西の内野に要害の地を選び、種兼等に交替で守るように下知して、隆信は佐賀へ帰った。

薩摩の島津義久は、日向の伊東義祐を破り、日向を手中に収めたが、義祐が大友氏に旧領回復のための援助を依頼した。島津氏は、大友氏が龍造寺氏を味方につけ合体して島津氏を攻めることにでもなれば一大事であるとして、天正六年（一五七八）六月十九日、島津氏の家臣三人が龍造寺氏の宿老納富氏にあてて、「豊後から防戦の企てについて申し入れがあれば、島津方と談合して欲しい。」と申送り絹布四段を贈った[16]。

大友宗麟は、義祐の請いに応じて出馬し、島津軍と戦った。隆信は、この大友氏が遠征している虚に乗じて筑後を計略しようと、十一月十九日大軍を率いて出陣し、筑後の三潴郡酒見村（大川市）に布陣した。当国の諸将の多くは隆信に従い、隆信の陣に馳せ参じたが、上妻郡戸原河内の城主戸原紹真、同郡山下の城主蒲池鑑広、三池郡古賀の城主三池鎮実等は隆信に従わないで、その居城に籠った。そこで隆信は、まず戸原の城を攻めることにして、軍を戸原河内に向かわせた。ところが、伊駒野城主川崎鎮堯が兵を率いて戸原の城を援けたので、龍造寺軍は敗れて退いた。

隆信は、筑後はそのままにして筑前に入ることにし、十二月朔日に酒見の陣を引払って、筑前へ向かっ

た。秋月種実・筑紫広門その他早良郡衆が馳せ参じたので、それらを案内者にして、立花・岩屋・宝満の諸城を攻めようとしたが、どの城も堅城で簡単に陥れることは不可能であったので引きあげた。

隆信は、天正七年正月二十日、子鎮賢と共に、高良山の麟圭を座主職に安堵させたというが、これはこの頃筑後が隆信の勢力下に入ったことを示すものであろう。

天正七年（一五七九）三月、龍造寺隆信は大軍を率いて再び筑後に出兵した。山門郡鷹尾城主田尻鑑種は昨年十二月に龍造寺氏に心を通じたため、甥の蒲池鎮並と共に隆信の陣に参じたので、鑑種・鎮並を案内者として瀬高を通り竹井村に陣を進めた。田尻鑑種は三池鎮実と龍造寺氏との和議について努力したが、成功しなかったため、隆信は遂に三池鎮実の討伐に向かった。三池勢との間に激しい攻防が続いたが、夕暮になって大雨となったため、龍造寺軍は尾嶺に退いた。城主鎮実は、風雨に紛れて脱出し、城は陥落した。

次いで隆信は、肥後の筒嶽城主小代宗禅を攻めるため軍を進め、芥田神で小代勢を撃破し、小路口・米山でも小代勢を降し、宗禅の梅尾館を焼払った。そこで、宗禅は筒嶽の本城へ逃れ、降服したので、攻撃を中止した。

隆信は、軍を筑後に返し、当国屈指の城将である上妻郡山下城主蒲池鑑広を討伐するため、同年四月八日に軍を進めた。鑑広は諸処の要害を固めると共に、生葉郡星野親忠の城を攻撃中の大友軍に援兵を頼んで、龍造寺軍の来襲に備えた。龍造寺軍は、菖蒲尾の要害を攻め落し、十日には山下城の麓に攻め進んだ。しかし、この頃肥後に出馬する必要が生じたため、隆信は一時山下城攻めを中止した。

五月下旬、隆信は田尻鑑種を案内者として、玉名郡和仁の和仁大膳亮の居城を攻めた。大膳亮は防ぐことができず開城したので、隆信は鑑種の一族である田尻鎮貞をこの城に置いた。

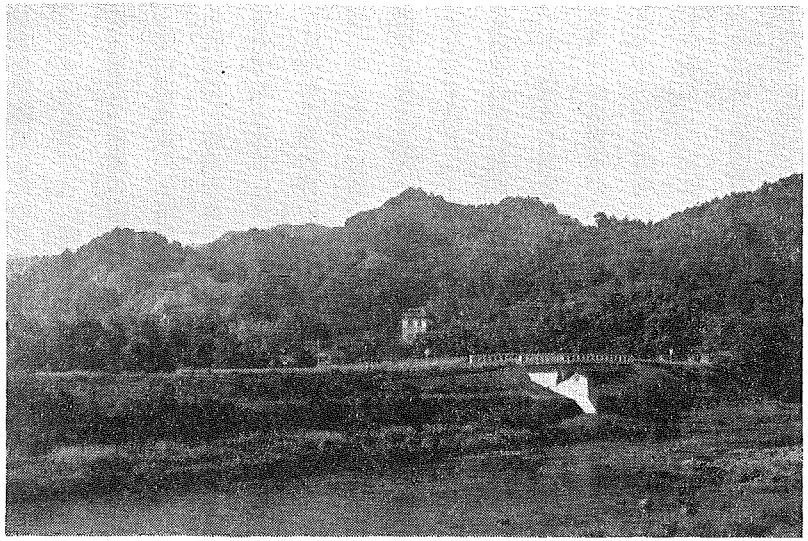
六月に入って、山鹿郡木山城の永野紀伊守を攻め落し、益城郡御船の城主甲斐入道宗運・親秀父子を始め、木野・山鹿の諸将はことごとく隆信に降った。そこで、龍造寺軍は、すべて筑後に引返した。

隆信は筑後の下妻郡水田に在陣し、六月下旬に山下城の攻略に取りかかった。この時、上妻郡伊駒野城主川崎鎮堯が居城に籠ったので、軍を差し向け七月二十一日に城を攻め落した。

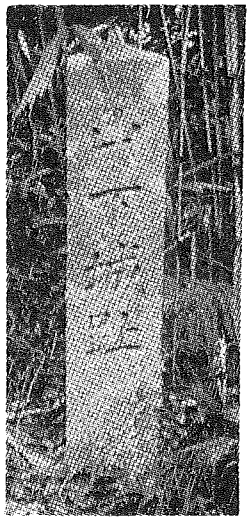
山下城の攻撃は長期に及び、小競合いが続いていた。その間九月上旬には、先に筑前の大友方の押えとして筑前早良郡内野の砦に置いていた執行種兼が、立花城から荒平・鷲ケ岳両城へ運んでいる兵糧の番兵を奇襲してこれを打破り、また、肥後八代の赤星統家を説伏せて味方につけ、その長子を質子として隆信に差し出させた。また、大友宗麟の子義統は、自ら出馬して八月二十二日に日田に布陣したので、隆信は秋月種実を介して八月二十二日に援軍を安芸の毛利輝元に依頼したが、二十六日に毛利氏の部将吉川元春・小早川隆景が連署で援兵を送る旨の返書を届けている。

山下城は要害であり、一方では大友義統が筑後の生葉郡に滞陣しているのを後援に頼み、九月朔日から始まった龍造寺軍の本格的な攻撃にもよく耐えていた。然るに、大友軍は十一月初めに豊後へ帰陣したため、十一月三日に鑑広自身隆信の陣へ来て、和を請い、質子を出すとともに起請文[17]を提出した。そこで隆信は、十一月二十八日に山下城の囲みを解いて陣を高良山に移した。

隆信は、筑後及び北肥後を平定したので、一族の家晴・信時を肥後の玉名郡高瀬に置き、土肥家実を北の小代城に置いて、島津・大友両氏の与党を抑えさせ、鍋島信昌を筑後酒見の城に置いて筑後を守らせ、十二



山下城跡の遠望（八女市立花町）



山下城址の碑

月三日帰城した。五日、隆信は鎮賢と連署で起請文を田尻鑑種に与え、筑後衆が鑑種に対しどんな疑いをもっても鑑種を捨てないこと、別儀なき心底を保てば領地等については協議すること、鑑種の身上について世上で風説があっても正否を糾明すべきこと等を誓った。⑱

龍造寺隆信は、肥前・筑後・壱岐・対馬・北肥後・西筑前を抑えたので、その勢威は隆々たるものがあり、『龍造寺記』『隆信公御年譜』によれば、「前年隆信は家臣田原尚明を小早川隆景に遣わして、前将軍義昭に通聘する。」とあり、『九州治乱記』に

は、「隆信は家臣三浦可鷗・土肥信安・田原尚明・水上坊仁秀（脊振山の僧）・西岳坊賢也（与賀社僧）を代る代る使節として中国の毛利輝元に頼まれ、公儀を窺ひ奉られける」とある。『歴代鎮西要略』にも、「毛利輝元と親しみ、中国・西国をともどもに討ち従へ、まさに上洛して天子相府を輔くべし。」とある。なお、『普聞集』などによると、輝元の方から隆信に使者を出したとあり、『歴代鎮西志』には、「毛利氏は家臣志道口羽・財満等を佐嘉に派した。」とし、また、「前将軍義昭は、隆景に九州経略の方略の方法を調べさせた。」とあるから、これらに信を置き難い点はあるにしても、隆信は毛利氏または前将軍と交歓があったのではないかと推測される。

筑後柳川城主蒲池鎮並は、従来龍造寺氏に好意を寄せていたが、天正八年（一五八〇）二月居城に籠って、龍造寺氏に叛するという事件が起った。蒲池氏は、宇都宮久則が下妻郡鹿待（蒲池）郷に居住して、一万二千余町を領し、筑後の城持大名二四人の旗頭であった。鎮並の父鑑盛は、隆信の曽祖父家兼が筑後避難の際も隆信が筑後落ちの時も扶持して護衛した。鎮並も隆信の筑後経略には、案内役を果すと共に各地の合戦で戦功を立て、天正六年の耳川の役には大友氏に応じたものの、途中病と称して龍造寺氏に義理を立てるため帰国した程であった。

隆信は、田尻鑑種が鎮並に異心があることを内報したので、前年の十二月初め頃から誅伐について鑑種と密談した。十二月五日に隆信が鎮賢と連署で鑑種に起請文を出し、また、十二月九日には筑後の内千町及び所望の地筑後の津留村・浜田村に百三十町を与えることを鑑種に約束⑲したりなどしているのは、鑑種は鎮並の伯父であり、鎮並の動向が微妙な段階にある時、鑑種との関係をより親密にしておく必要が隆信にあった

ことを物語るものであろう。

蒲池鎮並が籠城したとの知らせが、田尻鑑種や筑後酒見城にいた鍋島信昌から隆信のもとに届いたので、隆信は長男鎮賢を主将として、大軍を派遣した。龍造寺軍は二月十三日鎮並の柳川城を囲んだが、攻撃を急がず包囲の時日をかさねた。

大友氏が筑前に置いた荒平城の小田部紹叱、鷲ケ岳城の大津留宗秀が、去る天正七年九月下旬に、立花城から兵糧を運搬中、隆信が早良郡内野の砦に置いた執行種兼が奇襲したため、小田部・大津留の両将は討死した。これを知った大友宗麟は、天正八年の夏、龍造寺方討伐のために、臼杵鎮富・小佐井鑑直を将として筑前に軍を進めた。

隆信は肥前の諸将に出陣するよう呼びかけ、自ら出馬したので、隆信のもとに参陣するもの多く、数万にのぼったという。隆信は、岩屋・宝満・立花の三城と荒平城との通路を遮断し、弟信周を将として荒平城を攻めさせたが、城の守りが固いため、速攻を止めて遠攻めにすることになった。ところが、執行種兼等が奇襲して城内に討ち入り、これを機会に龍造寺勢が一度に城に攻め入ったため、荒平城は遂に陥落し、城主臼杵鎮富は和を請うた。

その後、糟屋郡の立花城攻略にかかったが、筑紫広門の斡旋によって講和した。筑前の問題が落着したので、国分けを議し、筑前十五郡の内、西南の九郡を龍造寺領とし、東北六郡を大友領に定めた。『肥陽軍記』・龍造寺記・九州治乱記』等には、立花・岩屋・宝満等大友方の城付を除いて、その他は龍造寺領となっている。



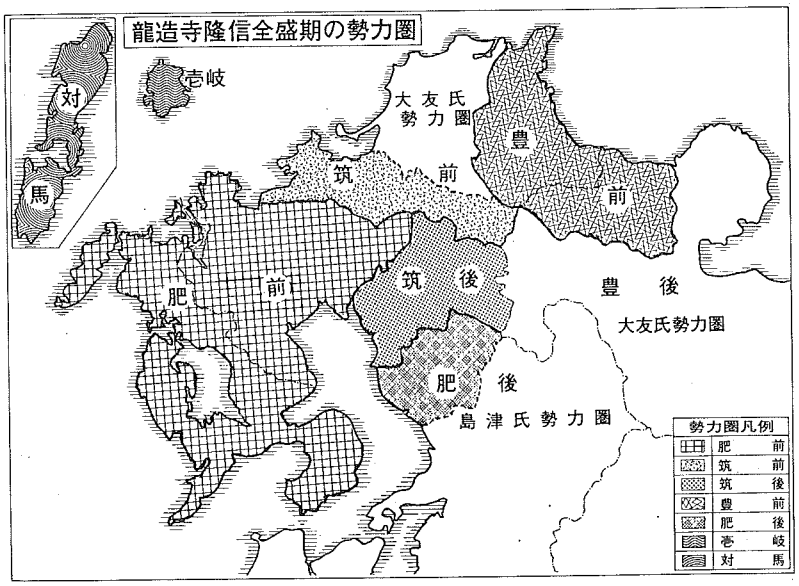
龍造寺隆信の画像（水ケ江１丁目宗龍寺蔵）

隆信は、豊前討伐を企て、自身は博多に出て、弟信周を将として豊前に派遣した。秋月種実の弟高橋元種は豊前京都郡馬ケ岳城の城主であったが、信周を自分の居城に入れたため、城井鎮房・長野鎮辰を始めとして規矩・田河・中津の諸郡の将士は一戦も交えず龍造寺氏に帰服した。信周は、暫く豊前にとどまった後、帰国した。

隆信は、筑前の内九郡、豊前の内三郡を従えたので、小田増光・空閑可清・副島放牛その他を内野・荒平・柑子岳・飯盛・鳥飼の諸城に置き、博多に代官を置いて佐賀に帰陣した。

筑後の柳川城攻略は長期に及んだので、田尻鑑種が種々説得した結果、城主蒲池鎮並も十一月二十八日龍造寺鎮賢の陣に来て和を請うに至った。そこで、龍造寺軍は囲みを解き軍をかえした。

龍造寺隆信は、肥前・壱岐・対馬・筑後を平定し、肥後北部の諸将を従属させ、西筑前の九郡と豊前の北半を領有したので、世に五州二島の太守と呼ばれ、龍造寺氏の全盛時代を築いた。『歴代鎮西要略』には、このころの龍造寺氏について、「是に於いて隆信は、佐嘉の城を政家（鎮賢）に譲り、自らは須古城（高城）に移り、鍋島清房を政家の後見とし、龍造寺信周がまた政家を補佐し、龍造寺家就



・納富信景等を国宰として国政を執行した。隆信を五州の太守と称するのは、思うにこの時のことである。」と述べ、また、「その旗下に属し、その指揮に従う兵は十二万騎に及ぶ。島津は日州（日向）の勝戦（耳川の役）より武威を振ひ、肥後を跨げ豊後を掠む。ここにおいて、島津・大友・龍造寺鎮西を三分して各其の一つを有つ。恰も三国の鼎の如く、また、九州二島を併呑せんと欲す。」と記している。

佐賀龍造寺八幡宮旧蔵の史料中に、隆信が五州二島の太守といわれた最大版図の時代を内容とした『隆信公幕下着到』という分限帳があった。着到とは、催促に応じて馳せ参じた軍勢の名を奉行所に書きとめる文書をいうが、肥前では分限帳を着到といっていた。『隆信公幕下着到』には、年代を記してないが、天正八年と推定される。[20] 成松家に襲蔵されている『隆信公御

一族并御家幕下之侍名前附』には、内題に、「天正八年肥筑豊太守龍造寺山城守藤原隆信公御家并御家中幕下侍付写」とある。しかし、肥後の諸将の名前からみて天正八年以後のものもあるので、天正九年の夏頃に一部書き加えたのではないかと考えられる。

この二種の分限帳には、互いに多少の出入りがあって、どちらが原書を写したものか不明であり、また、武将の通称や実名も時代にあわないものもある。しかし、この分限帳によると、肥前は、侍数合計二〇五人・知行合計五万三千二百十六町、肥後・筑前・筑後・豊前などにおける幕下三四人、知行合計七万三千百三十一町となっていて、龍造寺氏の勢威をうかがうことができる。

注

① 宗氏は対馬が本領であるが、肥前東部にも所領があり、少弐氏譜代の城将となっている。
② 『武雄鍋島家文書』
③ 『龍造寺系図』『鍋島系図始龍造寺』
④ 『多久家文書』
⑤ 同　右
⑥ 同　右
⑦ 直通のことは、後記『越後入道宗佐（直通）伝』を参照す。
⑧ 『嬉野系図』『越後入道宗佐伝』
⑨ 『五條家文書』
⑩ 同　右
⑪ 『五條家文書』
⑫ 『光浄寺文書』
⑬ 『松浦家系図』
⑭ 『龍造寺家文書』
⑮ 同　右
⑯ 『田尻家文書』
⑰ 『龍造寺家文書』
⑱ 『田尻家文書』
⑲ 同　右
⑳ 『肥前史談』第十六巻二号所収「龍造寺隆信五州時代分限帳」

○主な参考文献
『九州治乱記』『歴代鎮西要略』『隆信公御年譜』『隆信譜』『藤龍家譜』『松浦家世譜』『鍋島直茂公譜考補』
『肥陽軍記』『普聞集』『歴代鎮西志』『龍造寺

(四)　隆信の晩年

1　政家の肥後・筑後経営

龍造寺隆信は、天正八年（一五八〇）に家督を子鎮賢（政家）に譲って隠居したといわれているが、一説には九年ともしていて一定していない。また、隠居した月も二月、四月あるいは十月などの説があって明確ではない。武雄鍋島家に、隆信が三子の家信に与えた四月二十日付の置文①があるが、その内容は後事を戒めたものであって、中に、「信昌（鍋島信生）の内心は吾等と同じ意見のようであるから、吾等が死後のことは信昌に相談せよ。」とある点からみると、正に遺言状であり、その書かれた時期は隠居の時から余り永くならない頃であろうと思われる。

この頃になると、隆信の行動も次第に弛緩してきて、遊興に耽り、詩歌・管絃・猿楽などに打興じたといわれ、平井氏の時代に盛んに行われ、その後、姿を消した須古踊りも復興させたという。鍋島信昌（信生）は憂慮して諫言したが、その効果はなかった。『歴代鎮西志』によると、当時の奉行勝屋勝一軒が信生と不

和で信昌のことを隆信に讒言したため、信昌の諫言は用いられなかったという。

薩摩の島津氏は、日向の臼杵郡耳川の役で大友氏を破り、日向一円もその支配下に置いたので、従来大友氏が分国としていた肥後にも侵入するに至った。天正九年（一五八一）には、老臣新納武蔵守久純に下肥後の諸将を招致させたので、大友氏も志賀等の諸将に筑後・肥後を経略させようとした。隆信はこれに先立って天正九年の二月、龍造寺家晴及び鍋島信昌に命じ、諸城将等から質子を徴させた。

隆信は、前々年盟約した球磨郡人吉の城主相良義陽の外舶田郡隈本の城主城親賢等を招致した。三月十七日に、親賢は木庭教心や城統勝等と共に起請文を出し、益城郡御船の城主甲斐宗運も隈荘の城主隈荘親教や一族五名と共に起請文を出した②。しかし、肥後の将士で起請文を出さぬ者もあったので、肥後経略の必要を感じ、肥後へ出陣することになった。

隆信は佐賀の城に入って留守をすることにしたが、筑前が手薄になることを心配して、秋月種実・筑紫広門に下知して筑前を抑えさせた。肥後へ出陣した龍造寺鎮賢は、四月九日、山門郡瀬高通を進み、肥後に入った。

十一日に山鹿郡山鹿に着いたところ、小代親伝・菊池郡隈府の城主隈部親泰・玉名郡蘇岳城主大津山資冬等が参陣して、十三日赤星親隆を隈府城に攻め、二十一日出奔させた。またその間に甲斐宗運・合志郡竹迫の城主合志親為等も城親賢・赤星統家・相良義陽以下の肥後衆と共に参陣した③。次いで山本郡霜野の城主内古閑鎮房を攻めることにしたが、鎮房は二十二日に開城して和を請うた。鎮賢は肥後経略が一応落着したので、肥後警備のため玉名郡高瀬・南関、山鹿郡山鹿に龍造寺の一門などをおいて、軍を還した。

六月四日、隈部親泰が相良義陽に与えた起請文④によると、三氏一致の変更なきを誓っており、五日には天草島の志岐鎮経⑤、十二日には赤星統家⑥、十六日には蒲池鎮運⑦、九月八日には相良義陽がそれぞれ隆信に起請文を出している。

蒲池鎮並は、天正八年十一月に隆信と和したが、天正九年（一五八一）に三潴郡の西牟田鎮豊に使者を出し天正八年十二月十八日付の島津氏の老臣伊集院忠棟の書状を見せて、龍造寺氏と手を切り島津氏に一味したことを告げると共に、鎮豊にも龍造寺氏と手を切るように勧めた。鎮豊はそれに応ぜず、このことを隆信に内通した。丁度その頃、隆信が鎮並監視のために筑後に置いていた田原伊勢守からも、鎮並が逆意をいだいているという通報があった。そこで隆信は、鎮並を佐賀に呼寄せて誅伐することに決め、五月下旬に田原伊勢守と秀島源兵衛とを鎮並のもとに遣わし、須古の新館で猿楽等を興行するから参会するようにと伝えさせた。

鎮並は種々口説かれて、遂に五月二十六日に柳川を立ちその日の夕刻佐賀に着いた。龍造寺鎮賢は、宴を開いて鎮並をもてなし、鎮並は暫く佐賀に滞在して、二十九日の未明に須古に向かって出発した。一行が与賀馬場（与賀町）まで進んだ時、小河信貫以下が邀撃して、鎮並以下を残らず討ち取った。

『葉隠聞書』巻上に、「辻の堂辺にて、鎮並御成敗の由騒き立て候処、百武志摩守起き上り申さず候について、女房物具を投懸け、是程の騒ぎに御出でこれなきは御後れ候や、と申し候。志摩守申され候は、今度鎮並御成敗、御家御運の末となりたると存じ候へば。と頻（しきり）に落涙し、打向うべき気色これなしと申し候て、終に出合申さず候。」とあるが、この事件に対する世人の心情の一端をうかがうことができる。

隆信は、蒲池鎮並の残党誅伐を田尻鑑種に命じた。鑑種は鎮並の伯父であるため難色を示したが、遂には

その命に従い、残党の討伐を行った。鎮並の母は鑑種のもとによばれ、鎮並の弟の統春は鑑種より龍造寺氏に別心がないことを隆信に伝えて一旦許されたが、六月三日になって誅殺された。

島津義久は、天正九年（一五八一）六月二十日に、肥後の宇土城主名和顕孝と盟約を結んだ。しかし、宇土との陸路連絡には、途中に球磨郡人吉の城主相良義陽の属領葦北郡があるので、八月二十日には自ら八景尾に出陣し、弟忠平等に葦北郡の属城を攻略させた。次いで、義久は、相良義陽に、水俣・津奈木・湯浦・佐敷・一野瀬の五属城を譲らせて講和した。義久はまた、九月に大友方の諸将を降すため、忠平に命じて益城郡に討ち入らせた。

龍造寺方である阿蘇大宮司惟種、その部将甲斐親直及び相良義陽は、南関に在番している龍造寺家晴に援兵を求めた。そこで、家晴は甲斐親直の居城地御船に軍勢を派したが、忠平はやがて八代に軍をかえした。



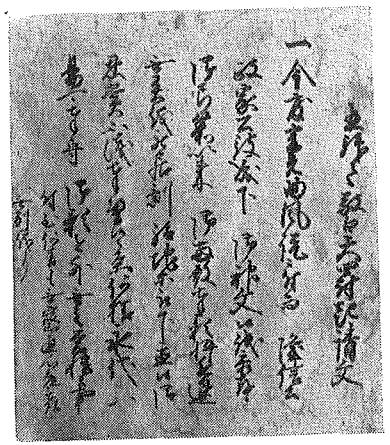
蒲池鎮並外一行の霊碑

『普聞集』には、親直が撃退したとあるが詳かでなく、島津氏の臣上井覚兼の日記によると、甲斐親直は益城郡隈荘の城主甲斐上総介を質として島津氏に送っている。しかるに十二月二日、相良義陽は義久のために御船の城を攻めようとして、かえって甲斐親直に襲撃され、斬られている。

このようにして、肥後の南部は島津氏の勢力下に入り、龍造寺氏との関係も薄らいできたので、隆信は新領の保全のため、玉名郡横島城に下村生運を検使としておき、島原半島の安富純泰を在番させた。

天正十年（一五八二）二月、筑後上妻郡猫尾城主黒木宗英が謀叛を起し城に籠ったので、龍造寺政家（鎮賢）は鍋島信生（信昌）と議し、これを攻めることにした。しかし速攻をさけて、糧食の欠乏を待つことにしたが、草野長門守が調停に入り、宗英は質人を出して開城した。

八月二日、政家と信生は、山門郡瀬高上荘に、鵜飼いをかねての舟遊びに出向き、田尻鑑種及び蒲池家恒を招いた。しかし、川狩りに託して鑑種と家恒とを討つ計画であるとの風聞が流れた。家恒は、神文を以て龍造寺氏に対し異心のないことを詫びるようにと、鑑種にすすめたが、鑑種はその風説に怒った。このことは、隆信父子や信生にも聞えたが、根拠のない風説に過ぎなかったので、八月十八日に隆信父子から鑑種に対して疎意なき旨の神文を出し⑧、信生・小河信貫・納富家理からも十九日に同じ趣旨の神文⑨を鑑種に出した。そこで、八月二十一日に鑑種からも神文をもって別心のないことを隆信に誓った⑩。



しかし、鑑種はすでに鷹尾の城に立籠ったので、実否を糺すため隆信は政家と共に、神文を以て別心のない旨を鑑種に申し送った⑪。鑑種は、龍造寺氏と手切のため近在の在家をことごとく焼き払い、江浦・堀切・津留・浜田の四か所の端城に、それぞれ田尻了哲・鎮永・鎮直・鎮富を配し、龍造寺軍の来襲を待ち受けた。



田尻鑑種起請文（『龍造寺家文書』）

隆信は、龍造寺政家を主将として、田尻鑑種の居城鷹尾城を攻めさせたが、落城しないので、鷹尾の城攻めは暫くおいて江浦の端城の攻撃にかかった。龍造寺軍はこの端城に猛攻を加えたが、陥落しないので、再び本城の鷹尾城を攻めることになった。隆信は戦況を聞いて、自ら出馬することになり、龍王崎（有明町）から出船して筑後榎津に上陸し、鷹尾城を囲んで攻めたが陥落しなかった。そこで隆信は軍をかえして須古に引揚げ、龍造寺軍は速攻をやめて遠攻めにすることになり、政家と信生も柳川城に引揚げた。

時を同じくして、上妻郡戸原の戸原親運も龍造寺氏に叛いたので、政家は田尻攻撃をそのままにして十月十四日に戸原攻撃に取りかかった。猛攻を加えたが、城兵がよく防ぎ攻撃は困難を極めた。しかし、遂に城は落ちて、城主親運は逃亡した。

この頃、薩摩の島津忠平・伊集院忠棟は、肥後に在陣し龍


赤星統家質子磔殺地の地蔵尊

造寺方と戦ったので、十月に龍造寺氏も肥後の諸城に番人を加えた。すなわち、玉名郡横島の城番には高来衆が当るよう隆信から下知があったので、有馬鎮貴は安富徳円を差し出し、安富純泰以下高来衆が十月九日より肥後へ渡り、検使として佐賀から下村生運が派遣された。

龍造寺軍に包囲された鷹尾城主田尻鑑種は、十二月中旬に島津氏に援軍を依頼したので、翌天正十一年正月十三日に島津氏の援軍が到着した。このことが肥前に伝わり、隆信は再び柳川まで出陣し、暫くとどまって田尻征伐について打合せを行った。その時に、肥後の赤星統家に異心があるとの風説があったので、統家が質子として出していた十四才の息子新六郎と八才になる娘とを、三池郡竹井原（高田町下飯江）で隆信は磔殺した。また、この頃に筑後高良山大祝部鏡山安実も隆信に叛いたとの風説があったため、隆信に質として出していた妻女が磔にされた。赤星統家は、忠平の陣所に赴き、島津氏の援助を懇願して、隆信に叛するに至った。

2　島原の戦

島原半島の有馬氏が天正十年十月ごろ龍造寺氏に背き、島津氏に通じた。島原半島の深江城主安富氏は、

源頼光八代の後の頼清が、高来郡深江村の地頭職となって、此地に下向して以来の家柄で、龍造寺氏に通じていた。城主安富純治は、島原城に居り、純治の子純泰は隆信の命で肥後の横島城に城番として入っていたため不在であった。これに乗じた有馬鎮貴は、深江領内に侵入し、その居城に来襲した。留守を守った純泰の妻女は、留守居の者や村民を率いて防ぎ、領内三か村の住民と牛馬まで城内に引入れて城を支えた。

安富純泰は、敵襲のことを聞くと、肥後から急いで帰城した。有馬鎮貴は、肥後八代に在陣中の島津忠平に援軍を依頼した。忠平の部将の『上井覚兼日帳』や『藤原有馬世譜』等によると、忠平の部将川上久隅が十一月二十三日に有馬へ出援を命ぜられて、十二月四日に渡島し、千々石の塁を陥れ、戍兵（じゅへい）を留めて引揚げた。鎮貴は忠平の八代陣に至って、重ねて懇願したので、忠平は同十五日の夜に鎮貴を旅宿にたずね、二十三日には陣中で弟家久・忠長等と会し、肥後・肥前等の処置について議している。翌天正十一年正月六日に、忠平は部将比志島国貞を有馬に出援させた[12]。一方、深江城は家人・農民等が純泰夫妻を助けて戦い天正十一年を迎えた。

有馬鎮貴は、天正十一年（一五八三）三月にかさねて島津氏に使を出し、手火矢衆の派遣を求めている。このような時、深江氏の一味であった安徳純俊は、急に有馬氏方となって、四月二十八日には島津勢を城中に入れ、佐賀への通路を遮断して龍造寺氏に叛いた。この間、島津忠平は部将を遣って、有馬勢と共に安富氏の深江城を攻撃させたが、激戦実に十八昼夜に及んだという。隆信は注進により、江上家種等を深江城に派遣すると共に、藤津・杵島両郡の諸将にも出動を命じて、兵糧用として半島内の多比良村五十町の田地を与えたので、純泰も籠城を続けることができた。

島津義久は、八月二十四日に弟家久・宿臣伊集院忠棟等を肥後に遣わして、有馬氏援助について計らせ、十月一日には使いを八代に出して、有馬氏救援に尽力させた。ところが、十月に入って、龍造寺氏との間に和議が成立したので、有馬氏への援助を止めることになり、二十三日に鎮貴にこの旨を伝えた。

龍造寺隆信は、筑後の田尻鑑種攻撃も余りに長陣となったので、鍋島信生と議し、まず江浦城から攻略することにした。秋月種実は、和平の調達に乗り出し、龍造寺・田尻両氏の内諾を得、七月二十一日に神文[13]を取交わして和平が決定した。しかし、救援を頼んでいた豊後の大友義統から八月十七日に、近日救援することを告げ、また『上井覚兼日帳』によると、十月十一日には八代にいた島津忠長・伊集院忠棟等が鷹尾城の糧食輸送について議している。そのような外部事情から、龍造寺・田尻両氏の和議はくずれてしまった。



田尻鑑種の籠城は、五〇〇日にも及んだので、鍋島信生は百武賢兼を招いて、和議を成立させるよう頼んだ。そこで賢兼は、田尻了哲に対面して和平のことについて談合した。了哲は田尻鑑種を宥めたため、鑑種も心が解けて和平に応ずることに決した。十一月二十七日には、隆信父子が別儀ない旨の起請文[14]を鑑種の長子長松丸に送り、和議がととのった。

田尻鑑種は、当時法体であったので、十二月朔日に嫡子長松丸名義の起請文と一門九名連署の起請文を龍造寺氏の



田尻長松丸起請文（『龍造寺家文書』）

老臣小河信貫に出した。十日に小河信貫・土肥信安・納富家理の三老臣が連署で、長松丸に起請文を出し、また、勘忍分として隆信父子は二十五日に、長松丸に佐賀郡巨勢の内二百町の地を知行として与える連署の判物を出した[15]。田尻鑑種は、四か所の端城を破却して堀切城に移り、これと前後して鷹尾の城を開城した。

これより先、天正十一年九月十八日、島津義久の将伊集院忠棟等は、益城郡堅志田を攻め、十月八日には義久の属将宇土の名和顕孝が益城郡隈荘を攻めた。しかし、龍造寺政家は、玉名郡の地だけは確保していて、この地の広福寺某を住持職等に安堵させ[16]たり、あるいは、小代氏に知行地を与えるなどをしている。しかし、政家は自身肥後に出馬して、味方の諸城将を援けることに決し、筑後の田尻攻めは多勢を以て抑え置き、十月十日に大軍を率いて出馬した。

政家は、瀬高通りより三池郡竹井原を過ぎて肥後に入り、玉名郡南関に本営を置いたが、先陣は合志郡まで進んだ。島津忠平はこれを聞くと、一戦に及ぼうと兵を集めてこれ

に当らせた。秋月種実は、島津義久に龍造寺氏との講和を勧め、忠平と議し、更に使僧を義久のもとに派して講和を勧めさせた。一方政家は、部将の成富長門守を派して、島津氏側の赤星周防守と折衝させ講和を成立させた。

『上井覚兼日帳』によると、十月十一日には島津忠長が鷹尾城に糧食を送っており、二十三日には伊集院忠棟と上井覚兼などが協議して、反龍造寺氏の有馬鎮貴に以後赴援せぬことを通知しているので、和議の成立は十月十一日から二十二日までの間である。その和議の内容は、肥後国を分割することであって、『九州治乱記』『龍造寺記』には、「最前約束の如し」とあるが、『肥陽軍記』には、「肥前・筑前・筑後・豊前の四か国は切取りの国なれば、龍造寺の御支配たるべし。大・薩・日の三州は申すに及ばず、大友をほろぼし豊後までは島津より領し申すべし。肥後国をば両家より半国充領し、九州の両大将と仰がれ候べしと約諾、畢って帰国す。」とあり、又「古士の説に、肥後国は高瀬川限と御約束有り云々」とある。

こうして、高瀬川より巽（東南）を島津領とし、新納忠元を益城郡御船に置いて領国を守らせた。乾（西北）は龍造寺領として、龍造寺家晴を南関にすえ置き、太田家豊・内田栄節を大野別府に、横岳頼続・姉川信秀を横島城に置いて、各々その境を警護させた。

龍造寺隆信は、深江城の安富純泰に増援するため、天正十二年（一五八四）二月、島原半島の神代貴茂を深江城に送り、藤津郡の原・宇礼志野・吉田・永田等の諸将をもって有馬氏を抑え、彼杵郡の大村信純を居城の大村三城にすえ、龍造寺軍は有馬氏救援の島津軍と諸処に戦った。

この頃、島津忠平が肥後八代に在って、同国の大半を横領しようとしているという風聞があり、また、肥後合志郡の合志親為も島津氏に降服したため、龍造寺氏は肥後に出陣することに決し、二月十三日に合志親為の竹迫の居城を攻めた。

『上井覚兼日帳』の二月二日の条によると、島津義久は有馬出兵をすでに決定して、領内に触れ、造船を命じている。義久の弟家久が三千余人の軍勢を率いて、島原半島の有家に着船し、安徳純俊の城に入った。そこで、深江城では龍造寺氏に注進して、援軍を求めた。『肥陽軍記』には、

政家は有馬の聟なれば、その好を棄て難くて緩々の沙汰を致すのか、不日に自ら発向して、ただ一踏に潰して島津を滅し、九州を打治め、豊前の大里の浜に到って秀吉を待受け、家の安否をきわめよう。肥前・筑前・豊前の輩は我に従うて有馬に来れ、筑後・肥後の輩はすぐに薩摩口へ向かい、我が有馬を討って薩摩に入るを待て。

とあって、隆信の意気を伝えている。陣触れについては、『九州治乱記』に、

隆信・政家高来発向の跡の儀は、鍋島剛意入道（清房）を留守居とし、龍造寺越前守・納富但馬入道両人城中にありて、諸事剛意と示し合せ国衙（龍造寺氏の城）を守るべし。鍋島飛驒守は弥々柳川の城に居て筑後を抑え、龍造寺上総介は南関に在りて、以前の如く肥後の分内を相守れ、龍造寺安房守は、去々年より一の岳の城に居住するの間、弥々其のままにて内野・安楽平・飯守等の番人共と事々談合し、筑前・豊前の領分を守護すべし。其餘大村・松浦の輩は、船より神代の港へ出勢し、佐嘉・神埼・三根・養父・小城の郡士は、皆隆信・政家が旗本たるべし。

と下知したことを伝えている。

『鍋島直茂公譜考補』には、「安房守は城に在って」として、一の岳城のことはなく、「豊前は馬ケ岳の城を以て鎮むべし。」と見えている。

隆信は、須古を発し、三月十八日に龍王崎（有明町）から神代湊（長崎県国見町）に向かった。『九州治乱記』によると、神代湊に二十日に着いているので、その間二日を要しているが、これは伊佐早（諫早市）に回り一泊しているからであろう。それは、『上井覚兼日帳』によると、平田光宗書状に、「伊佐早より落人来り候、龍造寺隆信頃彼方へ着き候云々」とあり、耶蘇会士バードレ・ルイス・フロイスの日本通信に、「三月二十日異教徒なる青年一人逃がれ来って、隆信はすでに全軍と共に伊佐早の城に在り、と言った。」とあることからも明らかである。

龍造寺軍の兵数は、『九州治乱記』等には五万七千人余とあるが、実際は、『古今戦』や『フロイスの日本通信』に記されている二万五千余ではなかったろうか。龍造寺軍の準備は、耶蘇会士フロイスの観察のように、極秘のうちに行われたものではなく、非常に迅速にしかも予想を上まわる大軍が動員された。

島津家久は、陣列を定め、川上久信・平田光栄、肥後の相良衆を島原城の抑えとし、豊久に老功の新納忠元を添えて一里余離れた村中に伏せさせ、戦いたけなわの時に龍造寺軍の中堅を突かせる策をとった。また船を沖に引かせて、背水の陣であることを示した。

家久は、深江城を攻めて安徳城に入り、間もなく有馬から五里の島原の森ケ嶽に陣を布いた。森ケ嶽の陣は、正面が泥濘の深田で、中に一筋の細道が通じているだけであるが、この細道の正面に城戸を構えて、城戸の左右に防壁をめぐらした。一方、有馬鎮貴の伯父天草伊豆守所属の船には、砲を積み、また、火器を持

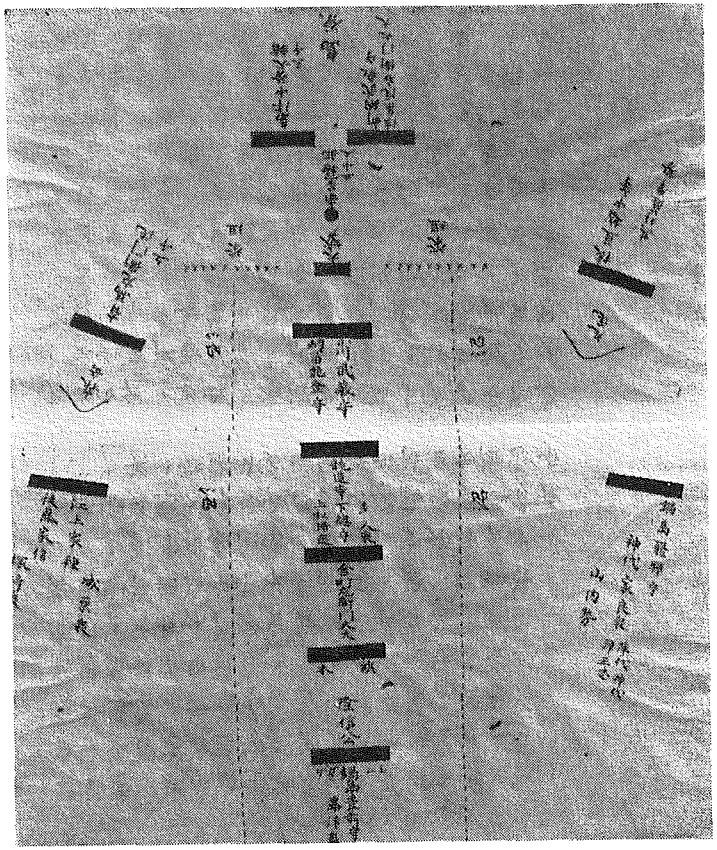
った武士を乗せて、海岸通りの龍造寺軍を砲撃させることにした。

三月二十三日までに、龍造寺軍は神代または三会村に到着したので、二十三日に島津軍を三会村で破り、二十四日に有馬・島津両軍の本陣である島原の森ケ嶽城を攻撃することになった。軍を三手に分け、一手は龍造寺政家に鍋島信生を添えて敵陣の追手口に向け、一手は江上家種・後藤家信を浜手に向かわせ、残りの一手は隆信の本隊で山の手に押寄せることにした。本隊の先手は小河信俊（信貫）・納富信理、二陣は龍造寺康房、三陣は倉町信俊、隆信の馬廻りは福地・江副・安住以下、殿は藤津衆である。軍奉行は成松信勝・百武賢兼・円城寺美濃守・高木入道太栄、軍監は勝屋勝一軒と定められた。なお、フロイスの書簡には、大村純忠の子喜前も見えている。

龍造寺軍は二十四日の総攻撃に先立ち、その日の未明に下村生運・久納市右衛門等を大野城に遣わして、敵の通路を遮断させた。また、手分けの変更があって、隆信は中道に、信生等が山の手を受持つことになった。

島津・有馬両氏の兵数は、フロイスの書簡によると、「薩摩の兵は日々増加し、このころの在陣者は七千人を越え」とし、更に、「その兵は甚だすぐれ、戦争に慣れ、更に兵数の増すのを待って、島原の城を襲わんと謀っている」と述べている。

一方、隆信の兵についてフロイスは、はなはだ優れ、また、立派にして戦いに熟練する者であると記し、更にその陣容について、「彼の奉ぜる悪魔が、彼に教えたと見え、その軍隊の配備は、欧州の戦術を手に入れたものと思われる。」と述べている。また、龍造寺軍について、フロイスは、「モスケテ銃に似た長銃一千を



島津・有馬攻めの龍造寺勢陣営図（『鍋島直茂公譜考補』）

備え、次には鑓千五百がある。この鑓は金色であったという。其の次には長刀の一隊と弓矢の一隊があり、少数であるが大砲を備え、次に最初と同じ銃隊があり、合せて七、八千人と伝えられた。そうしてこの次に鑓隊があり、また、高良山の座主にして日本において著名なる高貴の坊主並びに一五人ないし二〇人の坊主が隆信に随伴し、悪魔の助けを祈った。また、名をシュイチゼンという大妖術家、また卜者なる一人の顧問は毎度悪魔と語っていた。また、龍造寺軍は攻防の武器と糧食弾薬、その他必需品を充

分に備え、速やかに戦いを終るため、短い木の一端に光ったものを多く持って来たが、これを有馬軍の防柵の壁に刺し、梯子のように上り柵の内に入って戦わんためである。」と記している。

島津軍について、フロイスは、「薩摩軍は、初め敵の来るのを見、その数甚だ多かるべしとは想像さえせず、己が力を信じ、短時間に之を破って全滅させることは容易であろうと考えたが、島原より三会に至る野は、ことごとく兵をもって蔽われ、軍隊以外には何物も見えぬ、しかもその兵は優秀で、武器は甚だよく、剣及び短剣の鞘も金銀の装飾が施され、兵士は皆青年で体格頑強なるを見るに及び、薩摩の兵は色を変じて相顧み、その唇及び頤を震わせ、死の汗を流した。」と記している。

戦いの開始は、『舊典類聚』や『古今戦』には、「たつみの刻（午前八時すぎ）」とし、『川上左京系図』には、「辰尅（午前八時すぎ）」、『長谷場越前自記』には、「巳の刻計（午前十時すぎ）」とし、フロイスの書簡や『日本西教史』[17]等には、「朝八時」とある。

龍造寺軍は、三手に分れ、政家・信生は山手に沿い、隆信の本隊は中道を通り、家種等は海岸に沿って進んだ。フロイスの書簡によると、「隆信は肥満のため、六人担いの駕籠に乗って軍の中にあったが、初め高い丘に上って島津・有馬の陣営を望見し、その兵数の少ないのを見て大いに笑い、おごりたかぶって、予は此のように少数の兵と戦うために軍備をなしたのではない。むしろ薩摩の兵のことごとくがこの地にあるのを大いに喜んでいた。そうすれば勝利は日本の諸国に語り伝えられ、更に有名になったであろう。といった。」と述べている。隆信が敵を侮ったところに、一つの敗因があったのではないかと考えられる。

戦いの開始についてフロイスは、「月形に非常な勢いで進撃し、家久及び鎮貴の陣営を囲み、まず五百挺

の銃を発射した。有馬勢はこれに応じて平伏し、次に鑓をもって襲来するのを待受けた。鎮貴も非常な危険に瀕した。」と記している。

浜手へ向かった龍造寺軍の江上家種・後藤家信等は、有馬鎮貴の伯父天草紀伊守が率いる兵船からの砲射撃に悩まされたらしく、フロイスの書簡には、「一部は遁走し、一部は中央の隊と合した。」と記されている。

龍造寺軍が有馬鎮貴の陣に迫り、鑓で戦った際、「両将（鎮貴兄弟）が少しも恐れず応戦したので、薩摩の兵は両人がまだ年わかく、且屈竟でもなく、又この時までかかる危険に瀕したことも苦戦に臨んだこともないのに、このように勇ましいのを見て驚いた。」とフロイスは記し、更に、「彼等の顕著な行動は、家臣及び彼を救援せし薩摩の異教徒の心中に非常に評判を高めた。」と述べて、鎮貴兄弟の奮闘を賞賛している。

両軍の戦闘について、フロイスは、「敵（龍造寺軍）は再び防柵に来襲し、薩摩の兵は出でて戦ったが、すでに幾分疲労しており、極度の危険に陥った。」と述べ、更に、「背後には海の外何もないので逃げることができず、前面には二万五千の敵あり、その大部分は未だ戦っていないのに注目する必要がある。そこで彼等には唯この一事を記憶させるに留めた。即ち、全員必ず死すべきが故に、薩摩の名が臆病のために消滅するような戦いをせず、少しも恐れることなく勇猛に突進すべきなり。」と激励したと記している。

この激励と共に、有馬・島津の両軍は寄手に向かって乱射を開始した。これは、龍造寺軍を射程内に入れて猛攻を始めるという島津家久の策戦であったと考えられる。『九州治乱記』には、「柴垣の間より弓・鉄砲を放つこと、ひとえに雨の如し。」とあり、『島津軍記』には、「島津忠豊（家久の子）は、雲霞の如き

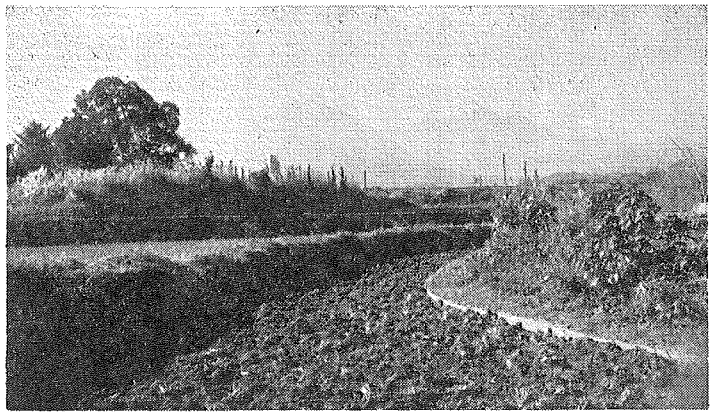
大軍にも機を屈せず静まり控え、待掛けたが、敵軍急に進むに路狭く、泥深くして軍列整わざるを見、時分はよしと下知すれば、鳥銃連発して繁きこと雨の如し。」と記されている。フロイスの書簡によると、隆信は、「自ら喜んで一同に対し、はるかに多数の兵力と弾薬を有するが故に、勝利を得んこと必定である。恐るることなかれ。」と述べて激励したと伝えている。

龍造寺軍の先鋒が、有馬・島津両軍の猛火を浴びて崩れ立ち、第二陣がこれを助けようとしても細い中道の左右は泥沼で、これを助ける方法がなく、敵の的となって射伏せられた。進むに進まれず、退こうとしても後につかえて退かれず、この状態を見た隆信は、吉田清内に先陣の様子を偵察させた。清内は勝手に敵へ向かって進攻するよう命じたので、龍造寺軍は沼田に駈け入り無理に進撃しようとした。そのため、敵の猛射を浴びて、混乱に陥ってしまった。この時、有馬・島津の両軍が城戸を開いて、一時に切りかかってきたので、龍造寺軍は総崩れとなり、小河信俊・龍造寺康房を始め有力な武将が多く討ち取られた。

フロイスは戦況について、「戦いは激烈にして両軍鑓を構える余地なく、薩摩の兵は傷を蒙ることも顧みず、前に鑓なきが如く突進した。銃には弾丸をこめる暇がないので、弓矢を大いに用いた。彼等は熟達しているため、敵は少なからず苦闘した。」と述べている。

乱戦にまぎれて島津勢は、隆信の旗本に乱入してきた。隆信の乗った駕籠の後方で戦いが始まったが、隆信は部下の争いと思い高声でこれを制止したという。その時、島津軍の武将川上左京亮忠堅が進んで、隆信を討ち取った。五州二島の太守とうたわれた龍造寺隆信は、波瀾に満ちた戦国武将としての一生を終った。

龍造寺の四天王と称された成松信勝・百武賢兼・江里口藤七兵衛・木下四郎兵衛の四武将があった。成松



沖田縄手古戦場推定地（島原市）

信勝は、『成松遠江守信勝戦功略記』によると、隆信の戦没を知るや家来一七人を集め、小高き丘にかけ登り、最早己も死時なるぞと、日の丸の扇をひらいて敵をさしまねき、「先年大友親貞を討ち取った成松刑部少輔はわれなり。」と名乗り敵七人を斬って討死した。百武賢兼は、『義久公御年譜』に、「百武志摩、是は隆信頼切にて候者也。」と注しているが、主従四〇余人隆信を逃さんために、近づく敵と戦って一人も残らず戦死した。江里口藤七兵衛は、隆信の首が敵陣に在ることを聞き、敵中に紛れ込み敵将島津家久に斬りかかったが、遂に討ち取られた。木下四郎兵衛は、鍋島信生が退却するのに追いつき、船場まで護衛した後更に引返して戦死した。

浜手に向かった江上家種・後藤家信は、それぞれ本領に帰り、山の手へ向かった鍋島信生は敵に追い迫られたが、鍋島平五郎等がよく守護して難を切り抜け、船で筑後に渡り柳川に帰った。

この戦いで龍造寺軍の戦死者は多く、フロイスの書簡には、「島原から三会に至る平野にも二千人を越える死屍があり、負傷者の数は三千人に及んだ。」と記し、戦死者については、『肥陽軍記』に、「此外御一門、他家のれき〳〵二百四十余人打死」とし、『九州治乱記』『鍋島直茂公譜考補』等には、「今度龍造寺の諸勢討死の侍、都合凡そ二百三十余人。」としている。また、『義久公御年譜』には、「戦死者三千人余手負い一万人余」とあって、この戦いの激しかったことを、物語っている。

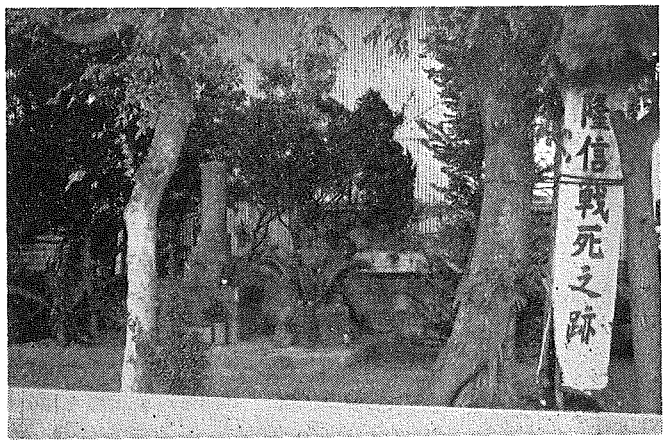


島原合戦龍造寺政家の感状

龍造寺軍は敗退し、高来郡の諸城は島津勢によって攻略され、井福（伊福）の諸城もまた落城した。深江城の安富純治は孤城を守り、子純泰に龍造寺氏への忠節を諭して、五月十五日に戦死した。また、深堀（西郷）純賢も、島津軍や有馬鎮貴からの和平を退け、孤塁を守った。

龍造寺隆信が戦没すると、佐賀の龍泰寺大圭和尚は島原の戦場跡を訪れて、隆信の遺体を高来郡湯江の和銅寺で荼毘に付し、龍泰寺に葬った。法名を龍泰寺殿泰巌宗龍大居士、後に隆信院殿または法雲院殿と号した。

島原の戦果は三月二十五日に、佐敷の島津義久の陣に達したので、義久は二十六日に島津氏の勝軍の際における佳例により、鹿児島城下の福昌寺に施餓鬼を依頼した⑱。また、龍造寺軍戦死者の墓を島原に造



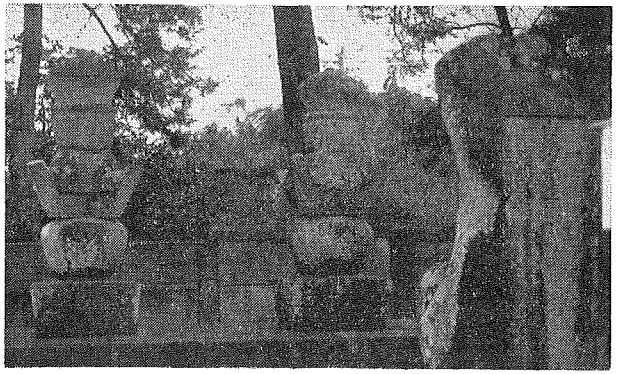
隆信戦死の地と供養塔（島原市）

ると共に、敵味方亡者のために、晩夏の頃福昌寺代賢大和尚を始め、薩摩・日向・肥後の僧衆二千余人を島原に集めて大供養を厳修した[19]。

龍造寺隆信の首級は、肥後の佐敷において島津義久の検視に付された[20]後、筑後榎津に運ばれた。佐賀の城では受取ることを断わったので、島津義久は肥後高瀬の願行寺に葬った。隆信は、戦没地の近くに建立された二本木神社にその霊を祀られた。また、法華宗護国寺にその墓が営まれた。天正十六年（一五八八）鍋島信生は隆信の菩提を弔い、併せて城の鎮護のため鬼門の地を選び、圭頓を開山として曹洞宗宗龍寺（水ケ江一丁目）を開創した。これと前後して肥後阿蘇神社の祠官木山祐憲は、隆信の冥福を祈るため、佐賀の城下に真宗善定寺（与賀町精）を開いた。延享二年（一七四五）三月二十四日、藩主鍋島宗教の時、隆信の霊を深恭霊神と崇め、子政家・孫高房の霊と併せて城内萬部島（水ケ江一丁目）にあった向陽軒に祭った。なお、天保五年（一八三四）四月十五日深恭明神号を受け、佐賀郡小川村（大和町）に敷山社を建立して祭られた。明治六年十月九日敷山社の隆信の霊は、城下松原に

鎮座の鍋島直茂を祭る松原神社に遷座して祭られている。なお、隆信隠居の地である須古（白石町）の南、稲佐山麓の東明寺の背後の丘にも、深恭明神として隆信を祭ってあったが、現在では隆信神社と称している。

3　隆信陣没後の龍造寺氏


龍造寺隆信の墓（高伝寺）

龍造寺隆信の陣没後、龍造寺政家が祖母の慶闇尼と共に国政に当り、叔父長信・信周、弟家種・家信以下の近親及び宿将等がこれを補佐した。しかし、島津氏が来襲するとの流言や鍋島信生が自立を図っているなどとの風説などがあって、不安な空気もただよっていた。

政家は天正十二年（一五八四）四月八日、信生に誓紙を出して補佐を依頼したが、信生は応じ難いとして辞退したので、信周が宿将等と相談して信生を柳川から呼び戻すことに決した。信生は信周と懇談して佐賀に帰ることを承諾し、龍造寺一門の家晴を柳川城にすえて蓮池城に入った。

五月二十日に大村純忠が龍造寺氏に神文を送り、六月二日には肥後の隈部親永・親泰父子、二十四日には筑後の黒木家永も同じく神文を龍造寺氏に送った。

豊後の大友義統は、龍造寺隆信が陣没したのに乗じて、六月以降筑後方面の龍造寺方の諸城の攻略を始めた。六月に志賀入道道輝等の武将を筑後に遣わし、龍造寺方の上妻郡猫尾・高群の二城を攻めたが、龍造寺氏も援兵を送って防いだので、大友軍は退いた。戸次道雪・高橋紹運等は、大友氏に加担して筑前の諸城を攻落し、筑後に侵入して高群城を攻めた。龍造寺方から田尻鑑種が救援に向かったが、すでに高群城は落城していた。九月に入ると、猫尾城も陥落し、大友軍は龍造寺家晴が守備する柳川城の攻略に移ったが、城兵よく防いで城を支えた。筑後方面の龍造寺方は、大友軍の攻略に悩まされていたが、十月に入ると大友軍の内部に亀裂が生じたため、それ以後積極的な動きが見られなくなった。

隆信の陣没後、龍造寺氏の島津氏に対する反目は、異状なものがあったが、筑前の秋月種実が調停に入り双方に和議することを勧めた。そこで天正十二年四月には、一応龍造寺・島津両氏の和平が成立した。しかし、その後、島津氏の勢力は大友氏の領国を侵すとともに、肥後から筑後更に筑前へとのびて来た。龍造寺政家は、豊臣秀吉の命によって天正十四年（一五八六）秋、島津氏との関係を断ち、十月には筑後に軍を進めて三池城を降し、肥後に進出した。十月四日には秀吉から褒されると共に、分別ある行動をとるようにとたしなめられた[21]。

翌天正十五年（一五八七）正月二日、龍造寺政家・鍋島信生は軍を率いて筑後に入り、山下城の蒲池鑑運を攻めた。秀吉は三月二十日、黒田孝高に五條鎮定と議して肥後に進むべき準備をさせ[22]、島津氏討伐に九州に入った。四月七日、政家は信生と共に高良山において秀吉に謁した。

同十一日秀吉は肥後の南関に入り、十四日には高瀬に進んだ。四月二十七日に薩摩に入り、五月八日に島

津氏を降した。秀吉は九州を平定し終って、六月七日に筑前筥崎に凱旋し、毛利輝元等の諸将と会し、九州諸大名の封域を定めた。『九州治乱記』によると龍造寺政家は、佐賀・神埼・三根・小城・杵島・藤津・松浦の七郡を与えられ、鍋島信生に基肄・養父の両郡が与えられた。

七月朔日、肥後国に封ぜられた佐々成政は、隈部親永に領地八百町は検地した後に引渡すことを申し渡した。親永はこれを承知せず、菊池郡の居城に立籠った。これを知った秀吉は、四国・中国・九州の諸将を肥後に発向させることにした。

龍造寺政家は病気のため、名代として江上家種・龍造寺家晴を肥後に向かわせた。信生は大阪に滞在していたが、秀吉に出陣を命ぜられ、浅野長政は信生に帰国の上政家と共に出陣することを命じた。政家は信生と共に九月に出陣し、十二月には玉名郡和仁の田中城攻撃に加わった。伊佐早城主龍造寺家晴が肥後出陣中に、旧城主西郷信尚が伊佐早城を占領したので、家晴は肥後より引返し、十月十五日にこれを奪還した。

程なく肥後一揆は鎮定し、龍造寺政家は妻子や信生と共に上洛した。天正十六年（一五八八）七月二十八日、政家は四位侍従に叙せられ、羽柴豊臣の姓並びに菊桐紋を免許され、肥前守に任ぜられた。しかし、政家は病身である上に、子息がまだ三歳の幼童であるため奉公は困難であると考え、子の長法師丸（高房）が成人



龍造寺政家画像（村田家蔵）



鍋島直茂肖像画（鍋島報效会蔵）

するまで、国政を鍋島飛騨守信生に預ける旨を小早川隆景を通じ秀吉に申し出て許可を得た。

政家は帰国して一族及び重臣等と協議した。その時、祖母慶闇尼は、「飛騨守（信生）ならでは、今の天家に奉公申し家を存続すべき者なし。飛騨守は隆信と兄弟の首尾なれば、政家の家督は飛騨守取立つべし。」と提言したので、一同はこれに同意した。

十一月二十八日、政家は信生を養子とし、信生は長法師丸（高房）を養子とする契約書を信生に与えた。すなわち、政家の意は、龍造寺氏は信生に付与し、長法師丸を信生の養子とし、そのあとは伊勢松丸（勝茂）を相続させることであった。一方、政家は成富信安をもって、宿老が後に違変しない旨の神文を小早川隆景の取り次ぎで秀吉に提出した。信生は天正十七年（一五八九）正月七日、加賀守に任ぜられ、従五位下に叙せられ、秀吉からは豊臣の姓と羽柴の氏とを授けられ、名を直茂と改めた。

次いで政家は、国政を直茂に、家督を高房に譲った。天正十八年（一五九〇）正月八日、高房・直茂及び伊勢松丸は秀吉から所領に安堵された。政家は天正十八年二月二十九日、隠居分として佐賀郡太俣郷（久保田町）の内五千二百二十四石並びに軍役免除の朱印状を与えられ、高房を嗣子とした。しかし、高房は江戸詰であった慶長十二年（一六〇七）三月二十三日に妻室を刺殺し、自身も九月六日に自殺した。



豊臣秀吉朱印状（『龍造寺家文書』）

時に、二代将軍秀忠から政家に江戸詰の命があったが、病身のため次男安良、三男源四郎を名代として送った。源四郎は病死したため安良が秀忠に謁し、米八千俵の禄を賜わり、後に千俵を加増された。その後、安良は辞して、政家の隠居分の佐賀郡太俣郷を領し、勝茂に仕え、氏を村田と称した。藩の待遇は、鍋島家の御三家に次ぐ御親類として明治に及んだ。

龍造寺氏から鍋島氏に移る経緯に絡わる噂は種々あるが、これは直茂が政家と契約した家督相続の順序によらず、また、龍造寺氏を名乗らなかったことと、高房が頓死したことに起因するであろう。その後、高房の妾腹の伯庵は、寛永十二年（一六三五）修学に託して上洛の際、三代将軍家光の上洛を機会に龍造寺氏再興を訴えた。幕府は評定所で、伯庵と勝茂の代理多久安順とを対決させた。

安順は、「伯庵は下腹末々の者で、ゆめゆめ国を領する資格なし。彼がそれを主張するならば、むしろ嫡流は自分である。何故ならわが父龍造寺長信は、隆信とは同腹の兄弟であるからである。政家は病身であるため封域を直茂に譲ったが、直茂は隆信の父周家が養って子としたので、隆信とは兄弟である。兄に子なき時は、弟が家督

を継ぐのは当然である。」と抗弁した。評定所は、この論が正しいとして、伯庵の訴訟を取り下げた。

注

①『武雄鍋島家文書』
②『龍造寺家文書』
③鍋島家本『北肥戦誌』
④『相良家文書』
⑤『龍造寺家文書』
⑥同　右
⑦同　右
⑧『田尻家文書』
⑨同　右
⑩『龍造寺家文書』
⑪『田尻家文書』
⑫『上井覚兼日帳』
⑬『龍造寺家文書』『田尻家譜』
⑭『田尻家文書』
⑮同　右
⑯『広福寺文書』
⑰駐日の宣教師の報告を基礎にして、元禄二年（一六八九）にゼスイット教会のジアングラッセが編集したものを太政官で翻訳した書。
⑱『上井覚兼日帳』
⑲『日本西教史』
⑳『上井覚兼日帳』
㉑『鍋島家蔵龍造寺家文書』
㉒『五條家文書』
㉓『隆信公御年譜』
㉔『寛永諸家系図』『鍋島家譜』
㉕『龍造寺家文書』

○主な参考文献

『普聞集』『肥陽軍記』
『歴代鎮西要略』『龍造寺記』
『九州治乱記』『藤龍家譜』
『上井覚兼日帳』『田尻家由緒書出』
『田尻家譜』『水江事略』
『藤原有馬世譜』『鍋島直茂公譜考補』
『後編薩摩旧記実録』

以下の五と六に述べる内容のおもな部分は、年代的にはむしろ近世初頭に属することがらであるが、叙述の都合上中世Ⅱの末尾に配して述べることとする。